内海中寺ノ谷遺跡

県営内海中地区ほ場整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書
（第１冊）

２００５．３

財団法人　鳥取市文化財団

内海中寺ノ谷遺跡 発掘調査報告書　正誤表

頁	行	誤	正
3	26	北東	北西
3	30	西方 700m	東方 900m
4	9	西方	東方
4	20	西方	東方
4	21	東方	西方
31	6	調査地外となる。	調査地外へと延びる。
38	註 （1）表	内海中寺ノ谷遺跡 放射性炭素年代測定結果	1. 内海中寺ノ谷遺跡 放射性炭素年代測定結果
38	註 （1）表	暦年較正結果	2. 暦年較正結果
奥付		埋蔵文化財の発掘調査報告書	埋蔵文化財発掘調査報告書

内海中寺ノ谷遺跡

県営内海中地区ほ場整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書
（第１冊）

２００５．３

財団法人　鳥取市文化財団

序　　文

鳥取市は、鳥取県の県庁所在地として、また、山陰地方の中核都市として発展してきた、人口20万人あまりを擁する地方都市です。

鳥取市内には、鳥取平野をはじめその周辺丘陵に、数多くの遺跡が存在しています。これらの埋蔵文化財は地域の先人たちの生活を語る歴史資料であり、後世に継承していくべき市民の貴重な財産です。このような認識のもと、財団法人 鳥取市文化財団では、開発と文化財の共存をはかるべく、各関係機関の協力を得ながら埋蔵文化財発掘調査事業を進めています。

さて、今回実施した内海中寺ノ谷遺跡の調査は、県営内海中地区ほ場整備事業に伴う発掘調査として、平成16年７月から調査を行ってきました。調査の結果、古代と中世を主とした時期の貴重な遺構、遺物が検出され、当地域の古代文化の一端を明らかにする資料を提供することができました。ささやかな冊子ではありますが、市民各位ならびに関係各位の埋蔵文化財の理解に供していただければ幸いです。

おわりに、今回の発掘調査にあたり、ご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめ関係各位の方々に、心から感謝申し上げます。

平成17年３月

財団法人　鳥取市文化財団
理事長　石　谷　雅　文

例　　言

1．本書は、県営内海中地区ほ場整備事業の事前調査として実施した内海中寺ノ谷遺跡の発掘調査報告書（第１冊）である。
2．本発掘調査は、鳥取県の委託を受けて、財団法人鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財調査センターが、平成16年度に現地調査および報告書を作成した。
3．発掘調査を実施した遺跡の所在地は、鳥取市内海中 字寺ノ谷、南谷である。
4．発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管されている。
5．現地実測、図面の作成は、調査員、補助員を中心に調査参加者全員の協力のもとに行い、出土遺物の整理および遺物実測、図面の浄書、観察表の作成は、神谷伊鈴、下多みゆきを中心として、濱橋博子、中村真樹子がこれを補佐した。版組は、井上初恵、高垣恵巳子の手を煩わせた。
6．本書の執筆、編集は、藤本隆之が行い、永田りん太郎がこれを補佐した。
7．現地調査から報告書作成にいたるまで、以下に列記している多くの方々からの指導、助言ならびに協力をいただき、厚く感謝いたします。

鳥取県農林水産部　水産課　鳥取地方農林振興局　鳥取県土整備部　建築課　鳥取地方県土整備局
開発建設株式会社

（順不同、敬称略）

凡　　例

1．本報告書における遺構図の方位はすべて磁北を示し、レベルは海抜標高である。
2．本書に使用した遺構等の略号等は次のとおりである。

SB：掘立柱建物、SA：柵列、SK：土坑、SD：溝状遺構、P：柱穴・ピット、SX：不明遺構
KR：撹乱坑、Tr：トレンチ、▨：石、▧：木

※　遺構番号の前のアルファベット（A・B）は調査区を示す。

3．今回の調査によって出土した遺物は、遺跡名、調査年度、調査区、遺構番号、取上げ順による遺物番号（遺物台帳登録番号）、取上げ年月日を基本的に注記している。写真や図面などの記録類も同様である。
4．現地調査時の旧遺構番号と本書に使用した正式遺構番号との対応は以下のとおりである。

新旧遺構番号対応表

新	旧
SK-A02	P-A20
SK-A03	P-A25
P-B126	SK-B03
P-B127	SK-B04

※　欠番は遺構でないと判断した。

本 文 目 次

序文

例言　　凡例

第１章　発掘調査の経緯

１．発掘調査に至る経緯 …… 1

２．発掘調査の経過 …… 1

３．調査の組織・体制 …… 2

第２章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 3

第３章　調査の結果

第１節　内海中寺ノ谷遺跡の立地と基本層序 …… 6

第２節　遺構・遺物 …… 6

１．掘立柱建物 …… 6

２．柵列 …… 6

３．土坑 …… 19

４．溝状遺構 …… 20

５．柱穴・ピット …… 32

６．不明遺構 …… 32

７．遺構外出土遺物 …… 33

第３節　まとめにかえて …… 37

出土遺物観察表 …… 39

写真図版

報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　調査位置図 …… 2
第２図　内海中寺ノ谷遺跡周辺遺跡分布図 …… 5
第３図　Ａ区全体図・調査地断面図 …… 7・8
第４図　Ｂ区全体図 …… 9・10
第５図　Ｂ区調査地断面図 ……11・12
第６図　SB-B01・SD-B01実測図 ……13・14
第７図　SA-A01実測図 ……15
第８図　SA-A02実測図 ……15
第９図　SA-A03実測図 ……16
第10図　SA-B01実測図 ……16
第11図　SA-B02実測図 ……17
第12図　SA-B03実測図 ……18
第13図　SK-A01～A03実測図 ……19
第14図　SK-B01・B02実測図 ……20
第15図　SD-A01・A02・A05実測図 ……21・22
第16図　SD-A03・A04実測図 ……23・24
第17図　SD-A02出土遺物実測図 ……25
第18図　SD-A03出土遺物実測図 ……25
第19図　SD-A04出土遺物実測図 ……25
第20図　SD-A05出土遺物実測図 ……26
第21図　SD-B02実測図 ……26
第22図　SD-B03実測図 ……27
第23図　SD-B03出土遺物実測図 ……27
第24図　SD-B05・B10実測図 ……28
第25図　Pit内出土遺物実測図 ……29
第26図　SX-A01実測図 ……30
第27図　SX-A01出土遺物実測図 ……31
第28図　Ａ区遺構外出土遺物実測図 ……33
第29図　Ｂ区遺構外出土遺物実測図(1) ……34
第30図　Ｂ区遺構外出土遺物実測図(2) ……35
第31図　Ｂ区遺構外出土遺物実測図(3) ……36

図　版　目　次

図版１　Ａ区調査前（北東から）
　　Ａ区全景（北東から）
図版２　Ｂ区調査前（南から）
　　Ｂ区全景（南から）
図版３　Ａ区南東壁断面（南西から）
　　Ａ区中央ベルト断面①（東から）
　　Ａ区中央ベルト断面②（北から）
図版４　Ｂ区南西壁断面（東から）
　　Ｂ区横断面１(sec.1)(北東から)
　　Ｂ区横断面３(sec.3)(南から)
図版５　P-B55出土遺物
　　SX-A01出土遺物(1)
　　Ａ区遺構外出土遺物(1)
図版６　Ａ区遺構外出土遺物(2)
　　Ｂ区遺構外出土遺物(1)
図版７　Ｂ区遺構外出土遺物(2)
図版８　内海中所在城跡(仮称)遠景（西から）
　　内海中所在城跡(仮称)竪堀１(上方から)
　　内海中所在城跡(仮称)竪堀２(下方から)
図版９　調査地遠景（東から）
　　SK-A02検出状況（南西から）
　　SK-A03検出状況（北西から）
図版10　SD-A01検出状況（南西から）
　　SD-A01断面（北東から）
図版11　SD-A02検出状況（南東から）
　　SD-A02断面（南東から）
図版12　SD-A03・A04断面(sec.1)(南西から)
　　SD-A03・A04検出状況①（南西から）
　　SD-A03・A04検出状況②（北西から）
図版13　SD-A05断面（南東から）
　　SD-A05検出状況（南東から）
　　P-A24断面（東から）
図版14　SX-A01断面（南から）
　　SX-A01断面１(sec.1)(南西から)
　　SX-A01断面２(sec.2)(南西から)
図版15　SX-A01遺物出土状況①
　　SX-A01遺物出土状況②
　　SX-A01遺物出土状況③
図版16　SX-A01検出状況（南東から）
　　SX-A01・SD-A01検出状況（南西から）
　　Ａ区東半全景（南西から）
図版17　Ｂ区横断面２①(sec.2)(西から)
　　Ｂ区横断面２②(sec.2)(西から)
　　Ｂ区横断面３(sec.3)(西から)
図版18　Ｂ区遺構外遺物出土状況
　　SB-B01周辺①（南から）
　　SB-B01周辺②（北から）
図版19　SK-B01・B02検出状況（南東から）
　　SD-B02断面（南東から）
　　P-B61検出状況（南から）
図版20　P-B28断面（南東から）
　　P-B107断面（南東から）
　　P-B120断面（北から）
図版21　SD-A02出土遺物
　　SD-A03出土遺物
　　SD-A04出土遺物(1)
図版22　SD-A04出土遺物(2)
　　SD-A05出土遺物
　　SD-B03出土遺物(1)
図版23　SD-B03出土遺物(2)
　　Pit内出土遺物
図版24　SX-A01出土遺物(2)
図版25　SX-A01出土遺物(3)
　　Ａ区遺構外出土遺物(3)
図版26　Ａ区遺構外出土遺物(4)
　　Ｂ区遺構外出土遺物(3)
図版27　Ｂ区遺構外出土遺物(4)
図版28　Ｂ区遺構外出土遺物(5)
図版29　Ｂ区遺構外出土遺物(6)
図版30　P-A02 柱根
　　P-B61 柱根
　　内海中１号墳(仮称)(北西から)

第１章　発掘調査の経緯

１．発掘調査に至る経緯

内海中寺ノ谷遺跡は、東西を丘陵に挟まれた内海谷（御熊谷）の中程、内海中集落の南側に位置し、標高約13m付近の丘陵裾に立地する。遺跡の存在する内海谷には過去の分布調査などにより遺物の散布が確認されており、集落遺跡、生産遺跡などの可能性が指摘されていた。また、平成14年度には内海谷のほぼ全域を対象に平野部や丘陵裾部に計16ケ所の試掘調査が実施されている。調査の結果、密度の粗密は否めないが、縄文時代から中世までの遺構、遺物が確認されている。試掘調査という性格上、遺跡の具体的な範囲や性格の確定には至らず、広義的に内海中所在遺跡として認知されるに至っている。

今回の発掘調査の契機となった県営内海中地区ほ場整備事業は、内海谷の平野部のほぼ全域で計画されており、工事区域によっては掘削、盛土にて原地形を大きく改変することとなる。工事予定範囲では遺物散布地が含まれていることから、遺跡の範囲、遺構、遺物の有無と埋蔵状況、遺跡の性格等を把握する目的で鳥取市教育委員会が平成14年度に試掘調査を実施した。調査の結果、今回の工事予定地には古代から中世期を主とした遺構、遺物が確認された。鳥取市教育委員会はこれらの試掘結果をもとに、関係機関との計画変更等を含め種々の協議を行ったが、現状での遺跡の保護、保存は難しく、記録保存で対応することとなった。

２．発掘調査の経過（第１図）

内海中寺ノ谷遺跡の発掘調査は、鳥取県の委託を受け鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財調査センターが調査を実施した。

現地調査は資材搬入などの調査準備の後、平成16年７月から開始した。調査地内には県道（御熊・白兎線）が機能しており、この道路を境に調査地を東西に二分し、調査は県道東側（Ａ区）から着手し、Ａ区の調査が終了した後、県道西側（Ｂ区）の調査を行った。県道や畦道などの生活道や側溝を保護する為、若干の控えを設けて調査を行った。表土除去については遺構・遺物に影響の無い範囲で一部重機を用いた。測量杭の設置は任意のラインを基準として、直交する基準杭を遺構の密度に応じて適宜設置した。降雨による調査地の冠水、水没を防止するため排水溝を設置して排水を可能にした。検出した各遺構、遺物の写真撮影や実測等の記録類の作成は適宜、担当調査員、補助員で行った。また、高所作業車にて全体の写真撮影を行った。調査の結果、遺構は古代と中世期を中心に大きく２時期が存在するが、全て同一面において検出している。検出した遺構は掘立柱建物や柵列など明らかに生活痕跡であり、土器などの遺物も20コンテナケース余り出土しており、集落跡として評価できる。検出した遺構は総数177を数え、最終的な調査面積はＡ区が632㎡、Ｂ区が819㎡、計1,451㎡である。試掘調査において内海中所在遺跡として大きく括られていたが、今回の調査において、時期や性格が限定されること、内海川に向かって遺構が稀薄になり遺跡の範囲が推定可能なことなどから内海中所在遺跡と区別する意味で調査地周辺を字名から内海中寺ノ谷遺跡と正式に改めた。

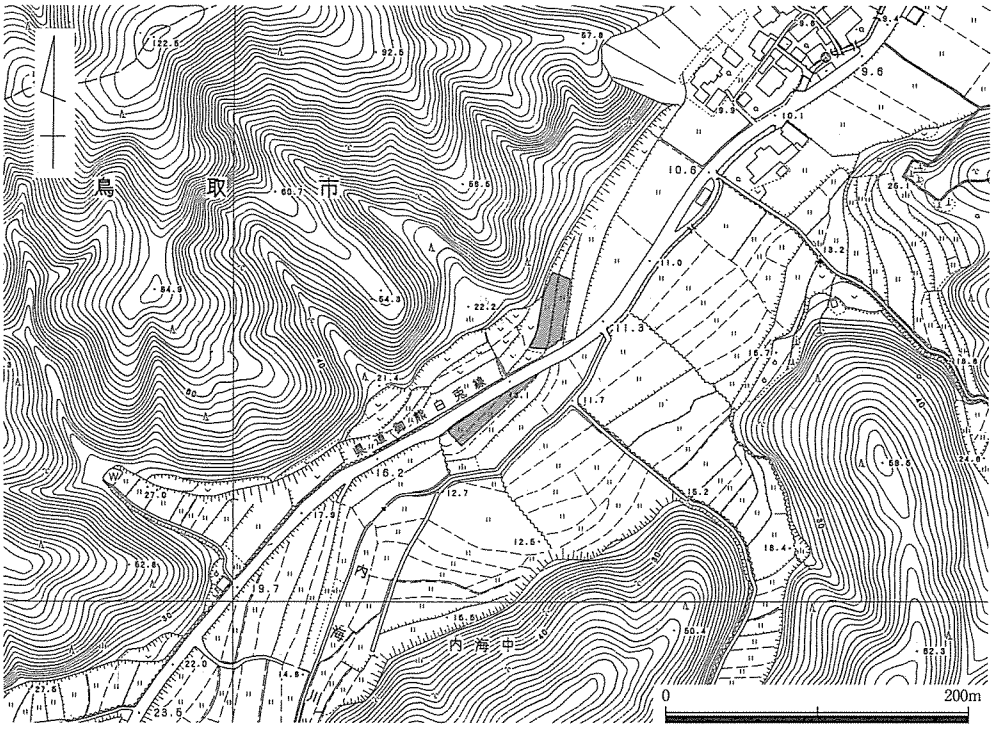
現地調査は例年に無い異常気象（酷暑、台風の通過、秋の長雨）にて遅延気味であったが、関係者の協力により予定どおり10月末に終了した。出土した遺物と写真や図面などの記録類の整理は現地調査と並行して進め、遺物については、水洗い等の後、注記、復元作業を行なった。現地調査終了後、本格的に整理作業、報告書作成を行い、平成17年３月末に終了した。

3．調査の組織・体制

発掘調査の組織、体制は以下のとおりである。

平成16年度

調査主体	財団法人	鳥取市文化財団
	理事長	石谷雅文（鳥取市副市長）
	副理事長	中川俊隆（鳥取市教育長）
		三田三香子
	常務理事	小谷荘太郎
調査指導	鳥取市教育委員会事務局　文化財課	
事務局	財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財調査センター	
	所長	前田　均
	主幹	山田真宏
	調査事務	秋田澄世
		白岩千足
調査担当	財団法人　鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財調査センター	
	調査員	前田　均
		藤本隆之
	調査補助員	永田りん太郎
		神谷伊鈴
		杉本利子
		下多みゆき
		濱橋博子



第１図　調査位置図

第２章　遺跡の位置と歴史的環境

１．内海中寺ノ谷遺跡の位置（第１・２図）

鳥取市は県東部に位置し、面積765.66㎢、人口20万人余りを擁する県庁所在地である。平成16年11月に旧鳥取市周辺の郡部町村（国府町、福部村、河原町、用瀬町、佐治村、気高町、鹿野町、青谷町）との市町村合併が成立し、面積、人口ともに大きく増加した。内海中寺ノ谷遺跡の所在する内海谷（御熊谷）は旧鳥取市の西端に位置する。北は古事記にも記載されている「因幡の白兎」で有名な白兎海岸そして日本海が広がり、谷の中央には内海川が流れる。東西を丘陵に挟まれた偏狭な平野部となっている。この下流域、白兎海岸の内陸側には内海砂丘地がみられ、縄文時代前期の縄文海進時には複雑に入り組んだ内湾状を呈していたとみられ、海退に伴う湖沼化と海岸部の砂洲の発達、千代川が運ぶ膨大な土砂の堆積によって形成されたと考えられる。

白兎神社の南方1.9㎞、遺跡の所在する内海谷には県道（御熊・白兎線）が通っており、海岸線を通過する国道９号線と丘陵部を通過する主要地方道（鳥取・鹿野・倉吉線）を結んでいる。主要地方道（鳥取・鹿野・倉吉線）の一部には古代山陰道も想定されており、地理的に交通の要衝であったと考えられる。東西の丘陵裾部には小さな谷が幾つも入り込んでおり、複雑な地形を呈している。丘陵裾縁辺部においては、豊かな自然に恵まれた地域でもあるが、今後の開発によってはその様相は一変する可能性もある。

２．遺跡の歴史的環境（第２図、図版８・30）

この地域周辺の遺跡分布調査や発掘調査はほとんど実施されておらず、周辺の歴史的環境は不明な部分が多い。僅かに周知されている遺跡の他、偶然発見された遺跡が点在するのみである。

まず、同じ内海中所在遺跡内に属し、今回の調査地の北東1.0～1.5㎞には縄文時代から古代までの遺物が多量に散布、包含していることが確認されている。縄文土器は前期と後期のものが出土しており、前者は岡山県磯ノ森式に後者は元住吉山Ⅰ式に類似する。[1]

白兎神社の南東150mには弥生時代の遺跡として身干山遺跡がある。採砂工事中に偶然発見された遺跡で、現在は消失している。弥生時代前期から中期の遺物が出土しており、前期の土器類には壺が多いことから墳墓的な性格、中期には生活祉の可能性が推察されている。[2]

白兎神社の存在する丘陵先端部には４基の古墳が確認されている。白兎神社の南西140mに白兎１号墳がある。おおよその規模は径20m、高さ2.5mを測り、周溝も確認されている。北東160mには白兎２号墳、径８m、高さ２mを測る。また、南西530～620mには白兎３～５号墳が存在する。規模は径13～20m、高さ1.5～2.3mである。さらに西側の丘陵先端部にも同規模の小沢見１～５号墳が点在する。調査地の東160mの丘陵先端部法面には、横穴式石室の一部が露頭している。（内海中１号墳）白兎神社の西方700mには伏野神社横穴墓群もある。何れの古墳・横穴も詳しい調査は行われておらず詳細は不明であるが付近の丘陵頂部や先端部付近には小中規模の古墳等が他にも存在する可能性もある。また、平成14年度に実施された試掘調査のTr-5では古墳時代後期以降の溝や柱穴、井戸が検出されている。[1]

歴史時代、この地域は『和名類聚鈔』にいう高草郡刑部郷に属していた地域と考えられている。内海谷の東隣の狭い谷に遺称地名「刑部谷」が遺る。この刑部郷には、貞観９(867)年に正三位を与えられた天穂日命神社（鳥取市福井）、天日鳥命神社（鳥取市大畑）、貞観７(865)年に従五位下を授けられた阿太賀都建御熊命神社（鳥取市御熊）の三つの式内社がみられ、高草郡内でも式内社が多い郷である。また、『東南院文書』天慶３(940)年の「東大寺因幡国高庭庄券第二坪付」の末尾に連署された地方官人のなかに「検校刑部直（正万）」という名がみられる。また、当地は高草郡と気多郡との郡境に位置しており、時期によっては所属する郡が変わっていたと考えられている。郡境ということから当地周辺は

重要な地域であったとも考えられ、有力な豪族の本拠地であったと推定されており、気多郡衙へと通ずる古代山陰道（官道）も付近を通過していたものと考えられている。[(2)(3)(4)]

中世期の遺跡としては、先の身干山遺跡から宝篋印塔、五輪塔とともに陶磁器類、古銭、刀、笄などが出土している。宝篋印塔は１基のみで高さ165cm、凝灰岩製。室町期以降の所産と考えられている。この宝篋印塔を中心に200基程の五輪塔が方形状に整然と並んでいたとされる。陶磁器類には連弁文を有する青磁、抉り高台を有する白磁など14・15世紀の輸入陶磁器や肥前産小皿、美濃産香炉、備前産壺、越前産擂鉢など16・17世紀の国産陶磁器が出土している。古銭はすべて11世紀代の北宋銭。刀、笄については詳細不明である。これらから中世の身干山遺跡には数多くの供養施設があったと推定されている。また、白兎神社の西方700m、伏野字金崎からは瓦経、鰐口などが採取されている。瓦経は法華経の結経に相当する『仏説観普賢菩薩行法品』の破片と推定されている。鰐口は径18cm弱、重量1.55kgの青銅鋳製。撞座には子葉を有した10葉の連弁と尾の長い巴文が陽鋳されており、室町時代頃とされている。これらの他にも宝篋印塔や五輪塔の出土も伝えられているが詳細は不明である。近辺には油免、西油免のような荘園体制的小字名が遺っており寺社領との関係や寺社そのものの存在が推察されている。[(2)]調査地の南西800m、御熊の丘陵尾根上にも中世墓（御熊所在中世墓）があるとされている。

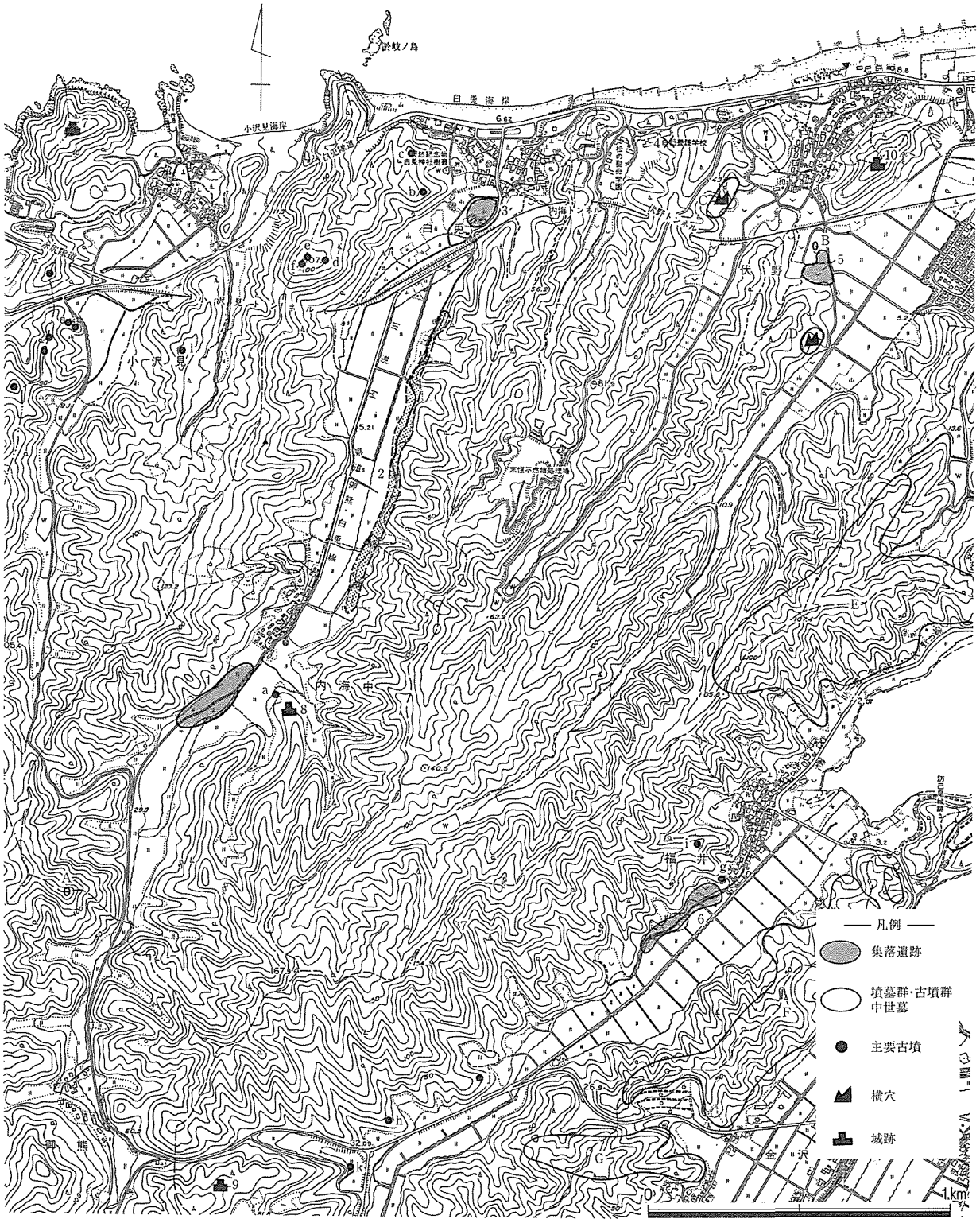
室町時代になると、山名氏の支配下に因幡国も組み込まれ、中期以降は湖山池の東側に布施天神山城が築かれる。こうして高草郡は因州山名氏の本拠地として位置付けられるようになる。このような中で内海中の地は、往時「宇津見中村」と呼称されており、天文年間（1532～1554年）布施天神山城主であった山名誠通（久通）の重臣、中村伊豆守の本領であったと考えられている。後に但州山名氏との対立のなかで、勢力圏の最西端として防衛戦線となる。この頃には領主も中村伊豆守から雲州尼子氏から派遣された石川某となる。[(2)(5)]当時、この地は戦略的に重要であったと考えられ、白兎神社の西方1.4kmには伏野所在城跡、東方1.3kmには大崎城跡、調査地の南方1.6kmに福井所在城跡などが各要衝に築かれている。また、調査地周辺の踏査結果においても東方200m、前述の石室が露頭している丘陵尾根にも山城（内海中所在城跡）を確認している。[(6)]付近には中村氏の居城（居館）があると考えられているが明らかではない。[(7)]このように、当地は古来より重要な地域であった。郡境に位置し、海路と陸路の中継（連絡）地としての機能も有していたと考えられる。当地が偏狭な谷平野であるという地理的な要因に依るところが大きい。

註

(1) 「内海中所在遺跡１」『平成14（2002）年度　鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』鳥取市教育委員会　2003年
(2) 久保穣二朗「身干山・金崎両遺跡の出土遺物について」『鳥取県立博物館研究報告』第18号　鳥取県立博物館　1981年
上記、論考にて出土遺物の報告と遺跡の性格の検討が成されている。
(3) 「古代気多郡の行政区画」『上光遺跡群発掘調査報告書』気高町教育委員会　1988年
上記、報告書にて気多郡の郷域比定と官道の推定が成されている。
(4) 『上原遺跡発掘調査報告書』気高町教育委員会　2003年
(5) 安倍恭庵『因幡誌』株式会社 世界聖典刊行協会　1981年
(6) 2004年12月15日、調査地周辺のみ簡易踏査
① 現況での目視調査では、露頭している石室以外には周辺で古墳等を確認することはできなかった。
② 城跡は平坦面６（曲輪４、帯曲輪２）、堀切１、竪堀６、切岸３を確認。堀切より上方は未踏査。
③ 調査地北西側の谷部周辺（字 万願寺）には、丘陵頂部にかなり大きな平坦面を確認したが、現況での目視調査では古墳、城跡、寺社などに伴う顕著な遺構を確認することはできなかった。
(7) 『探訪日本の城７（山陰道）』小学館　1978年

主要参考文献

『新修　鳥取市史　第１巻　古代・中世篇』鳥取市　1983年
『角川日本地名大辞典　31　鳥取県』株式会社　角川書店　1982年
『日本歴史地名大系　第32巻　鳥取県の地名』株式会社　平凡社　1992年



第２図　内海中寺ノ谷遺跡周辺遺跡分布図

遺跡名称（平成17年３月現在）

1．**内海中寺ノ谷遺跡**
2．内海中所在遺跡
3．身干山遺跡
4．金崎遺跡
5．伏野所在001遺跡
6．福井所在遺跡
7．大崎城跡
8．内海中所在城跡（仮称）
9．福井所在城跡
10．伏野所在城跡

A．御熊所在中世墓
B．伏野所在五輪塔
C．伏野神社南横穴墓群
D．伏野所在横穴墓群１
E．三津古墳群
F．岩本古墳群
G．大谷古墳群

a．内海中１号墳（仮称）
b．白兎１号墳
c．白兎２号墳
d．白兎３号墳
e．白兎４号墳
f．白兎５号墳
g．福井１号墳
h．福井２号墳
i．福井３号墳
j．福井４号墳
k．熊田古墳
l．小沢見１号墳

第３章　調査の結果

第１節　内海中寺ノ谷遺跡の立地と基本層序（第１～５図、図版３・４・９・17）

東西を丘陵に挟まれた内海谷(御熊谷)には過去の分布調査などにより遺物の散布が確認されており、集落遺跡、生産遺跡などの可能性が指摘されていた。平成14年度には内海谷のほぼ全域を対象に平野部や丘陵裾部に計16ケ所の試掘調査が実施されている。調査の結果、密度の粗密は否めないが、縄文時代から中世までの遺構、遺物が確認されている。試掘調査という性格上、遺跡の具体的な範囲や性格の確定には至らず、広義的に内海中所在遺跡として認知されていたが、今回の調査にて時期や性格が限定されること、内海川に向かって遺構が稀薄になり、遺跡の範囲がある程度推定できることなどから内海中所在遺跡と区別する意味で調査地周辺を字名から内海中寺ノ谷遺跡と正式に改めた。

この度の調査は鳥取市内海谷のほぼ中央部、内海中集落の南側に位置する。谷筋西側の丘陵裾の微高地上、標高約12～13mに立地する。調査地は丘陵裾に位置するため、本来は東側を流れる内海川へ向かって東西に緩やかに傾斜すると考えられるが、田畑として利用するため段状に加工されている。調査前の標高は西端で13.20m、東端で12.25mである。現況での比高差は約1.0mを測る。

調査地の土層は基本的に原地形の傾斜に沿って堆積している。地表から10～20cmは耕作土（褐色系10YR4/４～４/２の粘質土）が堆積する。Ａ区では遺構検出面まで上方より黒褐色粘質土（10YR3/２～４/２）、褐灰色粘質土（10YR5/１）、黄灰色粘土（2.5Y5/１）などが各々10～30cm堆積する。遺構検出面の標高は12.5～13.4mである。Ｂ区では褐灰色粘質土（10YR5/１）、灰黄褐色砂混粘質土（10YR4/２）、褐色粘質土（10YR4/６）、にぶい黄褐色シルト（10YR5/３～５/２）などが各々20～30cm堆積する。遺構検出面の標高は11.5～13.0mである。両区ともに褐色系（黒褐色、褐灰色、灰黄褐色）の粘質土が遺物包含層に相当し、古代から中近世までの土器類を包含する。

第２節　遺構・遺物

１．掘立柱建物

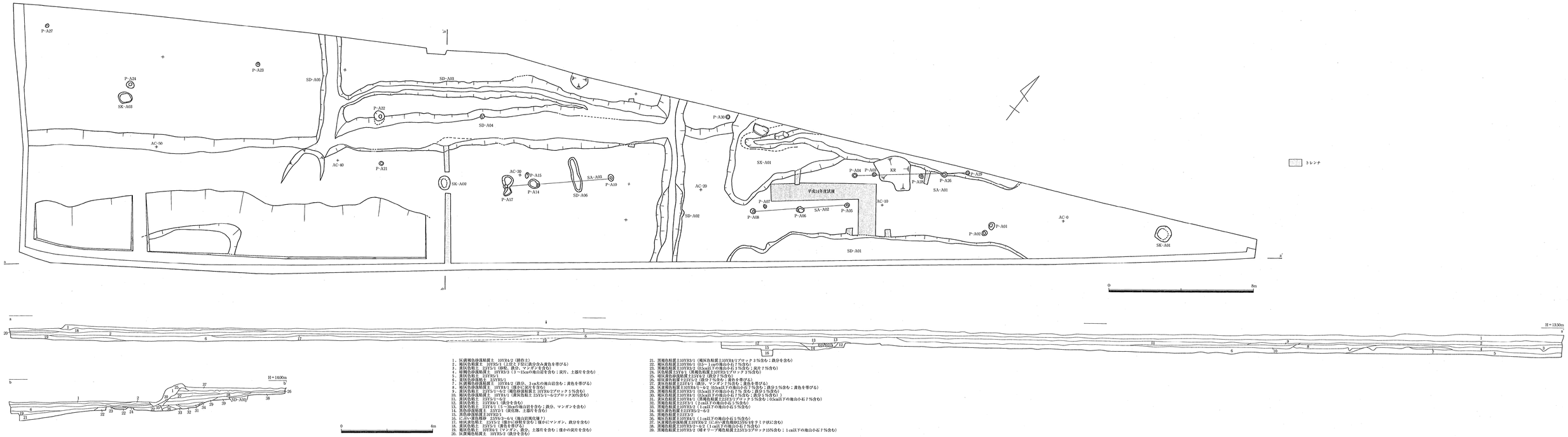
SB-B01（第６図、図版18・19・30）

Ｂ区、南西端に位置する。検出面の標高は12.9mである。現状で桁行３間、梁行２間の建物である。主軸をＮ-18°-Ｅにとる。南東側は後世の削平を受けていると考えられ、柱穴の検出が不可能であった為、梁行の南東端は更に延びる可能性がある。建物の平面形は長方形を呈し、桁行３間が8.05m、梁行２間が5.28mを測り、面積は42.5m²となる。検出した柱穴の柱間寸法は桁行が167～304cm、梁行が223～289cmを測り、平均すると桁行302cm、梁行263cmとなる。但し、桁行の柱列（Ｄ）と（Ｅ）の間は167～182cmと短く、平均は175cmとなる。（Ｄ）列は廂の可能性も考えられる。（Ｄ）列を廂と想定すると、桁行２間が6.03m、梁行２間が5.28mとなり、面積は31.8m²となる。柱穴の平面形は楕円形、不整円形を呈する。断面観察により柱痕を確認できる柱穴も５基存在し、その径は20～29cm程度である。また、北西側から北東側に検出した「Ｌ」字状の溝状遺構SD-B01は建物SB-B01と同じ主軸を有しており、建物に伴う可能性が高い。さらに、建替えや柵列などの建物との関係は不明であるが北隅外に位置するP-B61には径24cm、長さ38cmの比較的大きな柱根が遺存していた。この柱根を放射性炭素（^{14}C）年代測定した結果AD.1476～1627年という結果を得ている。樹種はブナ科クリ属クリ。[1]

２．柵列

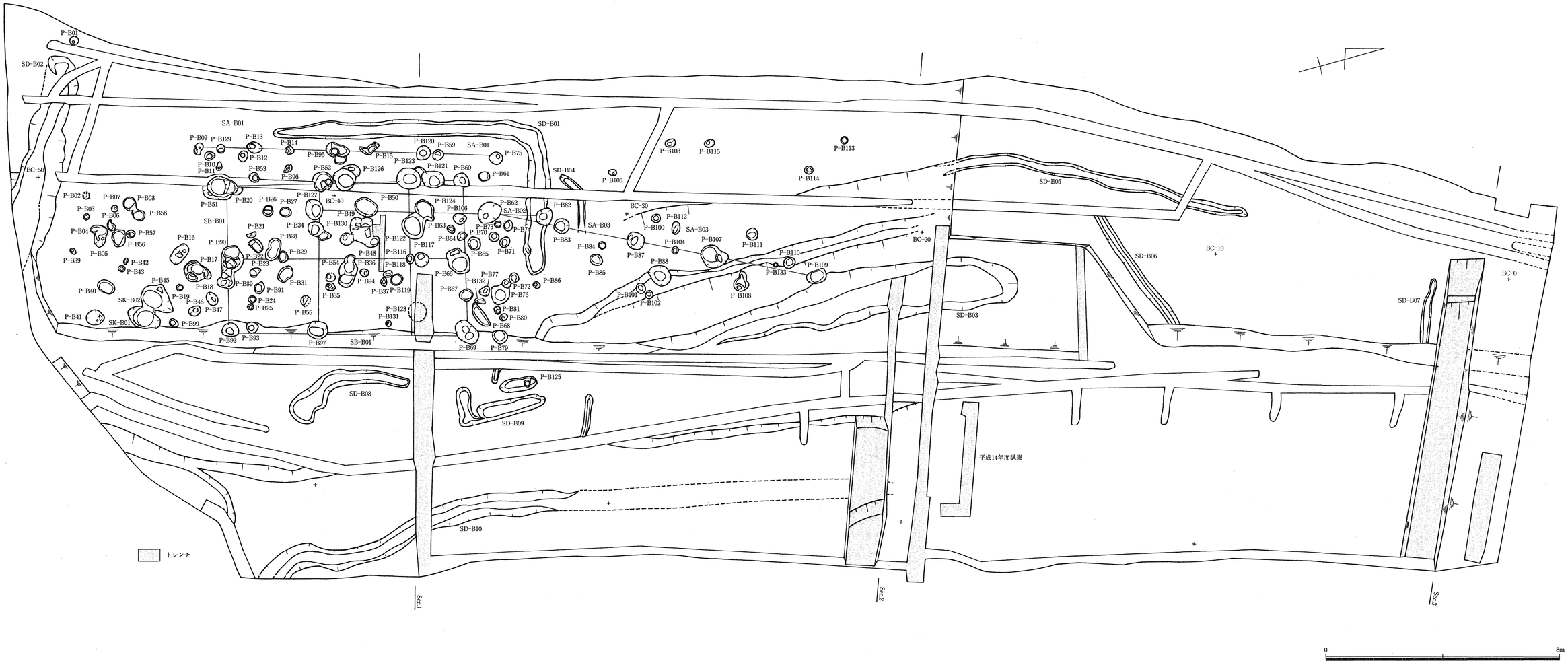
SA-A01（第７図）

Ａ区、北東側に位置する。検出面の標高は12.7mである。全長は6.29mを測る。主軸はＮ-53°-Ｅにとる。P-A03とP-A28の間は撹乱坑に切られ欠失する。また、P-A26、A29もSX-A01に切られる。検

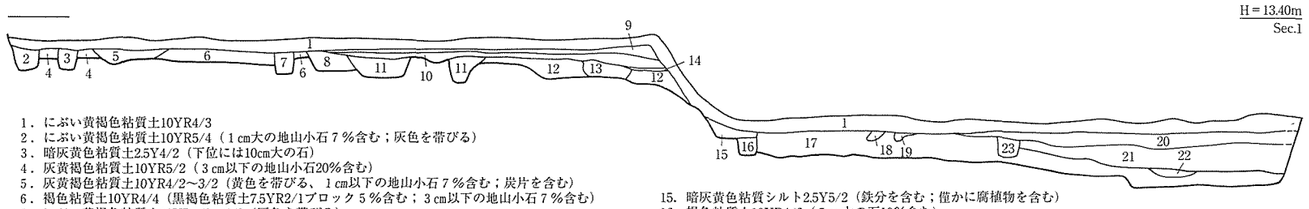


1. 区黄褐色砂質粘質土 10YR4/2（耕作土）
2. 褐灰色粘質土 10YR5/1（上位と下位に鉄分含み黄色を帯びる）
3. 黄灰色粘土 2.5Y5/1（砂粒、鉄分、マンガンを含む）
4. 褐褐色砂質粘質土 10YR3/3（3～15cm の地山岩を含む；炭片、土器片を含む）
5. 黄灰色粘土 2.5YR5/1
6. 黄灰色砂質粘質土 2.5YR5/1
7. 区黄褐色砂質粘質土 10YR4/2（鉄分、3cm大の地山岩含む；黄色を帯びる）
8. 褐灰色砂質粘質土 10YR4/1（僅かに炭片を含む）
9. 黄灰色粘土 2.5Y5/1～6/2（褐色砂質粘質土 10YR4/2ブロック5%含む）
10. 褐灰色砂質粘質土 10YR4/1（黄灰色粘土 2.5Y5/1～6/2ブロック30%含む）
11. 黄灰色粘土 2.5Y5/1～6/2
12. 黄灰色粘土 2.5YR4/1（鉄分を含む）
13. 黄灰色粘土 2.5Y4/1（5～30cmの地山岩を含む；鉄分、マンガンを含む）
14. 黄色砂質粘質土 2.5Y2/1（炭化物、土器片を含む）
15. 黄色砂質粘質土 10YR2/1
16. 区黄褐色微砂 2.5Y6/3～6/4（地山岩風化層？）
17. 暗灰黄色粘土 2.5Y5/2（僅かに砂粒を含む；僅かにマンガン、鉄分を含む）
18. 黄灰色粘土 2.5Y5/1（黄色を帯びる）
19. 褐灰色粘土 10YR4/1（マンガン、鉄分、土器片を含む；僅かの炭片を含む）
20. 区黄褐色粘質土 10YR5/2（鉄分を含む）
21. 黒褐色粘質土10YR3/1（褐灰色粘質土10YR4/1ブロック3%含む；鉄分を含む）
22. 褐灰色粘質土10YR6/1（0.5～1cmの地山小石7%含む）
23. 黒褐色粘質土10YR3/2（0.5cm以下の地山小石3%含む；炭片7%含む）
24. 灰色粘質土5Y4/1（黒褐色粘質土10YR3/1ブロック3%含む）
25. 暗灰黄色砂質粘質土2.5Y4/2（鉄分7%含む）
26. 暗灰黄色粘質土2.5Y5/2（鉄分7%含む；黄色を帯びる）
27. 黄灰色粘質土2.5Y4/1（鉄分、マンガン7%含む；黄色を帯びる）
28. 灰黄褐色粘質土10YR4/1～4/2（0.5cm以下の地山小石7%含む；鉄分5%含む；黄色を帯びる）
29. 黒褐色粘質土10YR3/1（0.5cm以下の地山小石7%含む；鉄分5%含む）
30. 褐灰色粘質土10YR4/1（0.5cm以下の地山小石7%含む；鉄分5%含む）
31. 黄灰色粘質土10YR4/1（黒褐色粘質土2.5Y3/1ブロック5%含む；0.5cm以下の地山小石7%含む）
32. 黒褐色粘質土2.5Y3/1（2cm以下の地山小石5%含む）
33. 黒褐色粘質土10YR3/2（1cm以下の地山小石5%含む）
34. 暗灰黄色粘質土2.5Y3/5～6/2
35. 黒褐色粘質土2.5Y3/2
36. 褐灰色粘質土10YR4/1（1cm以下の地山小石5%含む）
37. 灰黄褐色砂質粘質土10YR4/2（1.5cm黄色微砂2.5Y6/4をクミナ状に含む）
38. 黒褐色粘質土10YR3/2～4/2（1cm以下の地山小石7%含む）
39. 黒褐色粘質土10YR3/2（暗オリーブ褐色粘質土2.5Y3/3ブロック15%含む；1cm以下の地山小石7%含む）

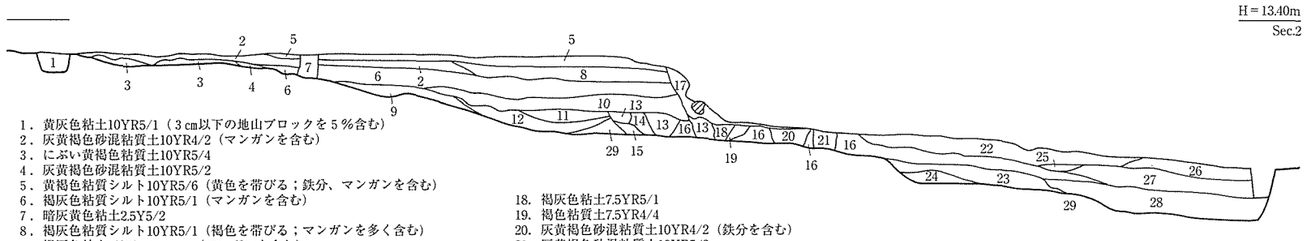
第3図　A区全体図・調査地断面図


SA-B01
SD-B01
SD-B02
SD-B04
SD-B05
SD-B06
SD-B07
SD-B08
SD-B09
SD-B10
SD-B03
SB-B01
SA-B02
SA-B03
SK-B01
SK-B02
BC-50
BC-40
BC-30
BC-20
BC-10
BC-0
平成14年度試掘
トレンチ
Sec.1
Sec.2
Sec.3
0
8m

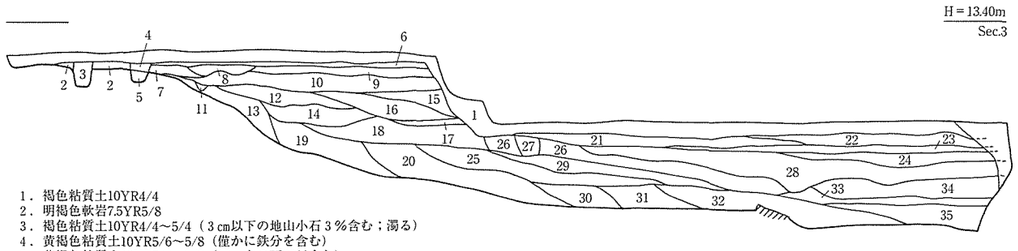
第４図　Ｂ区全体図



1．にぶい黄褐色粘質土10YR4/3
2．にぶい黄褐色粘質土10YR5/4（1㎝大の地山小石7％含む；灰色を帯びる）
3．暗灰黄色粘質土2.5Y4/2（下位には10㎝大の石）
4．灰黄褐色粘質土10YR5/2（3㎝以下の地山小石20％含む）
5．灰黄褐色粘質土10YR4/2～3/2（黄色を帯びる、1㎝以下の地山小石7％含む；炭片を含む）
6．褐色粘質土10YR4/4（黒褐色粘質土7.5YR2/1ブロック5％含む；3㎝以下の地山小石7％含む）
7．にぶい黄褐色粘質土10YR5/3～5/2（灰色を帯びる）
8．にぶい黄褐色粘質土10YR4/3（5㎝大の地山岩5％含む）
9．黄褐色粘質土2.5Y5/4～5/3（マンガンを含む）
10．灰黄褐色粘質土10YR4/2（3㎝以下の地山小石7％含む）
11．灰褐色粘質土7.5YR4/2（マンガン、炭化物を含む）
12．褐色粘質土7.5YR4/4（3㎝以下の地山小石7％含む）
13．灰黄褐色粘質土10YR4/2（黒色を帯びる；0.5～3㎝の地山小石5％含む）
14．褐灰色粘質土10YR4/1
15．暗灰黄色粘質シルト2.5Y5/2（鉄分を含む；僅かに腐植物を含む）
16．褐色粘質土10YR4/6（5㎝大の石10％含む）
17．にぶい黄褐色シルト10YR5/4～5/6（1～5㎝の地山岩5％含む）
18．にぶい黄褐色シルト10YR5/4（灰色を帯びる）
19．灰黄色粘質土2.5Y6/2～5/2
20．褐色粘質土10YR4/6（鉄分を含む）
21．にぶい黄褐色シルト10YR5/3～5/2（3㎝以下の地山小石5％含む）
22．褐灰色粘質シルト10YR4/1（灰色を帯びる）
23．暗灰黄色粘質シルト2.5Y4/2～5/2（0.5～5㎝の地山岩10％含む）

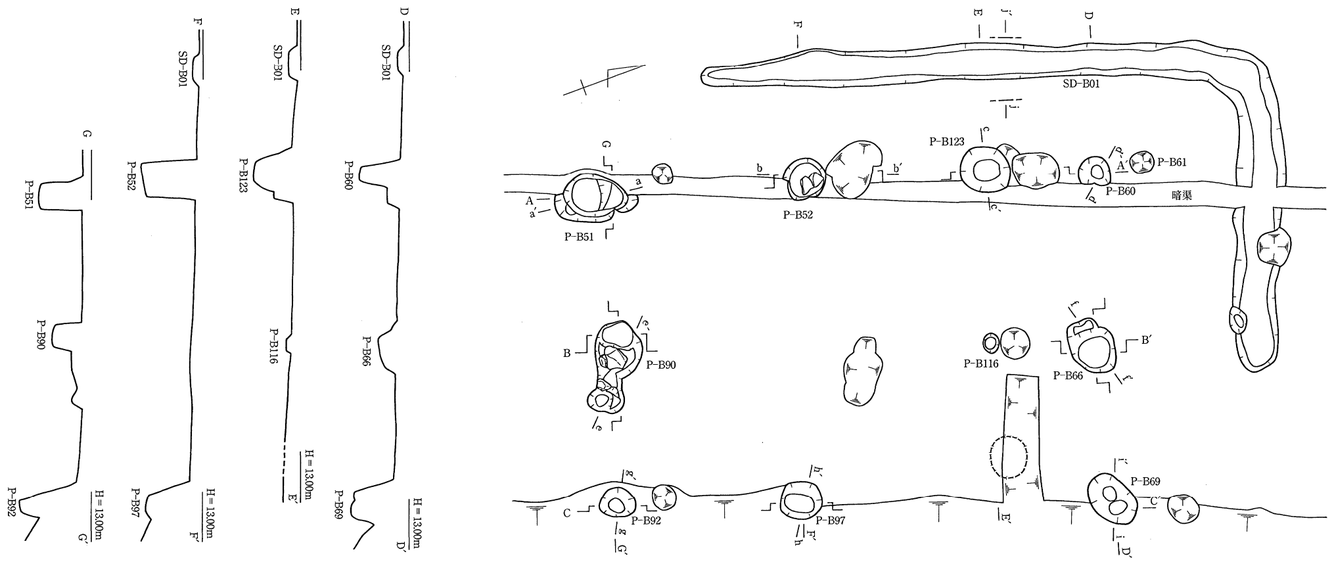


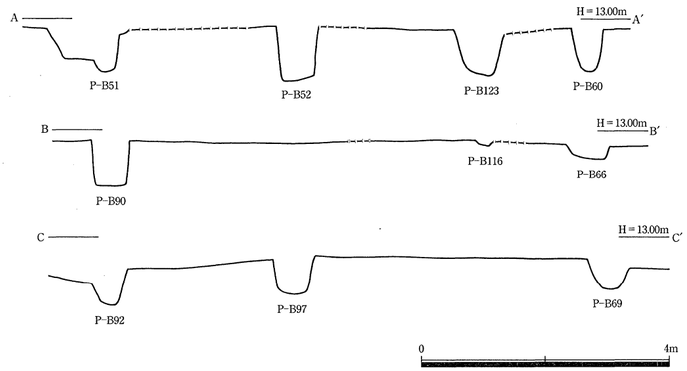
1．黄灰色粘土10YR5/1（3㎝以下の地山ブロックを5％含む）
2．灰黄褐色砂混粘質土10YR4/2（マンガンを含む）
3．にぶい黄褐色粘質土10YR5/4
4．灰黄褐色砂混粘質土10YR5/2
5．黄褐色粘質シルト10YR5/6（黄色を帯びる；鉄分、マンガンを含む）
6．褐灰色粘質シルト10YR5/1（マンガンを含む）
7．暗灰黄色粘土2.5Y5/2
8．褐灰色粘質シルト10YR5/1（褐色を帯びる；マンガンを多く含む）
9．褐灰色粘土10YR4/1～5/1（マンガンを含む）
10．灰黄褐色砂混粘質土10YR4/2（マンガンを多く含む）
11．褐灰色粘土10YR4/1（砂、3㎝以下の地山小石2％含む）
12．灰黄褐色粘土10YR5/2（鉄分を含む；3㎝以下の地山小石を2％含む）
13．にぶい黄褐色粘質土（マンガン多量に含み硬化）
14．黒褐色砂混粘質土10YR3/2（鉄分を含む）
15．灰黄褐色粘土10YR5/2（橙色を帯びる；鉄分を含む）
16．灰黄褐色砂混粘土10YR5/2（鉄分を含む）
17．褐色砂混シルト10YR4/6
18．褐灰色粘土7.5YR5/1
19．褐色粘質土7.5YR4/4
20．灰黄褐色砂混粘質土10YR4/2（鉄分を含む）
21．灰黄褐色砂混粘質土10YR5/2
22．褐灰色砂混粘質シルト10YR5/1（鉄分を含む）
23．黒褐色砂混粘質土10YR3/1～4/1（炭化物、土器片を含む）
24．褐灰色砂混粘質土10YR5/1（橙色を帯びる；鉄分を含む）
25．褐灰色砂混粘質土10YR4/1（鉄分を含む）
26．褐灰色砂混粘土10YR4/1（褐色を帯びる；マンガンを多く含む）
27．黒色砂混粘土7.5YR2/1（炭化物、土器を含む）
28．黒色砂混粘土2.5GY2/1（緑色を帯びる）
29．褐灰色粘質土7.5YR6/1～6/2（3～15㎝の地山岩25％含む）

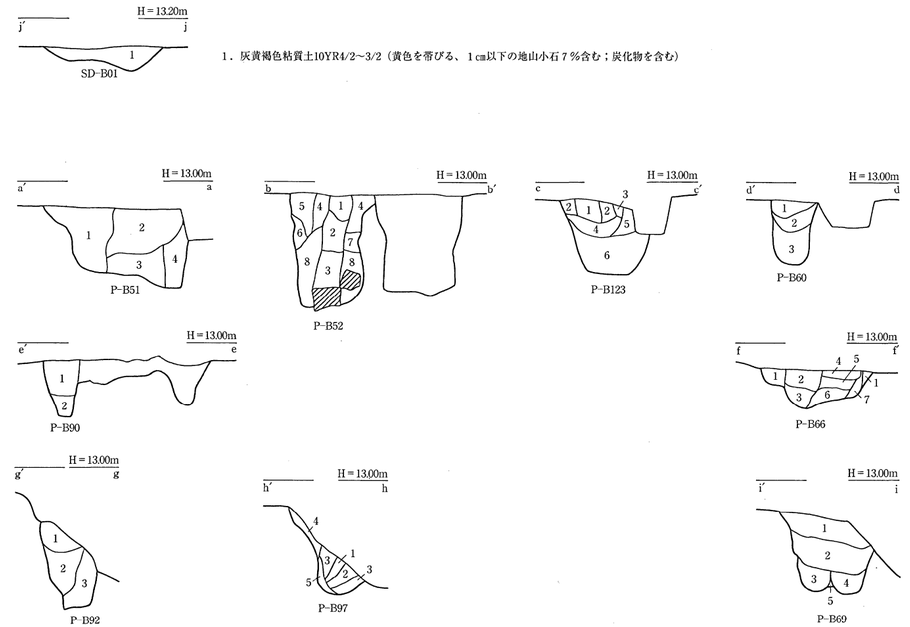


1．褐色粘質土10YR4/4
2．明褐色軟岩7.5YR5/8
3．褐色粘質土10YR4/4～5/4（3㎝以下の地山小石3％含む；濁る）
4．黄褐色粘質土10YR5/6～5/8（僅かに鉄分を含む）
5．黄褐色粘質土10YR5/6～5/8（10㎝大の石30％含む）
6．褐色粘質土10YR4/4～4/3（黄褐色粘質土10YR5/6ブロック10％含む；僅かに炭化物を含む）
7．にぶい黄褐色粘質土10YR4/3～4/4（1㎝大の地山小石20％含む；鉄分を少し含む）
8．にぶい黄褐色粘質土10YR4/3～4/2（3㎝大の地山小石10％含む；鉄分を多く含む）
9．にぶい黄褐色粘質土10YR4/3～4/2（1㎝大の地山小石7％含む）
10．灰黄褐色粘質土10YR4/3
11．にぶい黄褐色粘質土10YR5/3～5/2（0.5㎝以下の地山小石7％含む；鉄分を含む）
12．にぶい黄褐色粘質土10YR5/3（5㎝以下の地山岩5％含む；鉄分を含む）
13．にぶい黄橙色粘質土10YR6/4（鉄分を含む）
14．にぶい黄褐色（砂混）粘質土10YR4/3～4/2（3～20㎝の地山岩25％含む）
15．にぶい黄褐色粘質土10YR4/3～5/3（若干灰色を帯びる；1～3㎝の地山小石5％含む；鉄分を含む）
16．にぶい黄褐色粘質土10YR5/3～5/2（2㎝以下の地山小石7％含む；鉄分を多く含む）
17．灰黄褐色粘質土10YR5/2～5/1（黄色を帯びる；鉄分を含む）
18．褐灰色粘質土7.5YR4/1（僅かに3㎝以下の地山小石を含む）
19．にぶい黄橙色粘質土10YR6/2（鉄分を少し含む）
20．灰黄褐色粘質土10YR5/2（鉄分を少し含む）
21．にぶい黄褐色粘質土10YR5/4（黄色を帯びる；鉄分を含む）
22．にぶい黄褐色粘質土10YR4/3（黄色を帯びる）
23．にぶい黄褐色粘質土10YR4/3～4/2（黒色を帯びる；僅かに鉄分を含む）
24．にぶい黄褐色粘質土10YR4/3～4/2（僅かに灰色を帯びる）
25．褐灰色粘質土7.5YR4/1（鉄分を多く含む）
26．黒褐色粘質土7.5YR2/2～3/2（マンガンを多く含む）
27．にぶい黄褐色粘質土10YR5/4（10㎝以下の地山岩15％含む；マンガン多く含む）
28．褐色粘質土10YR4/6（灰色を帯びる）
29．褐色粘質土7.5YR4/3（10㎝大の石7％含む）
30．にぶい黄褐色粘質シルト10YR5/4（鉄分を含む）
31．にぶい黄褐色粘質シルト10YR5/3（鉄分を含む）
32．褐灰色粘質シルト7.5YR4/1（部分的に黒色を帯びる；鉄分、炭化物を多く含む）
33．褐灰色粘質シルト10YR4/1（上位に鉄分沈着）
34．褐灰色粘質シルト7.5YR4/1～3/1
35．灰黄褐色粘質土10YR4/2（下位に鉄分沈着；マンガンを含む）

第5図　B区調査地断面図







1．灰黄褐色粘質土10YR4/2～3/2（黄色を帯びる、1㎝以下の地山小石7％含む；炭化物を含む）

P-B51（a-a′）
1．灰黄褐色粘質土10YR4/2～4/3（1㎝以下の地山小石7％含む；若干黒色を帯びる）
2．褐色粘質土7.5YR4/3（1㎝以下の地山小石7％含む）
3．暗灰黄色シルト質極細砂2.5Y5/2（マンガンを含む）
4．黒褐色粘質土10YR3/2（1㎝以下の地山小石7％含む）

P-B90（e-e′）
1．暗褐色粘質土7.5YR3/3～3/4（1㎝大の地山小石15％含む）
2．灰褐色粘質土7.5YR4/2

P-B92（g-g′）
1．灰黄褐色粘質土10YR4/2（1㎝以下の地山小石7％含む；マンガンを少し含む）
2．褐灰色粘質土10YR4/1（1㎝以下の地山小石7％含む）
3．褐灰色粘質土10YR4/1～3/1（1㎝以下の地山小石7％含む）

P-B52、P-126（b-b′）
1．灰褐色粘質土7.5YR4/2（炭片を含む）
2．灰褐色粘質土7.5YR4/2（炭片を含む）
3．灰褐色粘質土7.5YR5/2
4．灰褐色粘質土7.5YR4/2
5．灰褐色粘質土7.5YR4/2～4/3
6．褐色粘質土7.5YR4/4（マンガンを多く含む）
7．灰褐色粘質土7.5YR4/2（黄色を帯びる）
8．褐灰色粘質土7.5YR5/1～4/1

P-B97（h-h′）
1．褐灰色粘質土10YR4/1
2．灰黄褐色粘質土10YR4/2
3．灰黄褐色粘質土10YR4/2（1㎝以下の地山小石5％含む）
4．黒褐色粘質土10YR3/2～4/2（1㎝以下の地山小石5％含む）
5．灰褐色粘質シルト7.5YR4/2

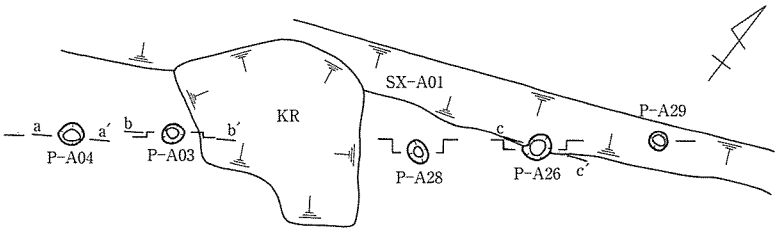
P-B123（c-c′）
1．褐灰色粘質土10YR4/1（1㎝以下の地山小石5％含む；炭化物を含む）
2．灰黄褐色粘質土10YR5/2（1㎝以下の地山小石5％含む；灰色を帯びる）
3．灰黄褐色粘質土10YR5/2（マンガンを多く含む）
4．灰黄褐色粘質土10YR4/2（マンガンを多く含む）
5．にぶい黄褐色粘質土10YR4/3（灰黄褐色粘質土10YR5/2～4/2ブロック3％含む）
6．褐色粘質土10YR4/6（灰黄褐色粘質土10YR5/2～4/2ブロック3％含む）

P-B116
1．灰黄褐色粘質土10YR4/2～5/2（1㎝以下の地山小石7％含む；僅かに炭化物を含む）
P-B60（d-d′）
1．にぶい黄褐色粘質土10YR4/3（炭化物を含む）
2．灰黄褐色粘質土10YR4/2（マンガンを含む）
3．にぶい黄褐色粘質土10YR4/3

P-B66（f-f′）
1．にぶい黄褐色粘質土10YR4/3（3㎝以下の地山小石5％含む）
2．灰黄褐色粘質土10YR4/2～4/1（3㎝以下の地山小石5％含む；部分的に灰色を帯びる）
3．灰黄褐色粘質土10YR4/2
4．灰黄褐色粘質土10YR4/2
5．灰黄褐色粘質土10YR4/2（褐色粘質土10YR4/4ブロックを5％含む）
6．暗灰黄色粘質土2.5Y4/2
7．黒褐色粘質土10YR3/2（2～4㎝の地山岩5％含む）

P-B69（i-i′）
1．灰黄褐色粘質土10YR4/2（褐色粘質土10YR4/4ブロック5％含む；1㎝以下の地山小石7％含む）
2．黒褐色粘質土10YR3/2（1㎝以下の地山小石7％含む）
3．黒褐色粘質土10YR3/2～3/1（2㎝以下の地山小石5％含む）
4．褐灰色粘質土10YR4/1～3/1（灰色を帯びる）
5．灰黄褐色粘質土10YR4/2～5/2

第6図　SB-B01・SD-B01実測図



P-A04
1．黒褐色粘質土10YR3/1（1cm以下の地山小石7％含む）
2．黒色粘質土10YR2/1（0.5cm以下の地山小石7％含む）

P-A03
1．黒褐色粘質土10YR2/1（1cm以下の地山小石7％含む）

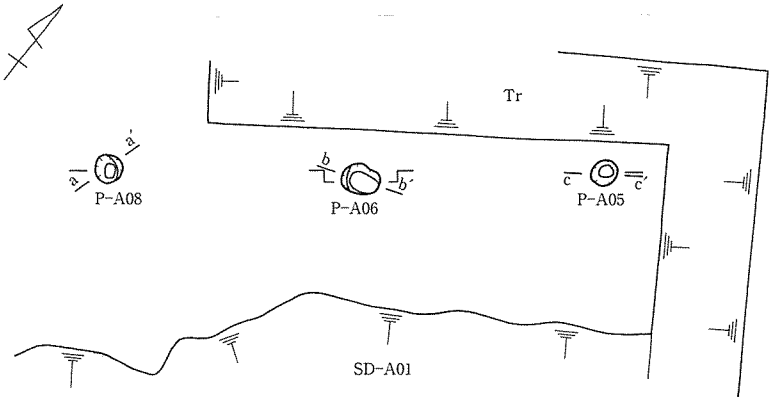
P-A26
1．黒褐色粘質土10YR3/1
2．暗灰黄色粘質土2.5Y4/2

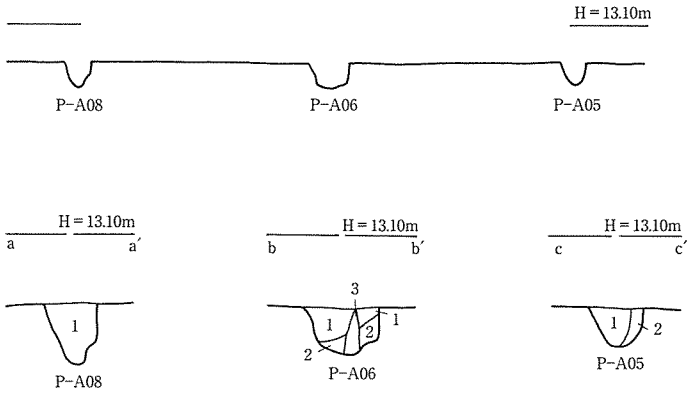
P-A28
1．黒褐色粘質土10YR3/1

P-A29
1．黒褐色粘質土10YR3/1

2m（平面図）
1m（断面図）

第7図　SA-A01実測図





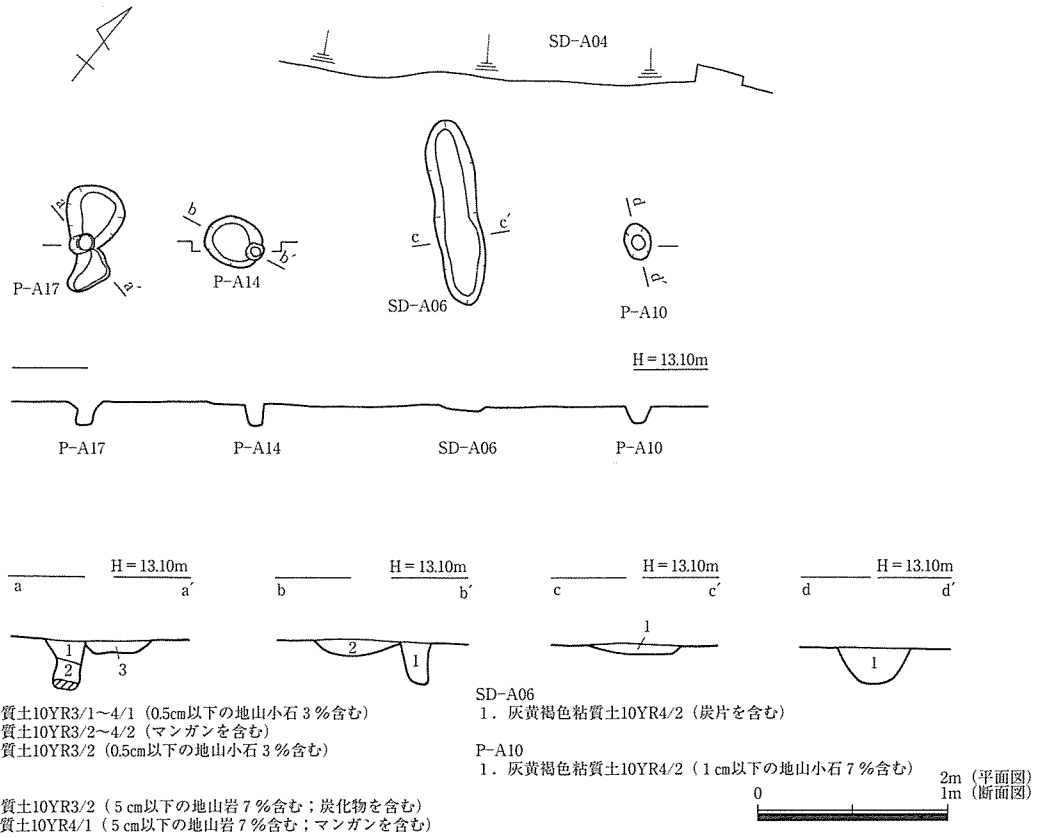
P-A05
1．黒色粘質土7.5Y2/1（0.5cm以下の地山小石7％含む；炭片を含む）
2．黒褐色粘質土10YR3/1（0.5cm以下の地山小石7％含む）

P-A06
1．黒色粘質土10YR2/2（0.5cm以下の地山小石3％含む）
2．黒褐色粘質土10YR3/1～4/1（0.5cm以下の地山小石7％含む）
3．黒色粘質土10YR7/1（炭片を含む）

P-A08
1．黒褐色粘質土10YR2/1（0.5cm以下の地山小石2％含む）

2m（平面図）
1m（断面図）

第8図　SA-A02実測図



P-A17
1．黒褐色粘質土10YR3/1～4/1（0.5cm以下の地山小石３％含む）
2．黒褐色粘質土10YR3/2～4/2（マンガンを含む）
3．黒褐色粘質土10YR3/2（0.5cm以下の地山小石３％含む）

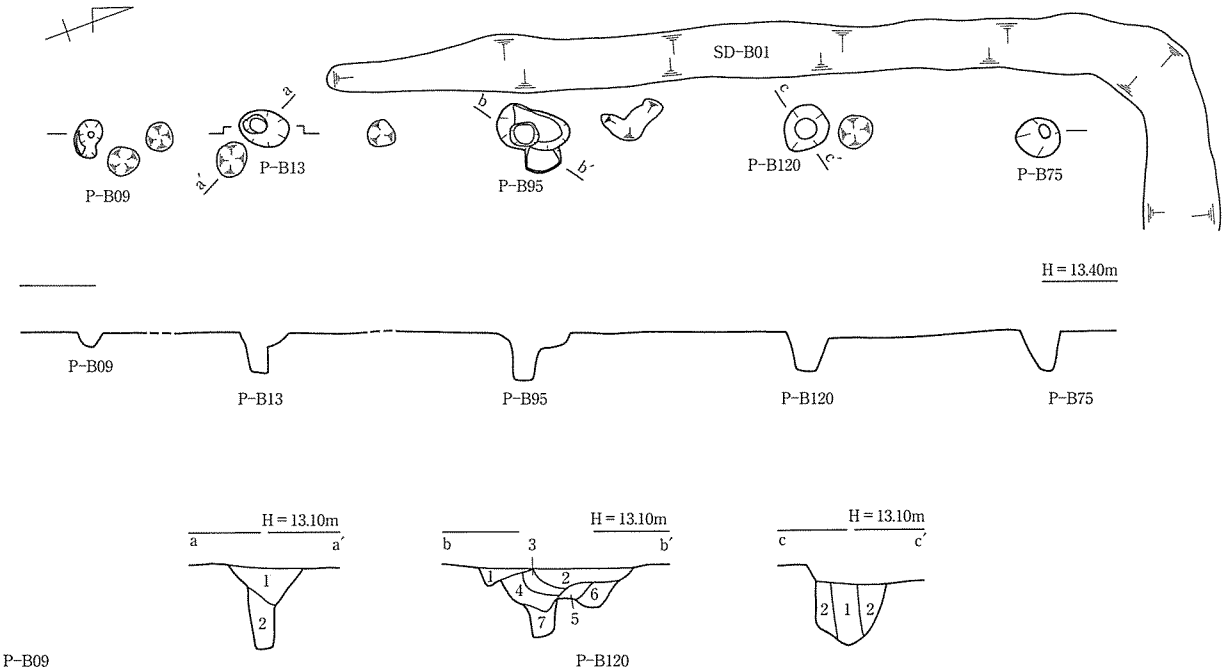
P-A14
1．黒褐色粘質土10YR3/2（５cm以下の地山岩７％含む；炭化物を含む）
2．褐灰色粘質土10YR4/1（５cm以下の地山岩７％含む；マンガンを含む）

SD-A06
1．灰黄褐色粘質土10YR4/2（炭片を含む）

P-A10
1．灰黄褐色粘質土10YR4/2（１cm以下の地山小石７％含む）

2m（平面図）
1m（断面図）

第９図　SA-A03実測図



P-B09
1．にぶい黄褐色粘質土10YR4/3

P-B13
1．褐灰色粘質土10YR4/1（２cm大の地山小石５％含む）
2．灰黄褐色粘質土10YR4/2

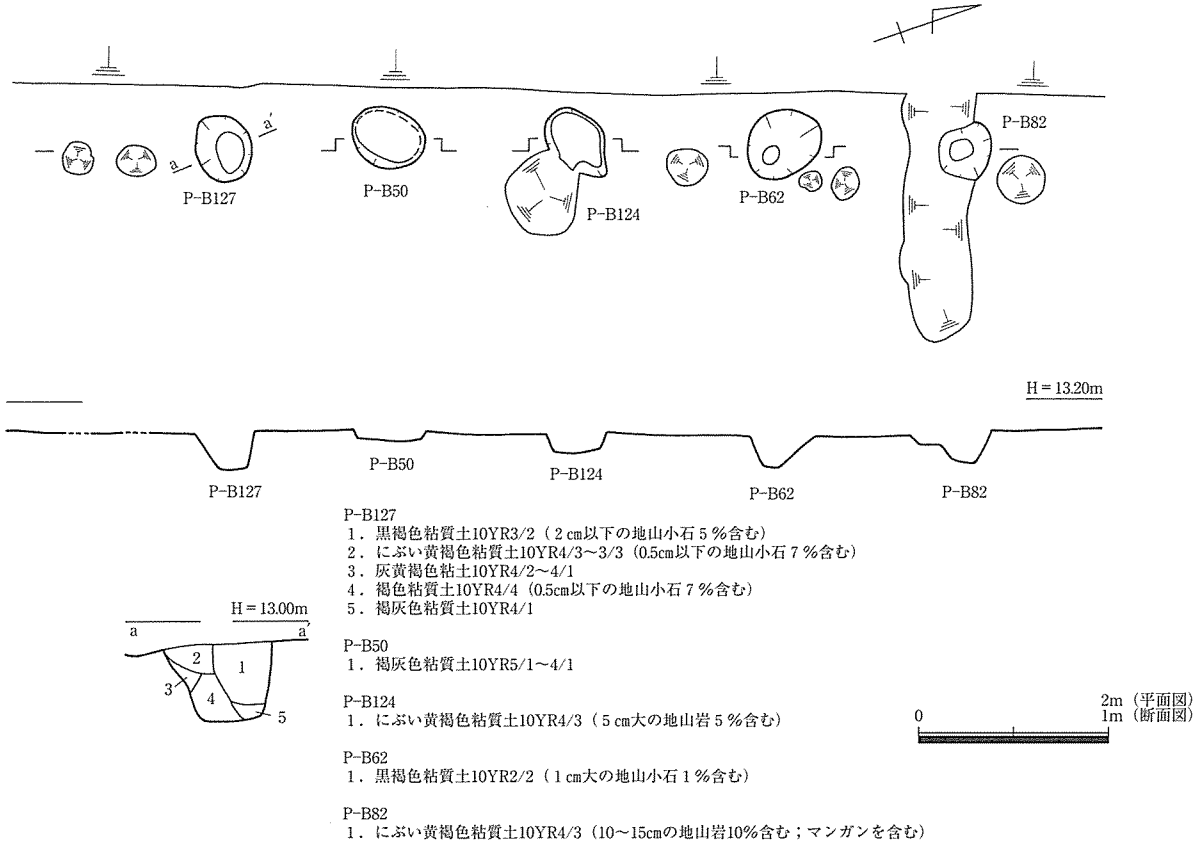
P-B95
1．灰黄褐色粘質土10YR5/2～4/2（３cm以下の地山小石７％含む）
2．灰黄褐色粘質土10YR4/2（褐色粘質土10YR4/4ブロック５％含む）
3．にぶい黄色粘質土2.5Y6/3（３cm以下の地山小石７％含む）
4．にぶい黄橙色粘質土10YR6/4（３cm以下の地山小石７％含む）
5．灰黄褐色粘土10YR4/2（３cm以下の地山小石７％含む）
6．にぶい褐色粘質土7.5YR5/4（３cm以下の地山小石７％含む）
7．黄褐色粘質土2.5Y5/4（３cm以下の地山小石７％含む）

P-B120
1．灰黄褐色粘質土（僅かに炭化物を含む）
2．灰黄褐色粘質土（３cm以下の地山小石７％含む）

P-B75
1．灰黄褐色粘質土10YR4/2（３cm以下の地山小石７％含む；炭片を含む）

2m（平面図）
1m（断面図）

第10図　SA-B01実測図



第11図　SA-B02実測図

出した柱穴の柱間寸法は107～139㎝を測り、平均は126㎝となる。P-A04には柱痕が確認でき、P-A26には柱根が遺存していた。径は各々15㎝、6㎝を測る。この柵列の北西側には、SX-A01が僅かに検出されており、さらに北西側は県道が機能しており調査地外となる為、詳細は不明であるが本来は建物であった可能性もある。P-A26の柱根を放射性炭素（^{14}C）年代測定した結果AD.1001～1155年という結果を得ている。樹種はブナ科クリ属クリ。[1]

SA-A02（第8図）

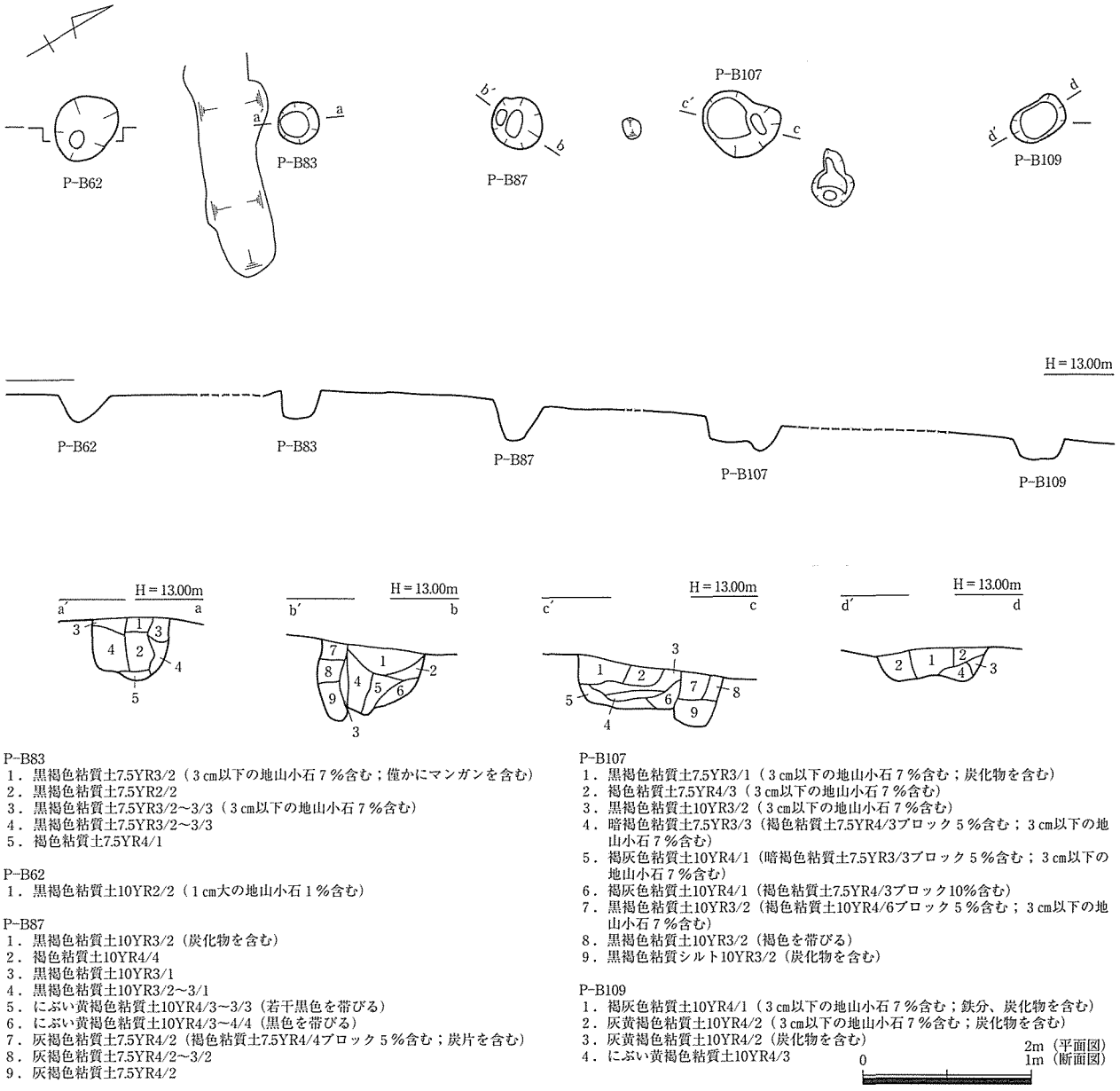
A区、北東側、SA-A01の南西に位置する。検出面の標高は12.7mである。全長は5.24mを測る。主軸はN-50°-Eにとる。検出した柱穴の柱間寸法は258、266㎝を測り、平均は262㎝となる。P-A05、A-06には柱痕が確認できる。径は各々22㎝、8㎝を測る。新旧関係は明確ではないが北西側にはSX-A01、南東側にはSD-A01が検出されており、SA-A01同様、建物であった可能性も考えられる。

SA-A03（第9図）

A区のほぼ中央に位置する。検出面の標高は12.75mである。全長は5.82mを測る。主軸はN-51°-Eにとる。検出した柱穴の柱間寸法は178～217㎝を測り、平均は194㎝となる。P-A14、A-17には柱痕が確認できる。径は各々16㎝、21㎝を測る。新旧関係は明確ではないが北西側にはSD-A04、A03が検出されており、SA-A01、A02同様、建物であった可能性も考えられる。

SA-B01（第10・25図、図版23）

B区、北西端、SB-B01とSD-B01の間に位置する。検出面の標高は12.9mである。全長は10.10mを測る。主軸はN-19°-Eにとる。検出した柱穴の柱間寸法は178～299㎝を測り、平均は253㎝となる。断面観察により柱痕を確認できる柱穴も3基存在し、その径は14～17㎝程度である。SB-B01と同軸であ



第12図　SA-B03実測図

ることから建物に伴う可能性も考えられるが明確ではない。

遺物はP-B13内から須恵器の高台付杯（1）が出土している。口縁部は外傾、端部は丸く納める。底部と体部の境界は屈曲する。推定口径12.9cm、器高4.3cmとなる。

SA-B02（第11・25図、図版23）

B区、北西端、SB-B01と重複する。検出面の標高は12.9mである。全長は7.76mを測る。主軸はN-20°-Eにとる。検出した柱穴の柱間寸法は169～204cmを測り、平均は194cmとなる。明確に柱痕跡を確認できるものはなかった。P-B82がSD-B01を切ることから、SB-B01の方が先行すると考えられる。主軸が近似することからSB-B01の建替えに伴う柱列の可能性も考えられるが、対応する柱列が検出できず明確ではない。

遺物はP-B82内から弥生土器（4）が出土している。（4）は口縁外面には平行沈線を有す。混入と考えられる。

SA-B03（第12図）

Ｂ区、調査地の南西寄り、SB-B01の北東に位置する。検出面の標高は12.6～12.9mである。全長は11.49mを測る。主軸はN-29°-Eにとり、SA-B01、B02とは異なる。検出した柱穴の柱間寸法は257～369cmを測り、平均は287cmとなる。断面観察により柱痕跡を確認できる柱穴も３基存在し、その径は15～26cm程度である。

３．土坑

SK-A01（第13図）

Ａ区の北東端に位置する。検出面の標高は12.6mである。平面形は不整円形を呈する。径は83～93cm、深さ12cmを測る。埋土は単一層で、にぶい黄褐色粘質土10YR4/３（0.5cm以下の地山小石を５％含む）となる。

SK-A02（第13図、図版９）

Ａ区のほぼ中央に位置する。検出面の標高は12.8mである。平面形は楕円形を呈し、主軸をN-31°-Wにとる。検出面での長さ77cm、幅66cm、深さ６cmを測る。埋土は単一層で、黒褐色粘質土10YR3/２（0.5cm以下の地山小石２％、炭片７％含む）となる。

SK-A03（第13図、図版９）

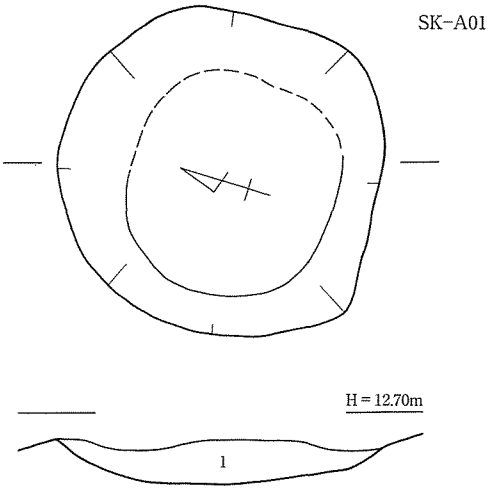
Ａ区の西端付近に位置する。検出面の標高は13.1mである。平面形は不整楕円形を呈し、主軸をN-65°-Eにとる。検出面での長さ78cm、幅64cm、深さ19cmを測る。埋土は単一層で、暗灰黄色粘質土2.5Y4/２（0.5cm以下の地山小石５％含む）となる。また、長さ12～27cm、幅４～10cmの比較的扁平な石が10石程含まれていた。

SK-B01（第14図、図版19）

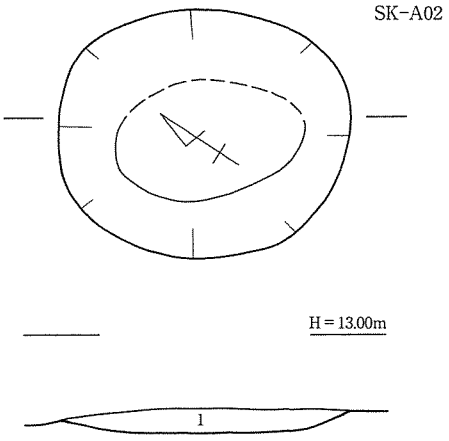
Ｂ区の南西端付近に位置する。検出面の標高は12.7mである。SK-B02を切り、北東側の一部が削平により欠ける。平面形は楕円形を呈し、主軸をN-43°-Eにとる。検出面での長さ118cm、幅76cm、深さ24cmを測る。埋土は単一層で、にぶい黄褐色粘質土10YR4/３～４/２（２cm大の石10％含む）となる。

SK-B02（第14図、図版19）

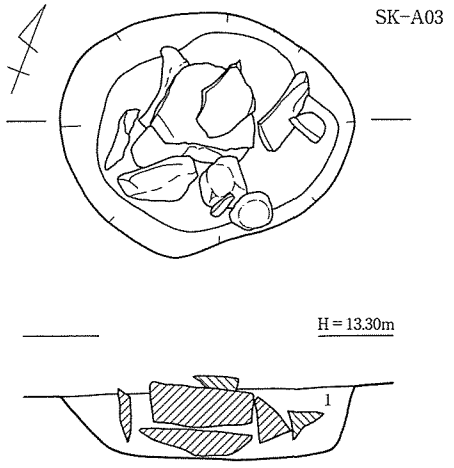
Ｂ区の南西端付近に位置する。検出面の標高は12.8mである。P-B45を切り、一部をSK-B01に



1．にぶい黄褐色粘質土10YR4/3（0.5cm以下の地山小石５％含む）

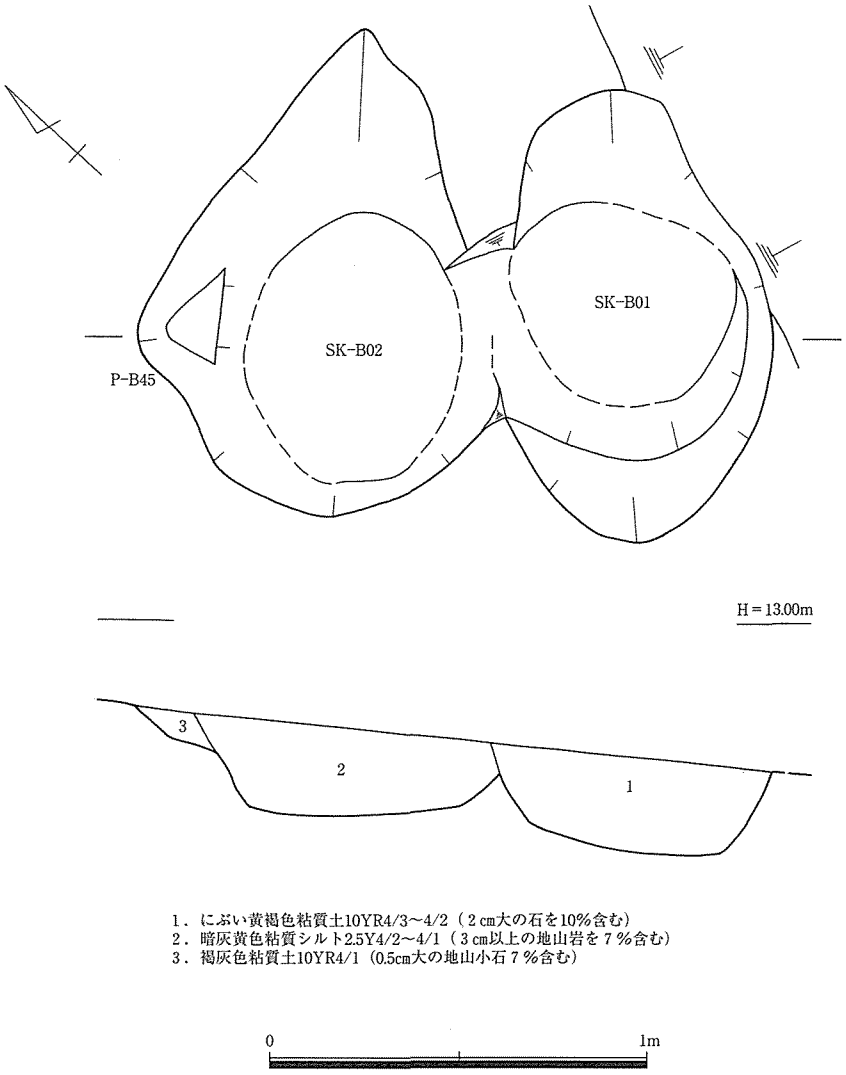


1．黒褐色粘質土10YR3/2（0.5cm以下の地山小石２％含む；炭片７％含む）



1．暗灰黄色粘質土2.5Y4/2（0.5cm以下の地山小石５％含む）

第13図　SK-A01～A03実測図



第14図　SK-B01・B02実測図

切られる。平面形は不整楕円形を呈し、主軸をN-52°-Eにとる。検出面での長さ128㎝、幅98㎝、深さ23㎝を測る。埋土は単一層で、暗灰黄色粘質シルト2.5Y4/2～4/1（3㎝以上の地山岩7%含む）となる。

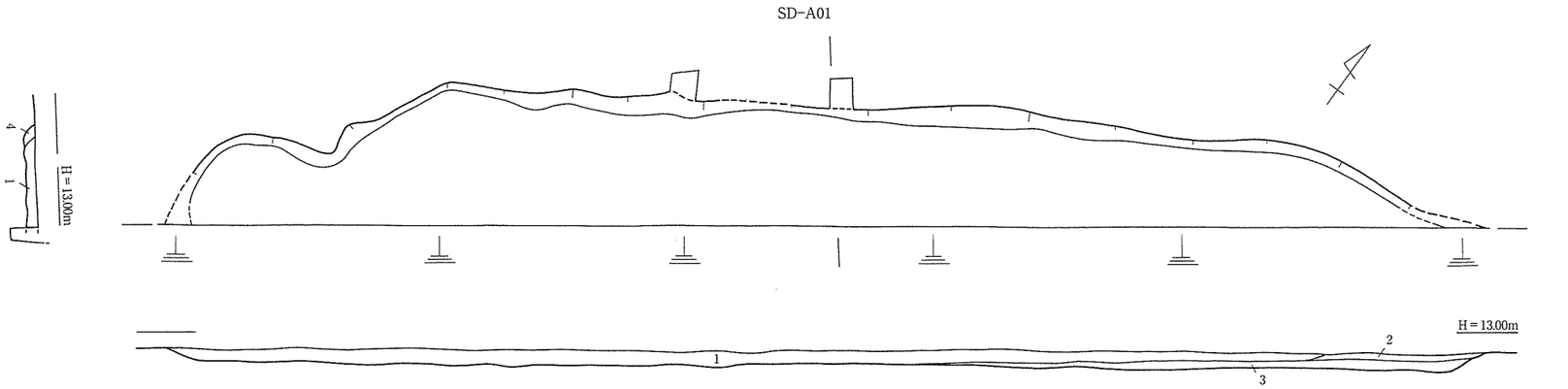
4．溝状遺構

SD-A01（第15図、図版10）

A区の北東側に位置する。検出面の標高は12.7mである。南東側の大部分が調査地外となり、溜り状の大きな土坑である可能性もある。現状での主軸はN-60°-Eにとる。平面形は不整、歪な形状を呈する。検出長17.72m、残存幅193㎝、深さ24㎝を測る。深さはほぼ均一で、標高は12.6m前後である。埋土は4層に分層できるが単純な堆積である。主たる埋土は黄灰色粘土2.5Y5/1～6/2である。

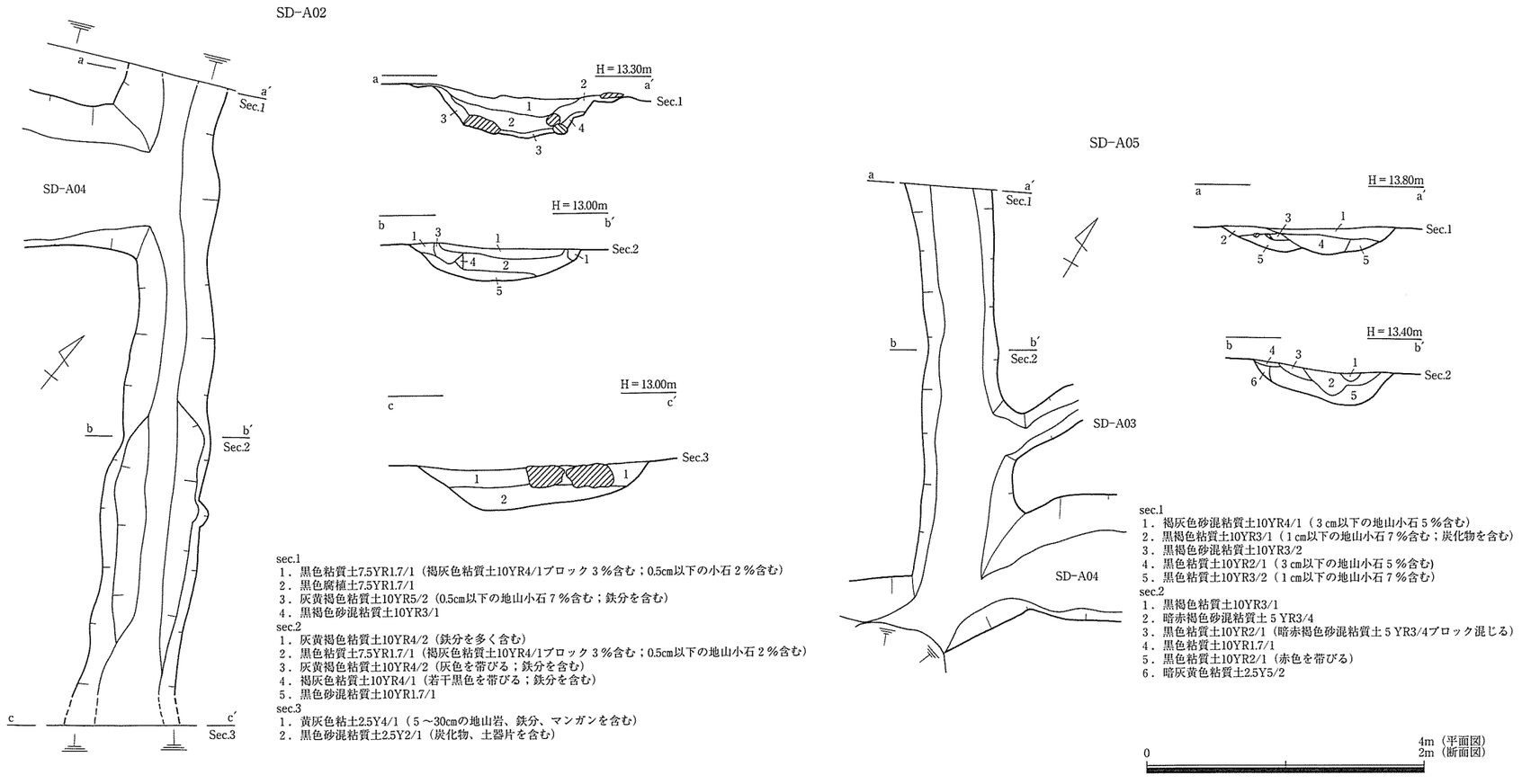
SD-A02（第15・17図、図版11・21）

A区、中央やや北東寄りに位置する。検出面の標高は13.1～12.7mである。北西端、南東端は調査地外へと延びる。また、SD-A04と接するが新旧関係は明確ではない。主軸はN-34°-Wにとる。検出長9.48m、最大幅168㎝、深さ34㎝を測る。底面の標高は12.5～12.9mとなり、南東（内海川）方向に傾斜する。埋土は2～5層に分層でき、黒色系と灰黄褐色の粘質土を主とする。



1．黄灰色粘土2.5Y5/1～6/2
2．黄灰色粘土2.5Y5/1～5/2（褐色砂混粘質土10YR4/2ブロック５％含む）
3．褐灰色砂混粘質土10YR4/1（黄灰色粘土2.5Y5/1～6/2ブロック30％含む）
4．灰黄褐色粘質土10YR5/2～4/3（褐色粘質土10YR4/4混じる）

0　4m

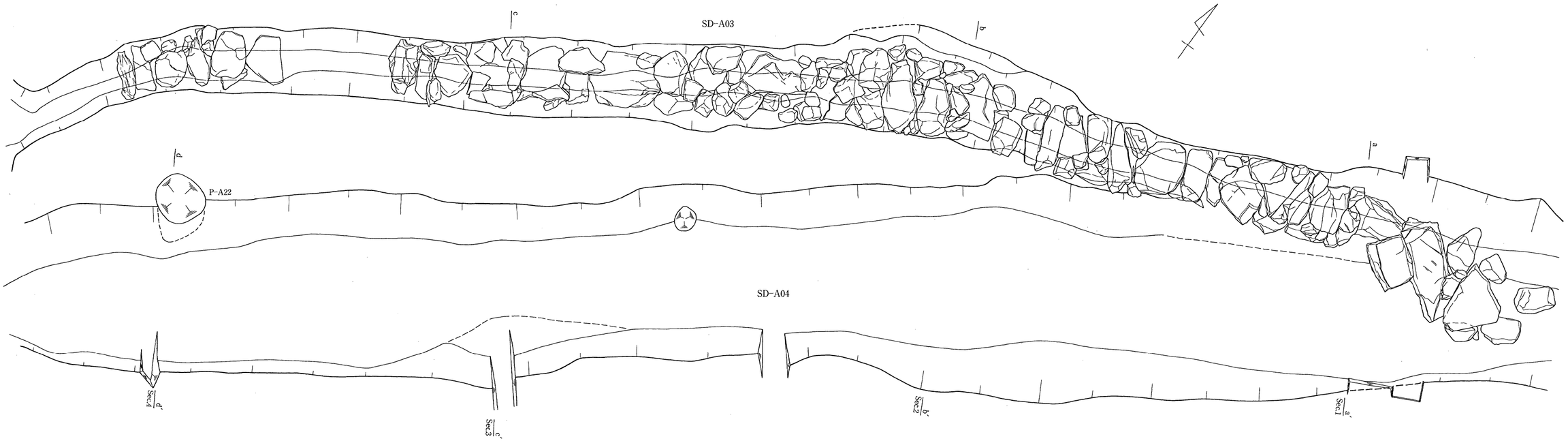


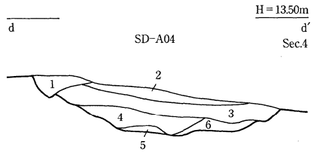
sec.1
1．黒色粘質土7.5YR1.7/1（褐灰色粘質土10YR4/1ブロック３％含む；0.5cm以下の小石２％含む）
2．黒色腐植土7.5YR1.7/1
3．灰黄褐色粘質土10YR5/2（0.5cm以下の地山小石７％含む；鉄分を含む）
4．黒褐色砂混粘質土10YR3/1
sec.2
1．灰黄褐色粘質土10YR4/2（鉄分を多く含む）
2．黒色粘質土7.5YR1.7/1（褐灰色粘質土10YR4/1ブロック３％含む；0.5cm以下の地山小石２％含む）
3．灰黄褐色粘質土10YR4/2（灰色を帯びる；鉄分を含む）
4．褐灰色粘質土10YR4/1（若干黒色を帯びる；鉄分を含む）
5．黒色砂混粘質土10YR1.7/1
sec.3
1．黄灰色粘土2.5Y4/1（５～30cmの地山岩、鉄分、マンガンを含む）
2．黒色砂混粘質土2.5Y2/1（炭化物、土器片を含む）

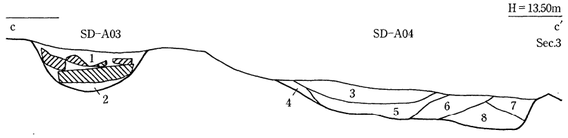
sec.1
1．褐灰色砂混粘質土10YR4/1（３cm以下の地山小石５％含む）
2．黒褐色粘質土10YR3/1（１cm以下の地山小石７％含む；炭化物を含む）
3．黒褐色砂混粘質土10YR3/2
4．黒色粘質土10YR2/1（３cm以下の地山小石５％含む）
5．黒色粘質土10YR3/2（１cm以下の地山小石７％含む）
sec.2
1．黒褐色粘質土10YR3/1
2．暗赤褐色砂混粘質土５YR3/4
3．黒色粘質土10YR2/1（暗赤褐色砂混粘質土５YR3/4ブロック混じる）
4．黒色粘質土10YR1.7/1
5．黒色粘質土10YR2/1（赤色を帯びる）
6．暗灰黄色粘質土2.5Y5/2

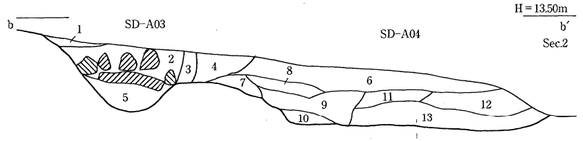
0　4m（平面図）
2m（断面図）

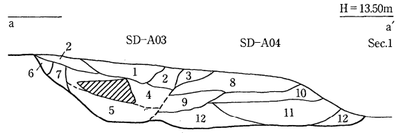
第15図　SD-A01・A02・A05実測図











sec.4
1．黒色粘質土7.5YR3/1～3/2（１cm以下の地山小石５％含む；鉄分、僅かの炭化物を含む）
2．黒褐色粘質土10YR3/2（１cm以下の地山小石５％含む；鉄分を含む）
3．黒褐色粘質土10YR3/1～3/2（0.5cm以下の地山小石５％含む；炭化物を含む）
4．黒褐色粘質土2.5Y3/1（２cm以下の地山小石５％含む）
5．灰オリーブ色粘質土5Y6/2～6/3（鉄分を含む）
6．黄灰色粘質土2.5Y4/1～5/1（0.5cm以下の地山小石７％含む；鉄分を含む）

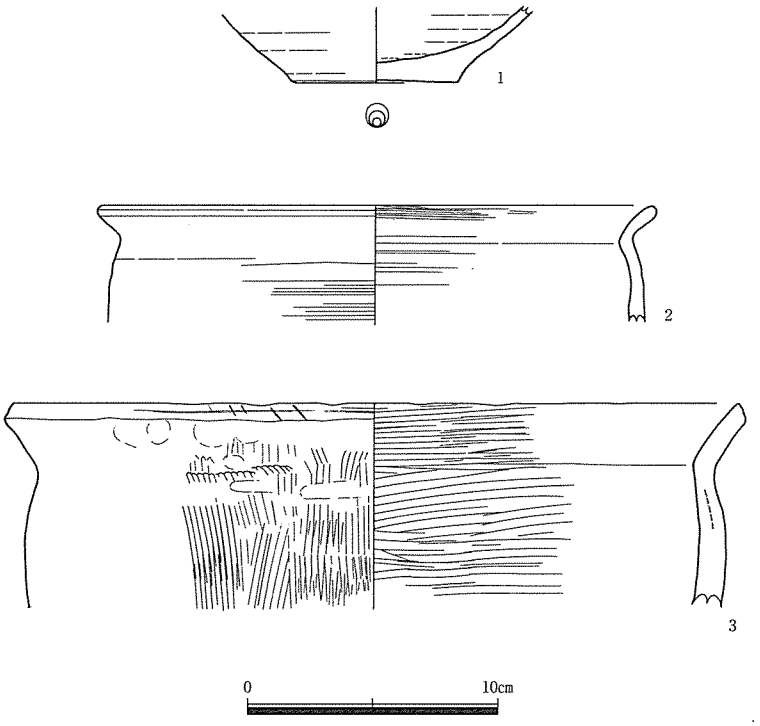
sec.3
1．黒褐色粘質土10YR3/1（0.5cm以下の地山小石７％含む）
2．黒褐色粘質土5Y2/1
3．黄灰色粘質土10YR4/1（黒褐色粘質土2.5Y３/１ブロック５％含む；0.5cm以下の地山小石７％含む）
4．暗灰黄色粘質土2.5YR5/2～6/2（１cm以下の地山小石７％含む）
5．黒褐色粘質土2.5Y3/1（２cm以下の地山小石５％含む）
6．黒褐色粘質土10YR3/2（１cm以下の地山小石５％含む）
7．黒褐色粘質土2.5Y3/2（鉄分を含む）
8．褐灰色粘質土10YR4/1（１cm以下の地山小石５％含む）

sec.2
1．黒褐色粘質土10YR3/1（0.5cm以下の地山小石７％含む）
2．黒褐色粘質土10YR3/2（0.5cm以下の地山小石７％含む；炭片を含む）
3．黒色粘質土10YR2/1（0.5cm以下の地山小石２％含む）
4．黒色粘質土10YR2/1（0.5cm以下の地山小石７％含む）
5．黒褐色粘質土5Y2/1
6．黒褐色粘質土10YR3/1（１cm以下の地山小石７％含む；僅かに炭片を含む）
7．灰黄褐色粘質土10YR4/2（鉄分を含む）
8．褐灰色粘質土10YR4/1（暗灰黄色粘質土2.5Y5/2ブロック５％含む）
9．褐灰色粘質土10YR4/1（僅かに鉄分を含む）
10．褐灰色粘質土10YR4/1～5/1（暗灰黄色粘質土2.5Y5/2ブロック５％含む）
11．黒褐色粘質土2.5Y3/2（0.5cm以下の地山小石７％含む）
12．黒褐色粘質土10YR3/2（0.5cm以下の地山小石７％含む；マンガンを含む）
13．黄灰色粘質土2.5Y4/1（灰黄色粘質土2.5Y6/2ブロック２％含む；0.5cm以下の地山小石７％含む；鉄分を含む）

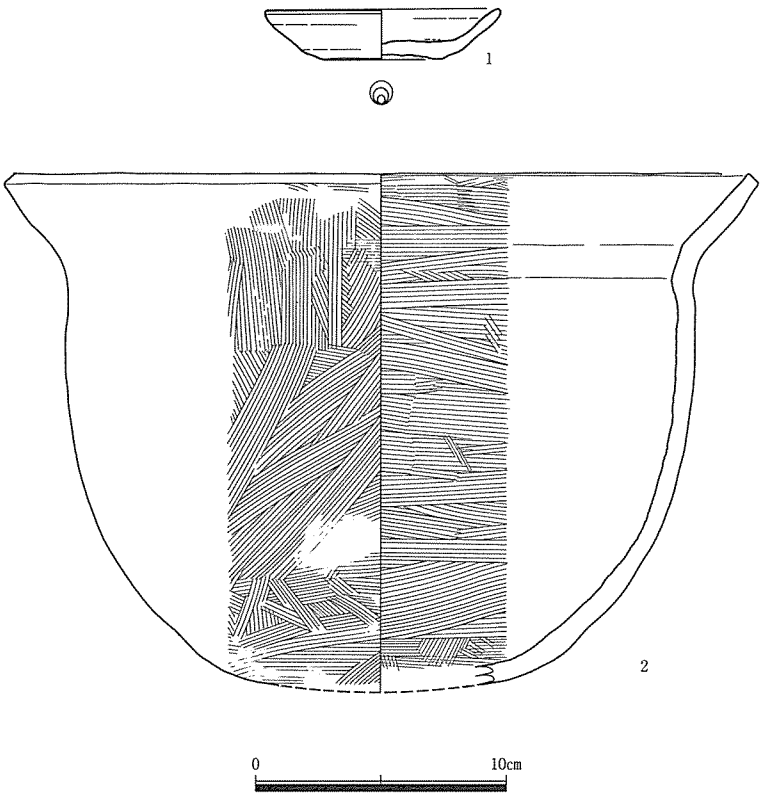
sec.1
1．黒褐色粘質土10YR3/1（１cm以下の地山小石３％含む；僅かに灰を含む）
2．黒色粘質土10YR2/1～3/1（0.5cm以下の地山小石７％含む；僅かに灰を含む）
3．黒褐色粘質土10YR3/2（0.5cm以下の地山小石７％含む）
4．黒褐色粘質土10YR3/2～3/1（0.5cm以下の地山小石７％含む）
5．黒褐色粘質土5Y2/1
6．にぶい黄褐色粘質土10YR4/3（黒色を帯びる）
7．灰黄褐色粘質土10YR4/2（黒色を帯びる；僅かに鉄分を含む）
8．黒褐色粘質土10YR3/2（灰黄褐色粘質土10YR4/2ブロック５％含む；0.5cm以下の地山小石７％含む）
9．黒褐色粘質土10YR3/1～3/2（0.5cm以下の地山小石７％含む）
10．黒褐色粘質土2.5Y3/1～3/2（0.5cm以下の地山小石２％含む）
11．褐灰色粘質土2.5Y4/1（１cm大の地山小石７％含む）
12．黄灰色粘質土2.5Y4/1（灰黄色粘質土2.5Y６/２ブロック２％含む；0.5cm以下の地山小石７％含む；鉄分を含む）

0　2m

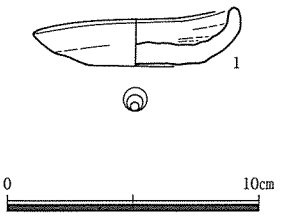
第16図　SD-A03・A04実測図



第17図　SD-A02出土遺物実測図



第19図　SD-A04出土遺物実測図



第18図　SD-A03出土遺物実測図

遺物は土師器の杯底部（1）、土師器の甕口縁部（2・3）が出土している。（1）は底部外面に回転糸切痕を有す。（2・3）はともに「く」の字状口縁、（2）は端部を丸く納め、（3）は端部に面を有す。ともに煤、炭化物が付着する。

SD-A03（第16・18図、図 版12・21）

A区、中央北西側に位置する。検出面の標高は13.2mである。北東端は先行するSD-A04と合流してSD-A02と接する。南西端はSD-A05と接する。ともに新旧関係は明確ではない。主軸はN-54°-Eにとるが、南東側を中心に緩やかに湾曲する。検出長17.16m、最大幅122cm、深さ57cmを測る。溝内には大きさ30～80cm程度、厚さ8～16cmの扁平な割石を中央に並べ、隙間を20cm弱の小振りな石で充填する。底面までは6～22cmの空間を有する。底面の標高は12.7～12.9mとなり、北東方向に傾斜する。埋土は2～6層に分層でき、黒色系の粘質土を主とする。

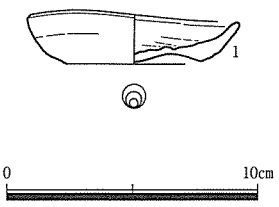
遺物は土師器の皿（1）が出土している。全体的に歪で、口径7.8～8.4cm、底径4.2～4.5cm、器高1.9cmを測る。底部外面に回転糸切痕を有す。

SD-A04（第16・19図、図版12・21・22）

A区、中央北西側、SD-A03の南東に位置する。検出面の標高は12.8～13.1mである。北東端、南西端を各々SD-A02、SD-A05と接する。ともに新旧関係は明瞭でない。また、北東側約1/3をSD-A03に切られる。主軸はN-52°-Eにとる。検出長18.68m、最大幅256cm、深さ58cmを測る。底面の標高は

12.6m前後でほぼ均一である。埋土は５～８層に分層できるが、褐灰色、黒褐色、黄灰色の粘質土を主とする。

遺物は土師器の皿（１）、甕（２）が出土している。（１）は口径9.1cm、器高2.0cmを測り、底部外面に回転糸切痕を有す。（２）は口縁部が外傾、端部に面を有する。肩部は張らずに底部へと続く。推定口径28.8cm、器高20.5cmとなる。内外面ともにハケ目調整。



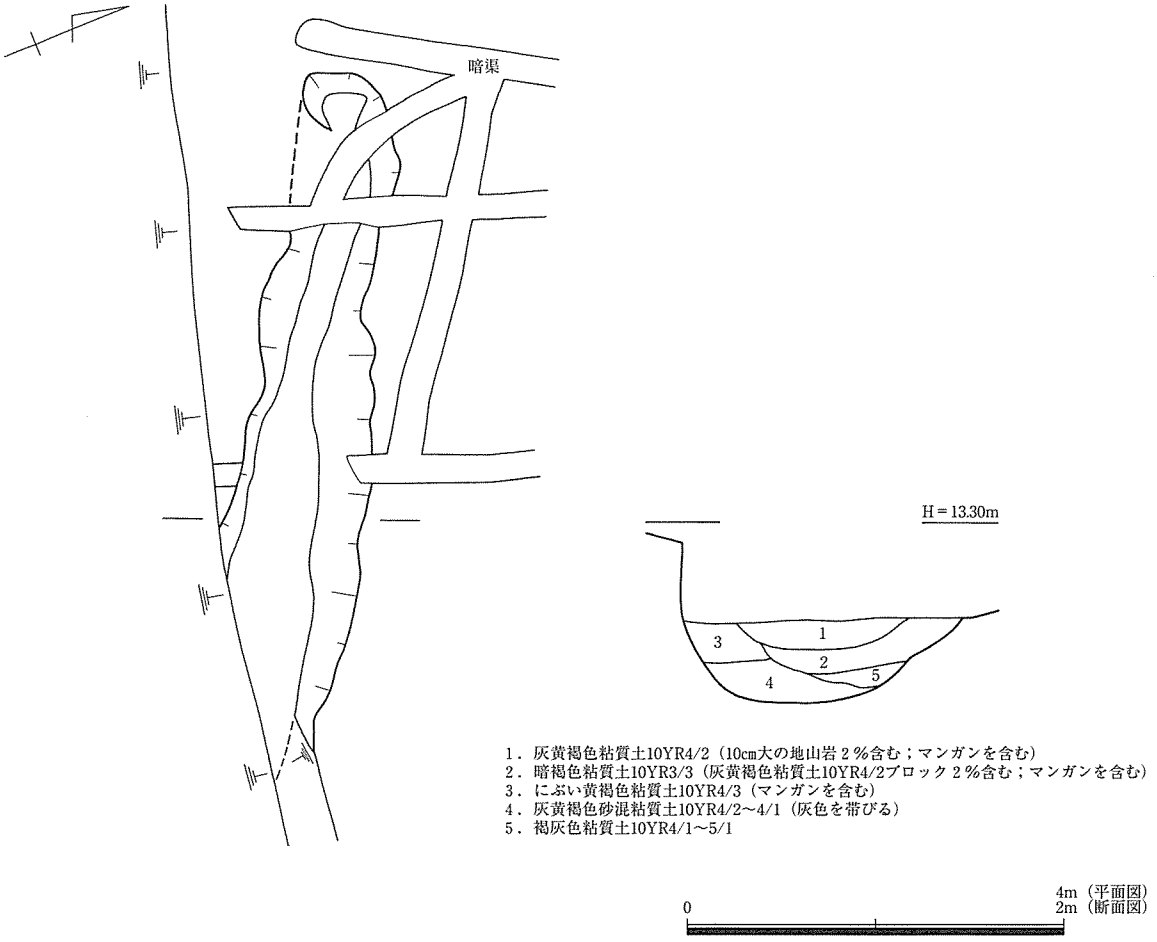
第20図　SD-A05出土遺物実測図

SD-A05（第15・20図、図版13・22）

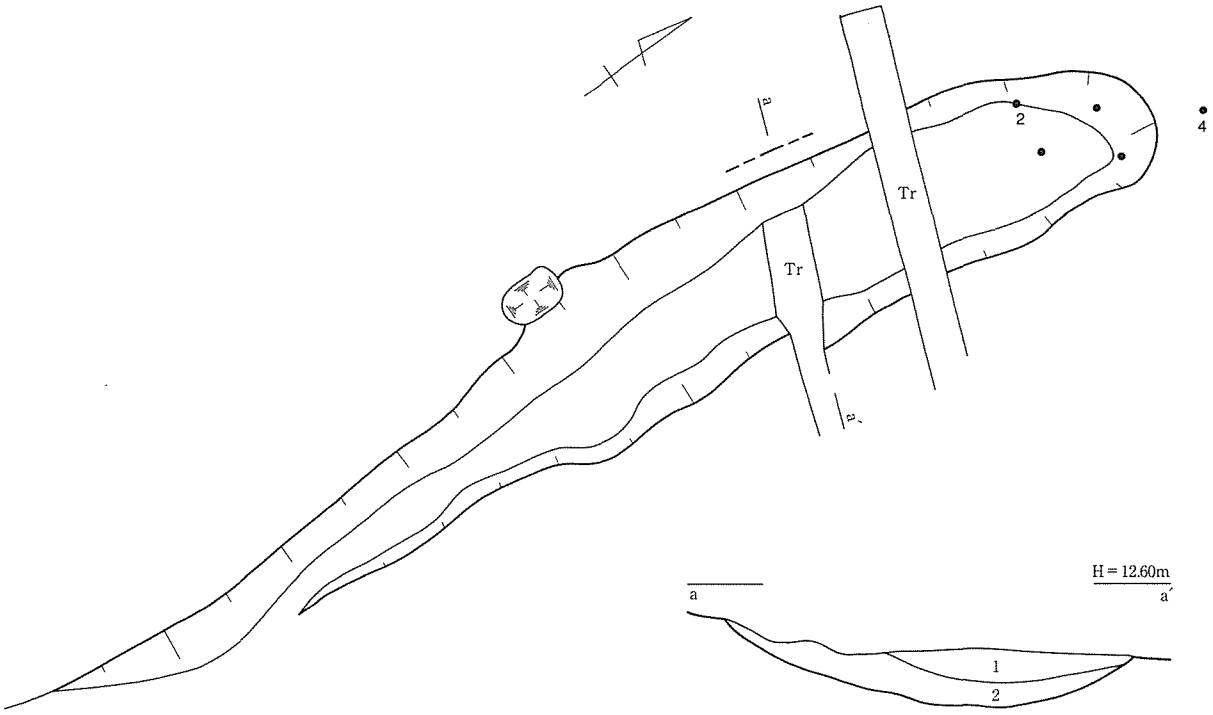
Ａ区、中央南西寄りに位置する。検出面の標高は13.0～13.4mである。北西端は調査地外へと延び、南東端はSD-A04と接し消滅するが、本来はさらに延びていた可能性も考えられる。また、中央北東側でSD-A03とも接する。ともに新旧関係は明瞭でない。主軸はN-32°-Wにとる。検出長5.70m、最大幅134cm、深さ24cmを測る。底面の標高は12.8～13.3mとなり、南東（内海川）方向に傾斜する。埋土は５・６層に分層でき、黒色系の粘質土を主とするが中央部には砂が混じる。遺物は土師器の皿（１）が出土している。口縁部は歪み、口径は7.9～8.2cm、器高1.8cmを測る。底部外面に回転糸切痕を有す。

SD-B01（第６図、図版18）

Ｂ区、北西側に位置する。検出面の標高は12.9～13.0mである。主軸をN-18°-Eにとるが、ほぼ直角に屈曲する。南西端、東端ともに収束する。検出長9.46m、最大幅100cm、深さ19cmを測る。底面の標高は12.8m前後と比較的、均一である。埋土は単一層で灰黄褐色粘質土10YR4/２～３/２である。SB-B01と同軸であり、位置関係からもSB-01に伴う溝状遺構と考えられる。



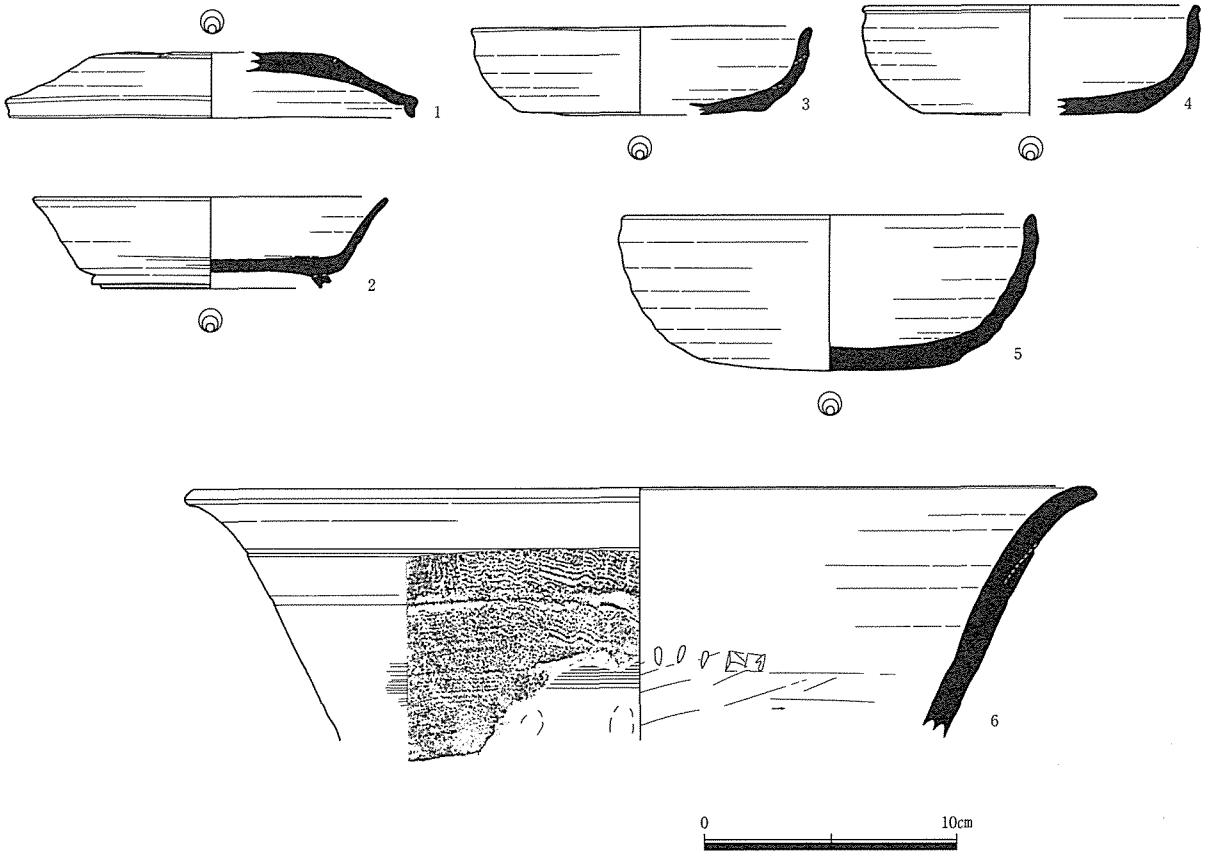
第21図　SD-B02実測図



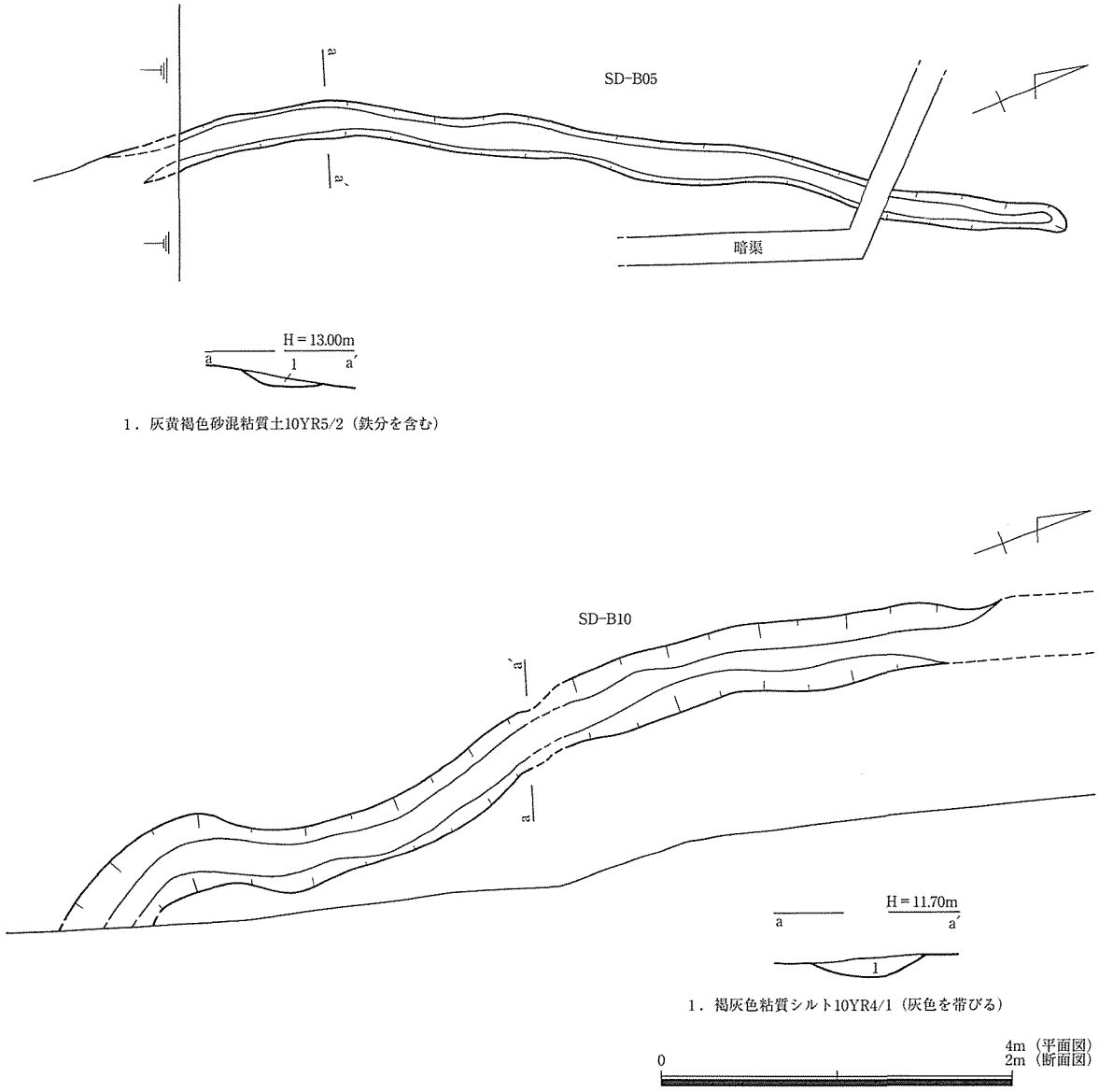
1．褐灰色粘質土10YR4/1（砂、３㎝以下の地山小石２％含む）
2．灰黄褐色粘土10YR5/2（３㎝以下の地山小石２％含む；鉄分を含む）

4m（平面図）
2m（断面図）

第22図　SD-B03実測図



第23図　SD-B03出土遺物実測図



第24図　SD-B05・B10実測図

SD-B02（第21図、図版19）

Ｂ区、南西端に位置する。検出面の標高は12.8～12.9mである。北西端は収束し、南東端は調査地外へと延びる。主軸はN-62°-Wにとる。検出長7.12m、最大幅155cm、深さ44cmを測る。底面の標高は12.3～12.8mとなり、南東（内海川）方向に傾斜する。埋土は５層に分層でき、褐色系の粘質土を主とする。

SD-B03（第22・23図、図版22・23）

Ｂ区のほぼ中央に位置する。検出面の標高は12.2～12.3mである。北端は収束し、南端は削平により消滅する。主軸はN-８°-Eにとる。検出長13.06m、最大幅191cm、深さ46cmを測る。底面の標高は12.1m前後でほぼ均一である。埋土は上下２層に分層でき、上層は褐灰色、下層は灰黄褐色の粘(質)土となり、上層には砂を含む。

遺物は須恵器（１～６）が出土している。（１）は杯蓋、復元口径15.8cm。（２）は高台付杯。口縁部は外反、底部と体部の境界は屈曲する。推定口径13.8cm、器高3.7cmを測る。底部外面に回転糸切痕を有す。（３～５）は無高台杯。すべて底部外面に回転糸切痕を有す。（３・４）は口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部を外方へつまみ出す。（５）は口縁部が内湾して立ち上がり、端部は上方に丸く納める。

法量は（3）が復元口径13.2cm、器高3.5cm、（4）が復元口径13.0cm、器高4.4cm、（5）が推定口径16.0cm、器高6.2cmとなる。（6）の口縁部は推定口径35.4cmとなり、外面には2条の沈線、2段の波状文、カキ目を有する。これらの遺物から概ね8世紀後半に比定できようか。

SD-B04（第4図）

B区、北西側、SD-B01の北東側に位置する。検出面の標高は12.9mである。南側を中心に湾曲する。西端は収束し、南東端は次第に浅くなり消滅する。本来は南東から南方向へ延びていた可能性も考えられる。検出長203cm、最大幅28cm、深さ13cmを測る。埋土は単一層で灰黄褐色粘質土10YR4/2である。

SD-B05（第24図）

B区、中央やや北東寄りに位置する。検出面の標高は12.9mである。南東側を中心に湾曲する。北東側の一部を暗渠に切られる。北東端は収束し、南端は次第に浅くなり消滅する。主軸はN—25°—Eにとる。検出長10.09m、最大幅47cm、深さ9cmを測る。埋土は単一層で灰黄褐色砂混粘質土10YR5/2である。暗渠に切られることから近現代以前の所産と考えられる。

SD-B06（第4図）

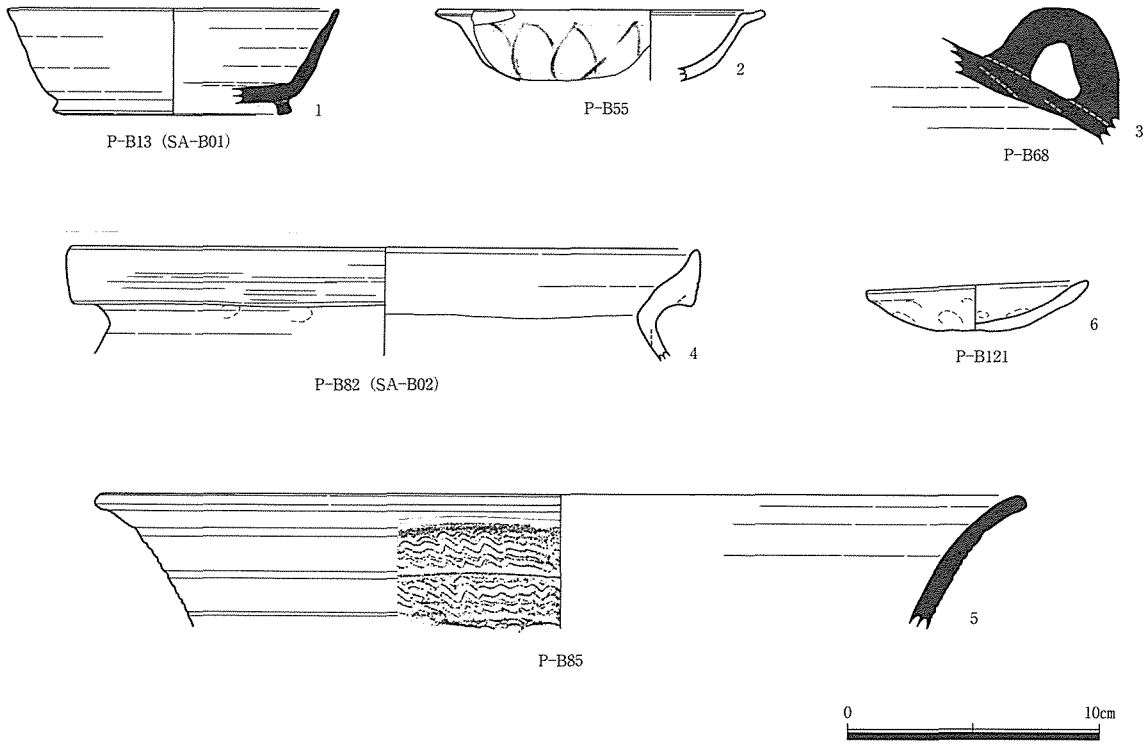
B区、北東側、SD-B05の東側に位置する。検出面の標高は12.7～12.8mである。西端は暗渠に切られ、東端は削平されている。主軸はN-69°-Eにとり、検出長475cm、最大幅37cm、深さ12cmを測る。埋土は単一層で黄褐色粘質土2.5Y5/3である。近世以降の暗渠若しくは耕作痕と考えられる。

SD-B07（第4図）

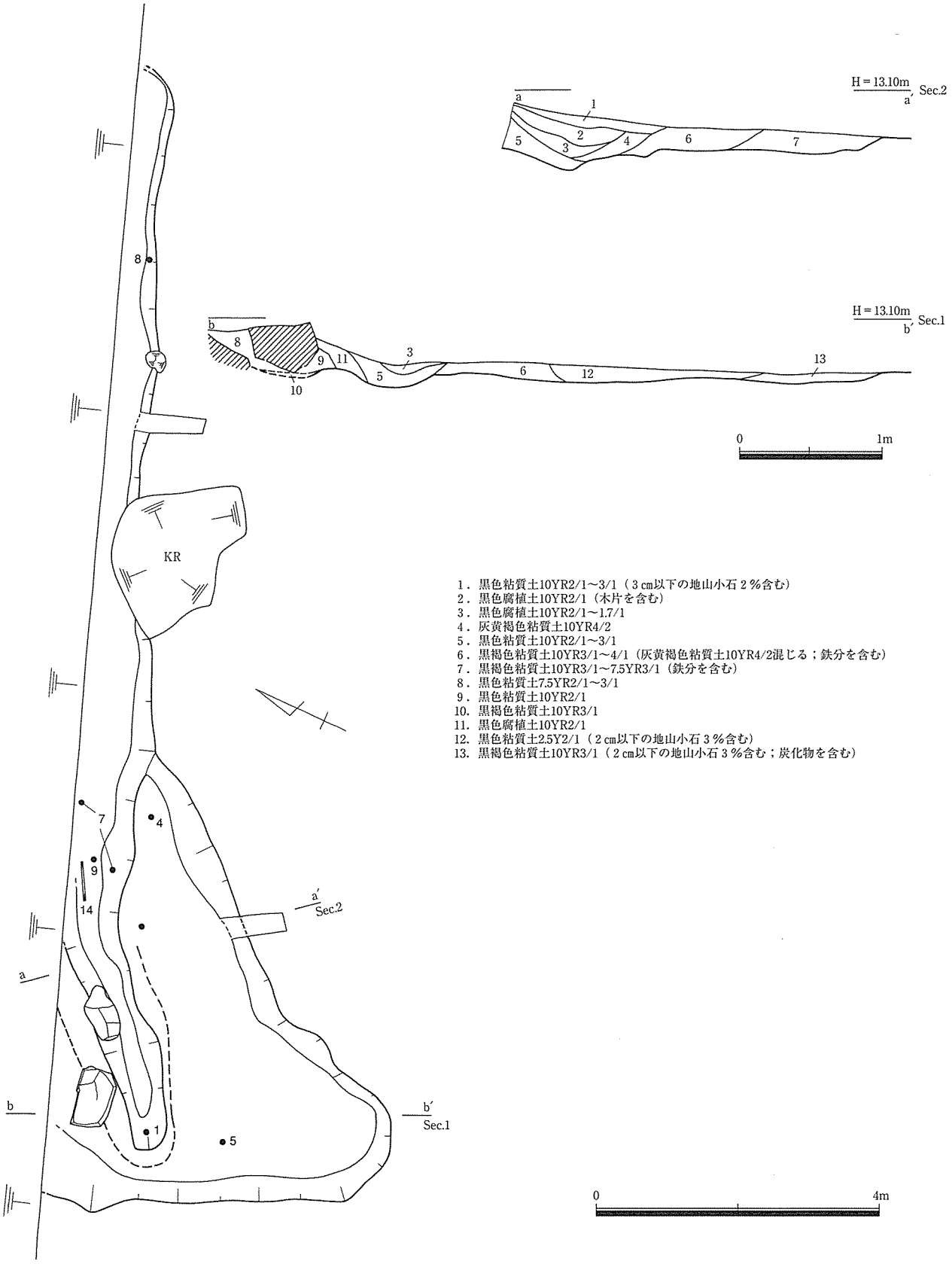
B区、北東端に位置する。検出面の標高は12.8m前後である。北東端は収束し、南東端は削平されている。主軸はN-66°-Wにとり、検出長227cm、最大幅32cm、深さ10cmを測る。埋土は単一層で黄褐色粘質土2.5Y5/3である。近世以降の暗渠若しくは耕作痕と考えられる。

SD-B08・09（第4図）

B区、南西側、SB-B01の東側に位置する。検出面の標高は12.0m前後である。ともに平面形は不整



第25図　Pit内出土遺物実測図

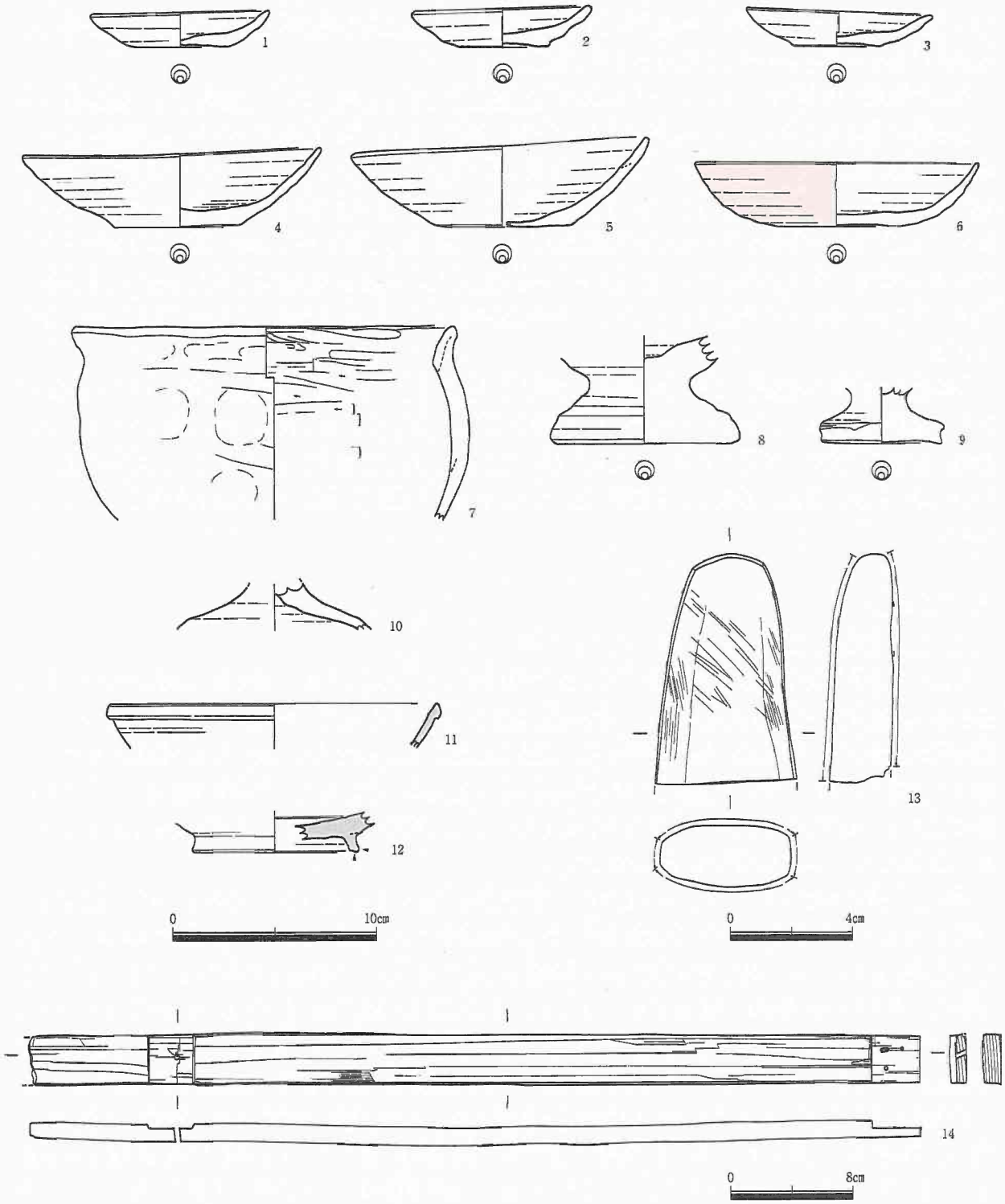


第26図　SX-A01実測図

形で、両端は収束する。深さは10cm弱。埋土は単一層で、ともに暗灰黄色粘質土（シルト）2.5Y5/2（２cm以下の地山小石を５％含む）調査地の所見、埋土の雰囲気等から近世以降の攪乱坑、耕作痕と考えられる。

SD-B10（第24図）

Ｂ区、南端に位置する。検出面の標高は11.5～11.6mである。北端は次第に浅くなり消滅し、南端は調査地外となる。主軸、N-25°-W～N-16°-Eの範疇で僅かに蛇行する。検出長11.27m、最大幅86cm、深さ７～11cmを測る。底面の標高は11.3～11.5mとなり、南方向に緩やかに傾斜する。埋土は単一



第27図　SX-A01出土遺物実測図

層で褐灰色粘質(土)シルト10YR4/1である。なお、北端の延長上、調査区の横断面2に同等の土層が認められ、その推定長は21.58mに達する。横断面2以北については未確認ゆえ、さらに延びる可能性もあるが横断面3では確認できなかった。

5．柱穴・ピット（第3・4・25図、図版5・23）

A区においては21基を検出している。うち12基は柵列（SA）を構成する。他は点在しており、施設を構成するものではない。平面形は概ね円形、楕円形を呈する。径は20～70cm程度で20～30cm代のものが多い。平均径は33cmとなる。深さは5～50cm程度で10～20cm代のものが多い。平均は22cmとなる。明確に柱痕を確認できるものは5基程度で2割強である。埋土は黒(褐)色系の粘質土を主とするが暗灰黄色や褐灰色など灰色系が混ざる粘質土も若干存在する。

B区では127基を検出している。うち23基は掘立柱建物（SB)、柵列（SA）を構成する。南西側、SB-B01周辺に集中しており、他の場所では全く検出されなかった。平面形は概ね円形、楕円形を呈するが不整円形のものも若干存在する。総体的にA区より遺存状態は良く、径は20～100cm程度で20～40cm代のものが多い。平均径は47cmとなる。深さは10～80cm程度で10～30cm代のものが多い。平均は35cmとなる。明確に柱痕を確認できるものは30基程度で4割強である。埋土は灰黄褐色、黒褐色の粘質土を主とするが褐灰色、暗褐色の粘質土も存在する。今回は建物や柵列などの施設は4棟しか想定できなかったが、部分的に集中して検出されたことなどから本来は施設を構成するものも多数存在したものと考えられる。

遺物はP-B55から青磁皿（2）、P-B68から須恵器把手（3）、P-B85から須恵器口縁部（5）、P-B121から土師器の皿（6）が出土している。（2）は端部が外方へ屈曲する。復元口径12.7cmとなる。体部外面、花弁状の陰刻。色調はオリーブ灰色を呈する。（5）は推定口径36.0cmとなる。口縁部外面に3条の沈線で区画、区間に波状文を3段以上施す。（6）は復元口径8.6cm、器高2.1cmを測る。全体に指圧成形。

6．不明遺構

SX-A01（第26・27図、図版5・14～16・24・25）

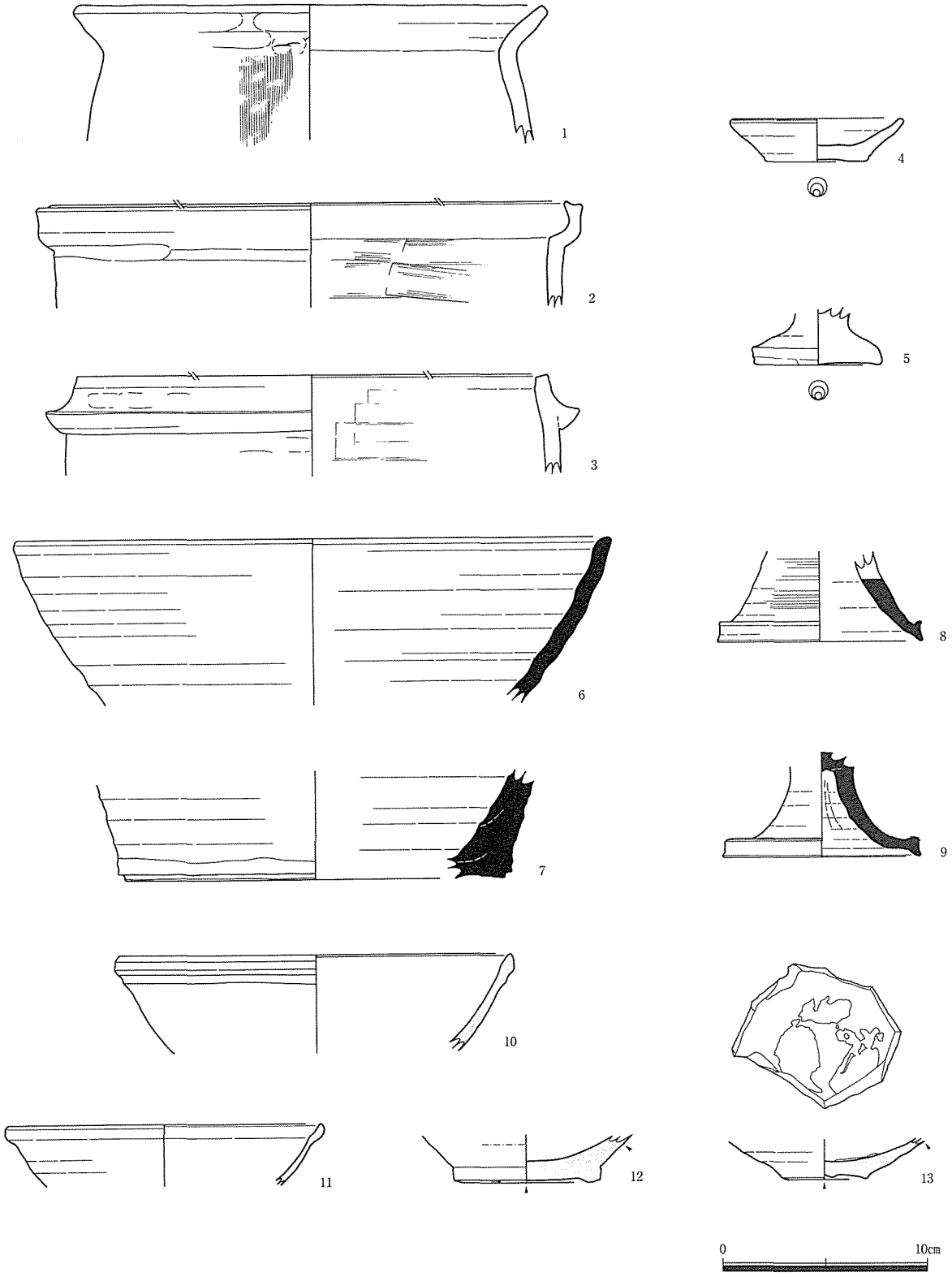
A区、中央北東寄り、SD-A01の北西側、SD-A02の北東側に位置する。検出面の標高は12.7～13.0mを測る。北西側は調査地外となり、一部がSA-A01を構成するP-A26、P-A29と撹乱坑に切られる。南西端は収束する。主軸はN-65°-Eにとる。検出長16.0m、最大幅493cm、深さ39cmを測る。遺構の半分以上が調査地外となるため全体像は不明であるが、平面形は撥状、もしくは不整形を成し、中央部が溝状に凹む。溝状の幅は130cm程度である。埋土は7～9層に分層できる。黒色系の粘質土を主とするが、溝状部分には腐植土の堆積も認められる。

遺物は土師器の皿（1～3)、杯（4～6)、柱状高台（8・9)、鍋（7)、脚台部（10)、緑釉陶器（12)、白磁（11)、砥石（13)、木製品（14）などが出土している。（1～3）は口径8.5～9.0cm、器高1.9～2.1cmとなり、ほぼ同じ規格である。口縁部は外傾して開き、端部は丸く納める。（1・3）は若干細る。すべて底部外面糸切痕を有す。（4・5）は口径13.8～14.5cm、器高4.0・4.1cmとなり、ほぼ同じ規格である。ともに口縁部は底部から直線的に開き、底部外面には糸切痕を有す。（6）は口縁部が底部から内湾しながら大きく開く。復元口径は13.7cm、器高3.2cmを測る。底部外面には糸切痕を有す。外面には赤彩を施す。（7）は口縁部が短く外傾する。復元口径18.5cmとなる。外面には煤、内面には炭化物が多く付着する。（8）は底径8.5cm、（9）は5.8cmを測る。ともに底部外面には糸切痕を有す。(11）は玉縁口縁。推定口径15.9cmとなる。(13）は石斧を転用した砥石か。刃部は欠失する。長軸4面に使用痕が認められる。これらの遺物から11世紀後半から12世紀代に比定できようか。(14）は木

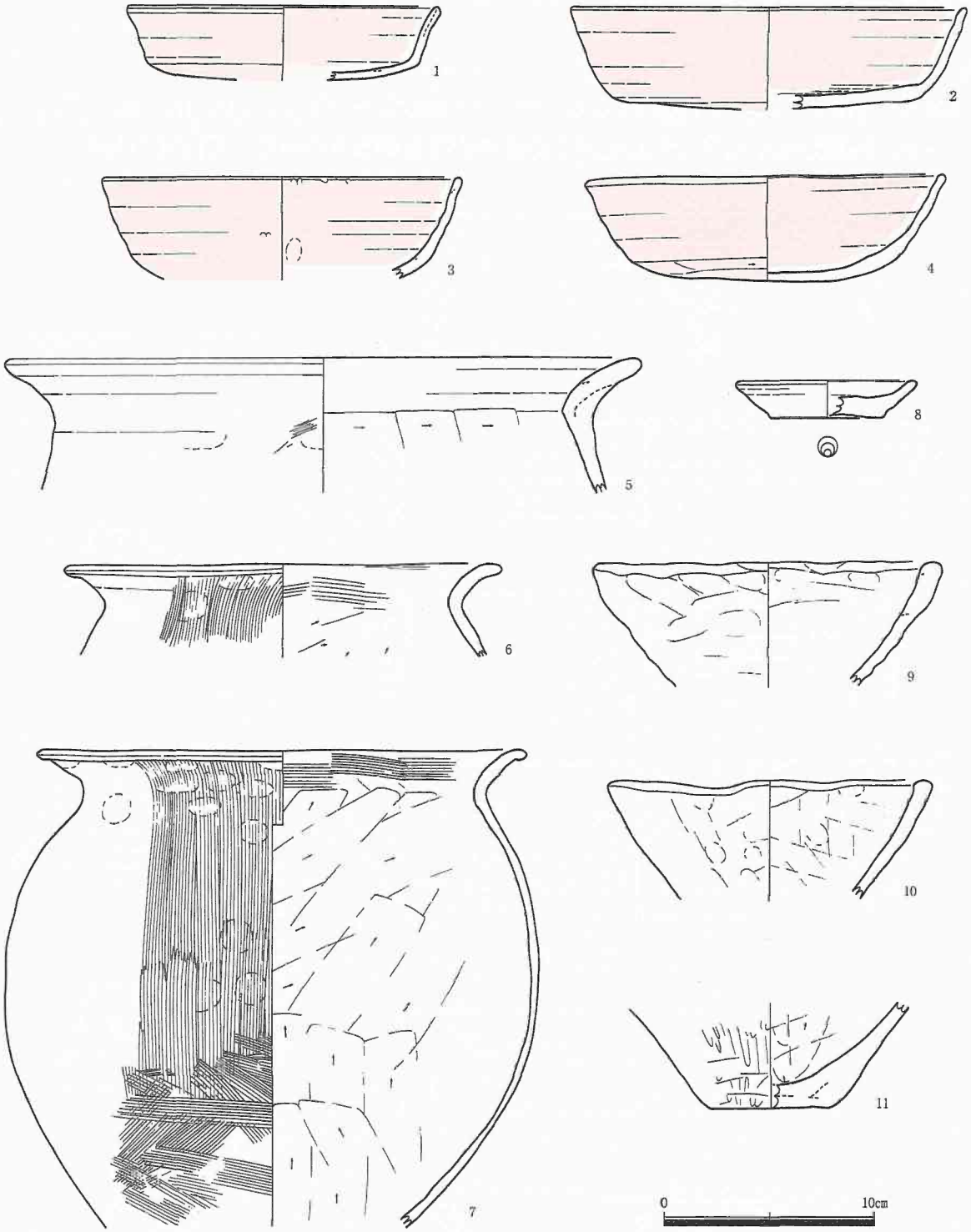
製品、長さ58.5cm、幅3.5cm、厚さ1.3cmを測る。部材か。

7．遺構外出土遺物（第28～31図、図版５～７・25～29）

Ａ区では主に（１～13）が出土している。（１）は土師器の甕。「く」の字状口縁、推定口径22.4cm。（２・３）は瓦質土器。（２）は鍋、受け口状の口縁部で端面は凹面を成す。推定口径25.0cm。（３）は

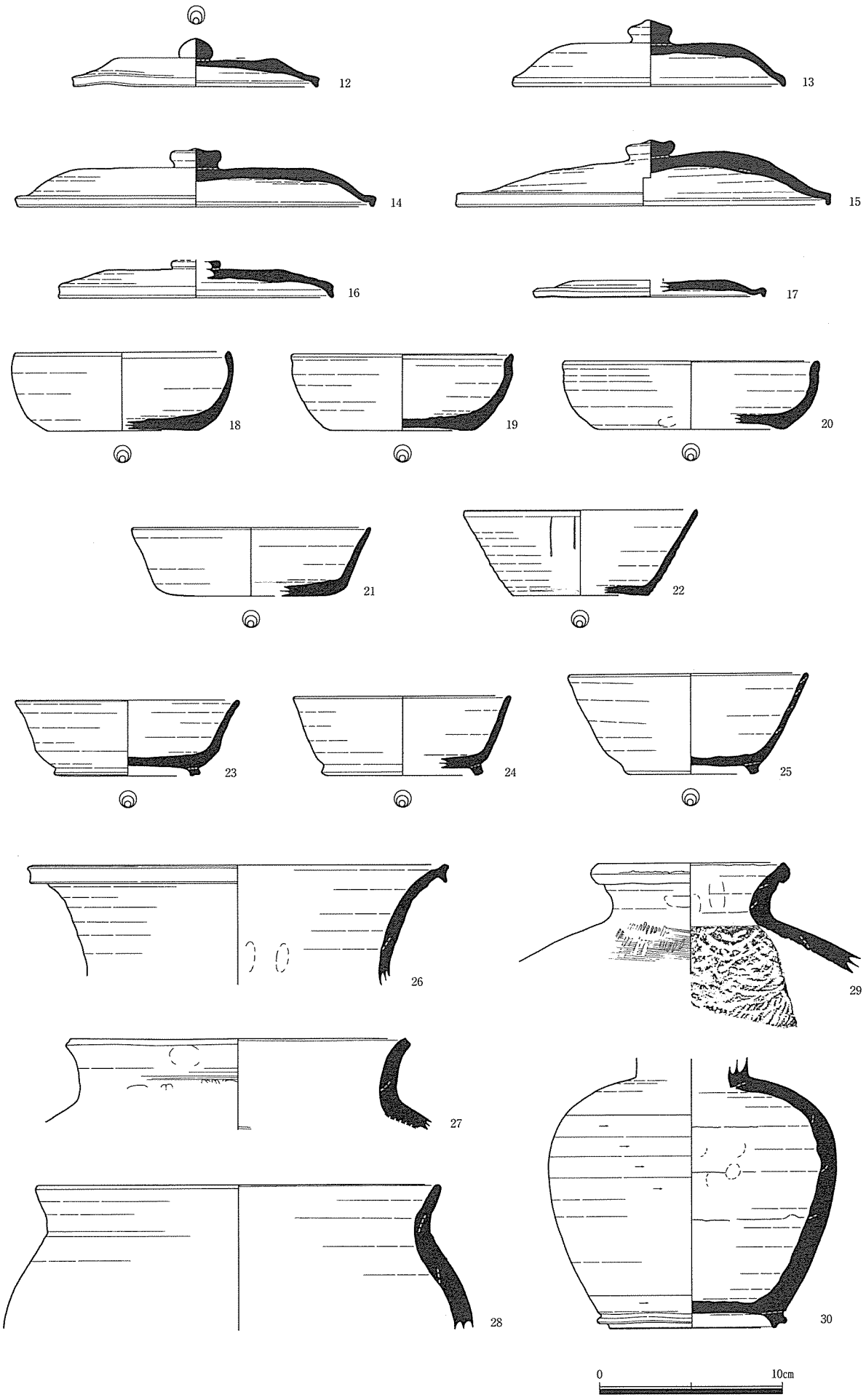


第28図　A区遺構外出土遺物実測図



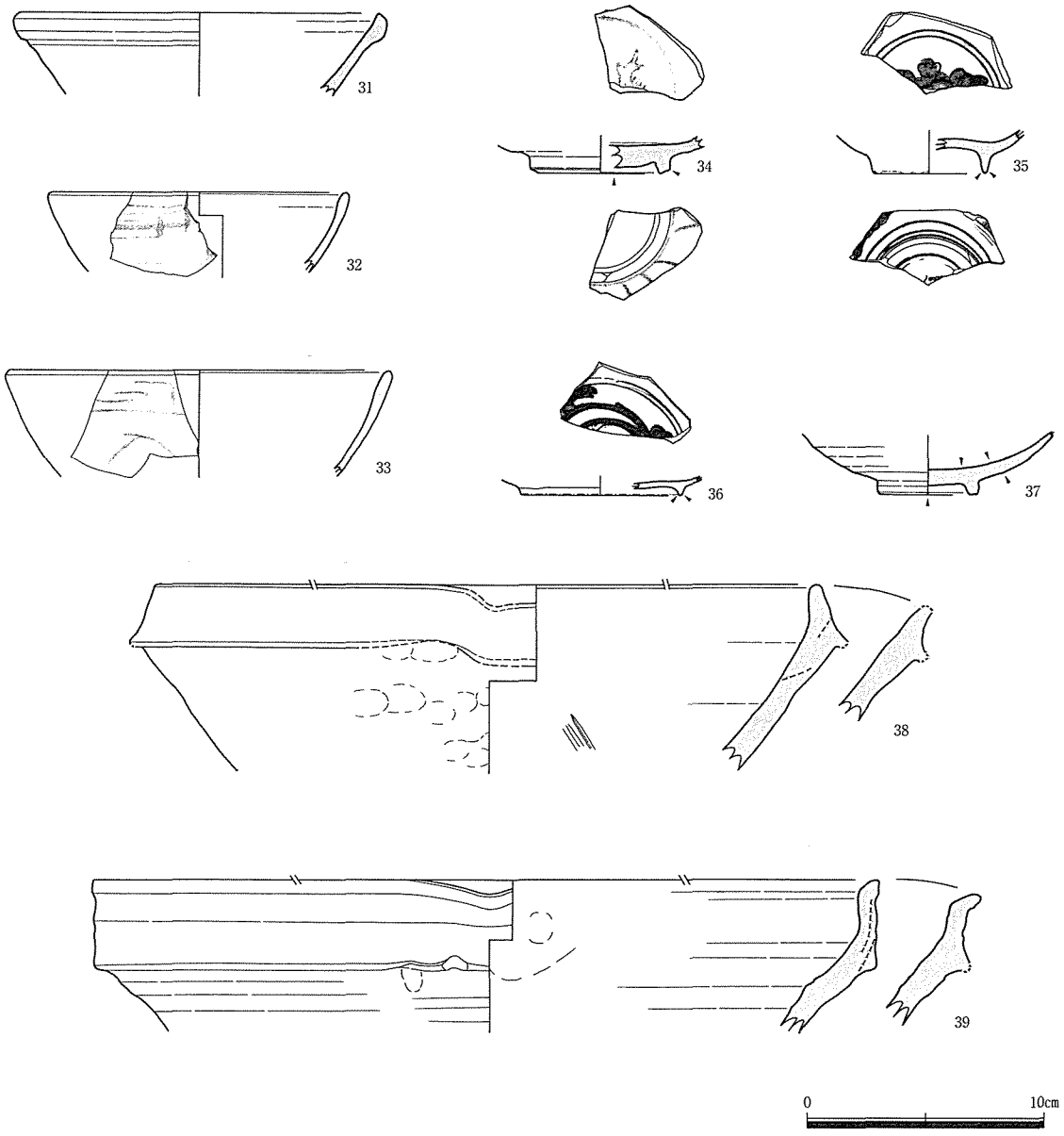
第29図　B区遺構外出土遺物実測図(1)

羽釜。口縁部は内傾気味、鍔は断面三角形状。推定口径22.8cm。（4）は土師器の皿、復元口径8.0cm、器高2.1cmを測る。（5）は柱状高台、底径6.2cm。（4・5）はともに底部外面には糸切痕を有す。（6～9）は須恵器。（6）の口縁部は内湾気味に立ち上がる。復元口径28.6cm。鉢か。（7）は底部、平底。（8・9）は脚台部。（8）は「ハ」の字状に開き、（9）はラッパ状に開く。(10～12) は白磁。(10・11) は碗の口縁部、ともに玉縁口縁。(10) は推定口径18.9cm、(11) は15.2cm。(12) は底部。高台脇から高台内は無釉。(13)は陶器の底部。外面無釉、高台内に兜巾有。見込み3ケ所に砂目跡が残る。17世紀前半、肥前産。



第30図　B区遺構外出土遺物実測図(2)

B区では主に（1～39）が出土している。（1～4）は土師器の杯。すべて内外面に赤彩を施す。（1）の口縁部は外反、（2～4）は外傾する。（1）は若干小振りで復元口径14.5cm、器高3.5cm。（1・2）は体部と底部の境界は屈曲して明瞭である。（5～7）は土師器の甕。（5・6）は口縁部のみ遺存。（5・6・7）は口縁部外反する。すべて外面ハケ目、内面頸部以下ヘラ削り。（8）は土師器の皿。復元口径8.1cm、器高1.8cmを測る。底部外面には糸切痕を有す。（9・10）は製塩土器。ともに手捏ね成形。復元口径は（9）が15.4cm、（10）が14.4cmとなる。（11）は底部、平底。（12～30）は須恵器。（12～17）は杯蓋。すべて「つまみ」を有し、（12～15）は宝珠形、（17）は剥離する。（18～22）は無高台杯。すべて底部外面には糸切痕を有す。（18～20）は口縁部が内湾気味に立ち上がる。（21・22）は口縁部が外傾して直線的に立ち上がる。（22）は復元器高4.7cm。（23～25）は高台付杯、すべて底部外面には糸切痕を有す。（23）の口縁部は外反気味、（24・25）は外傾して直線的に立ち上がる。（25）は復元口径12.7cm、器高5.5cmと大振りである。（26～29）は壺の口縁部。（26）は外反して立ち上がり、端部で上下に肥厚して凹面を成す。（27）も外反して端部に面を有す。（28）は短く外傾、端部は丸く納める。（29）も短く外傾、端部は玉縁状に外方に肥厚する。外面には平行タタキ、内面に同心円状の当て工具



第31図　B区遺構外出土遺物実測図(3)

痕が顕著に認められる。(30) は壺の体部。高台付。外面は丁寧なヘラ削り。(31～39) は陶磁器。(31) は白磁碗の玉縁口縁。(32～34) は青磁。色調は (32・33) がオリーブ灰色、(34) は灰オリーブ色。(32・33) は碗の口縁部。ともに外面には崩れた雷文の陰刻を施す。(34) は底部。内外面に意匠不明の陰刻有。高台内から畳付は無釉。(35・36) は染付の底部。ともに見込みに意匠不明の染付。(35) の高台内には「大明年製」の銘か。18世紀、肥前産。(36) は器壁薄く、高台内には放射状の工具痕、畳付には砂粒が付着する。中国産か。(37) は青緑釉陶器の底部。外面透明釉、内面銅緑釉を施すことから皿と考えられる。見込みは蛇ノ目状に釉剥ぎ。17世紀末～18世紀前半、肥前嬉野内野山窯産。(38・39) は陶器。ともに口縁の一部を潰した片口を有す。推定口径は (38) が27.5㎝、(39) が33.0㎝となる。(38) は擂鉢、体部内面に３条以上の擂り目を有する。また、内面は使用による磨滅にて器面は平滑となる。(39) は口縁部のみ遺存。

第３節　まとめにかえて

はじめに内海中寺ノ谷遺跡の時期を遺物から概観すると、弥生時代、奈良・平安時代、中近世の遺物が出土している。量的には奈良・平安時代、中近世、弥生時代の順となる。今回は調査面積が狭小ゆえに断定はできないが遺物の出土量、遺構の検出状況から盛期は奈良時代後半から平安時代初頭（８世紀後半～９世紀代）と平安時代後期（11世紀末～12世紀代）の２時期と考えられ、途中空白期が存在する。中近世遺物は比較的多く出土するも確実に時期を比定できる遺構はほとんど検出しておらず、当該期の遺跡の中心は今回の調査地から外れるものと考えられる。ただ、P-B61に遺存していた柱根の^{14}C年代測定結果は室町時代末期（15世紀後半～17世紀前半）の年代を示している。これらの調査結果と文献史料などで解明されている当地の歴史と年代観はほぼ一致している。[(1)(2)]

今回の調査では、標高12.6～12.9mから掘立柱建物１棟（SB-B01）と柵列６列（SA-A01～A03、SA-B01～B03）を検出。標高12.7～13.4mには、区画溝と考えられるSD-A02・A04・A05、水利あるいは境界施設とも考えられる溝状遺構（SD-A03）などを検出している。柵列はＡ区とＢ区では主軸が異なり、時期差や原地形の制約などの要因が考えられる。また、本来建物を構成する柱列であった可能性も十分考えられる。Ａ区の柵列は主軸をN-51°-E前後に有し、^{14}C年代測定結果や付近の遺構検出状況などから概ね平安時代後期に比定できる。Ｂ区での主軸はN-23°-E前後で時期は明確ではない。ピット・柱穴は標高12.7～12.9mのＢ区南西側、SB-B01周辺に８割以上が集中する。P-B61の^{14}C年代測定結果を積極的に援用すれば、SB-B01、柵列を含めた周辺のピット・柱穴は室町時代末期とも考えられる。周辺の状況からは奈良時代後半から平安時代初頭の可能性もあり、両者が混在するのかもしれない。Ａ区において検出した不明遺構（SX-A01）の埋土には多くの炭や炭化物が含まれていた。

これらの調査結果から当遺跡は奈良時代末期から平安時代初頭、平安時代後期を盛期とする小集落遺跡と評価して大過ないと考える。遺構の密度はＡ区においては内海川に向かって稀薄になり、Ｂ区では北方の丘陵裾と東方の内海川に向かって稀薄になる。Ｂ区の北側隣接地、市教育委員会が調査したＣ区では北端で再びピット・柱穴などの遺構が増加する傾向がみられる。北東側は現内海中集落と重複する可能性も考えられる。これらから遺跡の中心は調査地の西側上方、標高13～18m付近の谷口周辺と考えられる。谷筋は字名、万願寺と称され廃寺跡などを連想させるが、簡易踏査の結果では丘陵頂部付近にかなり大きな平坦面を確認するものの、目視では顕著な遺構は確認できなかった。[(2)]今回の調査においても墨書土器などの文字資料や宗教的遺物は出土しておらず、寺社の存在如何は不明であるが、輸入陶磁器類が若干出土していることには注意を要する。また、遺跡は内海川を挟んだ対岸の平野部にも存在する可能性も考えられる。調査地の東方、対岸に位置する通称「城山」には簡易踏査において山城（内海中所在城跡）を確認している。城跡は平坦面６（曲輪４、帯曲輪２）、堀切１、竪堀６、切岸３を確認している。[(2)]付近には中村氏の居城（居館）があると考えられているが明らかではない。さらに「城

山」の丘陵先端部法面には横穴式石室（内海中１号墳）の一部が露頭する。今回の調査では僅少であるが弥生土器も出土している。調査地周辺は偏狭な谷平野という地理的な要因ゆえに、拠点的集落、城跡（砦）、生産遺跡、墳墓など未だ多くの遺跡が存在する可能性が考えられる。付近の開発には注意を要するとともに、今後詳細な分布調査等による具体的な遺跡の把握が急務であると考える。

註

(1) P-B61・P-A26内に遺存していた柱根の放射性炭素（^{14}C）年代測定、樹種同定をパリノ・サーヴェイ株式会社に業務委託。

内海中寺ノ谷遺跡　放射性炭素年代測定結果

試料名	種類	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code.No.
P-A26	クリ	980±40	-23.81±0.92	960±30	IAAA-41485
P-B61	クリ	360±40	-22.85±0.85	320±30	IAAA-41486

1）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
2）BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

暦年較正結果

試料	補正年代 (BP)	暦年較正年代（cal）			相対比	Code No.
P-A26	983±37	cal AD 1,001 - cal AD 1,013	cal BP 949 - 937	0.103	IAAA-41485
		cal AD 1,015 - cal AD 1,043	cal BP 935 - 907	0.416	
		cal AD 1,091 - cal AD 1,119	cal BP 859 - 831	0.300	
		cal AD 1,140 - cal AD 1,155	cal BP 810 - 795	0.182	
P-B61	360±36	cal AD 1,476 - cal AD 1,523	cal BP 474 - 427	0.452	IAAA-41486
		cal AD 1,568 - cal AD 1,627	cal BP 382 - 323	0.548	

計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4(Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer)を使用。
計算には表に示した丸める前の値を使用している。付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

(2) 本書「第２章　遺跡の位置と歴史的環境　２．遺跡の歴史的環境」参照

出土遺物観察表

—記載事項について—

挿図番号　遺構ごとの実測番号、図版番号、付図内表示番号を統一して示す。

器　　種　土器は形態的特徴から、甕・杯・皿等の呼称を用い、須恵器は蓋杯・杯蓋・高台付杯・壺等の従来の呼称を用いた。部分名称の場合は（　）で表示。石製品は形態、使用痕等の観察から、砥石の名称を用いた。

法　　量　土器……口径：①　底径：②　最大胴径：③　器高：④をcmで示す。なお、（　）は復元値。〈　〉は推定値。ただし目安として径の残存が7分の1以下を推定値とした。

木製品・石製品……長さ：L　幅：W　厚さ：Tをcmで表す。（　）は現存値。

形態・手法の特徴　主要部分について記述した。土器については口縁部の内外面ヨコナデ調整を特別な場合以外は省略した。

胎土・焼成・色調

①胎土　砂粒の大きさとその量を示す。

②焼成　良好（堅緻）・良（普通）・やや不良（やや軟）・不良（軟）の4段階に分けた。陶磁器については硬質・軟質で表した。

③色調　主として外面の色調を示すが、内外面が異なる場合（外）・（内）で表示。陶磁器の場合は断面・施釉・露胎を（断）・（釉）・（露）で表示。

備　　考　赤彩、黒斑、煤・炭化物付着の有無等を記載。石製品は重量を記載。（　）は現存値。陶磁器は産地、貫入の有無を記載。

遺物登録番号　出土地を調査区分の通し番号で表示。遺物台帳登録番号。

—遺物実測図中における表示—

木製品実測図の断面図の年輪は模式的な表示である。

須恵器：黒塗り　土器回転糸切り：◎　陶磁器：

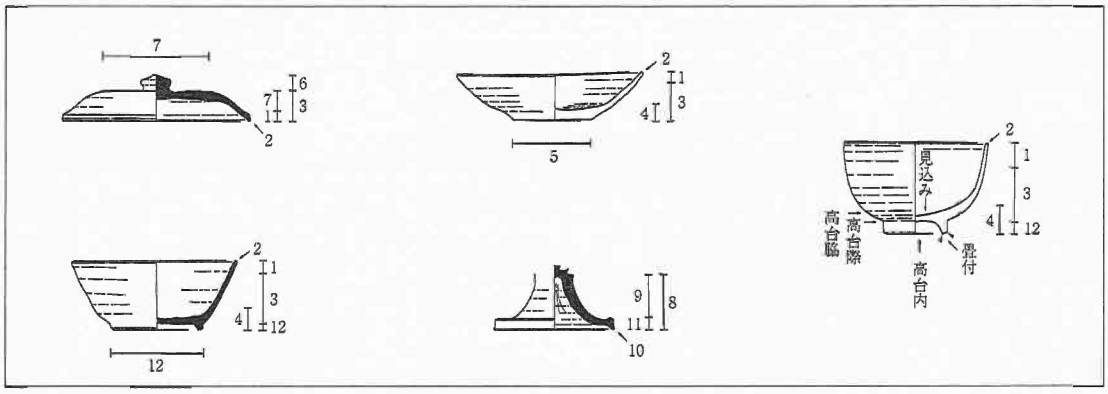
赤彩土器：　土器実測図のヨコナデ調整による稜：

石製品使用痕範囲：　陶磁器釉の範囲：

—土器の部分名称について—　部分名称を示す場合は頭文字を（　）で表示。

1：口縁部　2：口縁端部　3：体部　4：底部　5：底面　6：つまみ部　7：天井部

8：脚（台）部　9：脚柱部　10：脚端部　11：裾部　12：高台



SD-A02 （第17図）

挿図番号	器種	法量（cm） ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器高	形態・手法の特徴		①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物登録番号
1	土師器 (底部)	②　6.3		(内外) ヨコナデ。 (外) 底部回転糸切り。	①1㎜前後の砂粒を多く含む ②良 ③灰褐色	(底)　1		10
2	土師器 甕	①〈21.6〉	くの字状口縁。 口縁部は外傾し端部で丸く納める。	(外) 体部ハケ目。 (内) 口縁部ハケ目、後下半ヨコナデ。 体部工具ナデ？	①1～2㎜の砂粒を多く含む ②やや不良 ③褐色	(口)　1/8 (肩)　1/10	煤、炭化物付着 黒斑有	10
3	土師器 甕	①〈28.6〉	口縁部は外傾し端部に面をもつ。	(外) 頸肩部縦ハケ目が重複する。後頸部ナデ。口縁端面にハケ状工具によるナデ後軽いナデ。成形時の指頭圧痕。 (内) 口縁部横ハケ目、体部横、斜位ハケ目が重複する。	①1㎜前後の砂粒を多く含む ②良 ③(外)褐色　灰褐色 (内)褐色　暗褐色	(口)　1/8 (肩)　1/9	煤、炭化物付着 黒斑有	10

SD-A03 （第18図）

1	土師器 皿	①最大(8.4) 最小(7.8) ②最大 4.5 最小 4.2 ④　1.9	全体に歪。 口縁部は外傾して開き端部で丸く納める。	(内外) ヨコナデ。 (外) 底部回転糸切り。 (内) 底部周回するナデ、後中心部不定方向のナデ。	①1㎜以下の砂粒を僅かに含む ②やや不良 ③(外)褐色　灰褐色 (内)褐色	(口)　1/2 (底)　1	黒斑有	15

SD-A04 （第19図）

1	土師器 皿	①　9.1 ②　4.6 ④　2.0	口縁部は外傾して開き端部で丸く納める。	(内外) ヨコナデ。 (外) 底部回転糸切り。	①1㎜以下の砂粒を多く含む 2㎜の砂粒有 ②良 ③淡褐色	(口)　1/2 (底) ほぼ1		21
2	土師器 甕	①〈28.8〉 ③〈24.8〉 ④〈20.5〉	口縁部は外傾し端部に面をもつ。 肩部は張らずに底部へと続く。	(外) 体部縦、斜位ハケ目が重複する。底部不定方向のハケ目。 (内) 体部横、斜位ハケ目が重複する。	①1㎜以下の砂粒を多く含む 3～5㎜の砂礫有 ②やや不良 ③(内外)黒褐色　(断)赤褐色	(口)　1/15 (体)　一部 (底)　一部	煤付着	21 23

SD-A05 （第20図）

1	土師器 皿	①最大 8.2 最小 7.9 ②　5.4 ④　1.8	口縁部歪。 口縁部は外傾し端部は丸い。	(内外) 粗なヨコナデ。 (外) 体部ナデ。 底部回転糸切り、未調整。	①1㎜以下の砂粒を含む 4.5㎜の砂礫有 ②やや不良 ③(外)灰褐色　褐色 (内)灰褐色	(口)　3/4 (体)　7/8 (底)　1		26

SD-B03 （第23図）

1	須恵器 蓋杯 杯蓋	①(15.8) ④(2.6)	天井部は緩やかに口縁部へと下り端部で屈曲、下方へ短く納める。	(内外) ヨコナデ。 (外) 天井部回転糸切り後周縁部回転ヘラ削り。 工具痕有。 (内) 天井部不定方向のナデ。	①1㎜前後の砂粒を多く含む 2～3㎜の砂粒有 ②良 ③(外)灰色 (内)灰色　淡灰色	(口)　1/4 (天)　3/8		192
2	須恵器 高台付杯	①〈13.8〉 ②　8.6 ④　3.7	口縁部は外反し端部で丸く納める。 高台部はハの字状に開き凹面をなす。 底部と体部の境界は屈曲する。	(内外) ヨコナデ。 (外) 底部糸切り。高台貼付部ヨコナデ。 (内) 底部ナデ。	①0.5㎜前後の砂粒を多く含む　2.5㎜の砂粒有 ②やや不良 ③(外)淡青灰色 (内)淡灰色	(口)　1/11 (体)　1/4 (脚台)　5/8		199
3	須恵器 杯	①(13.2) ②〈9.6〉 ④(3.5)	口縁部は内湾気味に立ち上がり端部で外方へつまみ出す。	(内外) ヨコナデ。 (外) 底部回転糸切り後周縁部ナデ。 (内) 底部ナデ。	①1㎜前後の砂粒を多く含む 2.5㎜、4.5㎜の砂礫有 ②やや不良 ③灰白色	(口)　1/4 (体)　1/4 (底)　1/7		192
4	須恵器 杯	①(13.0) ②　8.1 ④(4.4)		(内外) ヨコナデ。 (外) 底部回転糸切り後周縁部ナデ。 (内) 底部不定方向のナデ。	①1㎜前後の砂粒を多く含む ②良 ③灰色	(口)　1/4 (底)　1/2		198
5	須恵器 杯	①〈16.0〉 ④　6.2	口縁部は底部から内湾して立ち上がり端部で上方へ丸く納める。		①1～2㎜の砂粒を多く含む 4.5㎜、8㎜の砂礫有 ②やや不良 ③(外)オリーブ灰色　暗灰色 (内)オリーブ灰色	(口)　1/12 (体)　1/6 (底) ほぼ1		192

挿図番号	器種	法量（cm） ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器高	形態・手法の特徴		①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物登録番号
6	須恵器 (口縁部)	① 〈35.4〉	口縁部は外傾し端部で外反して開き丸く納める。	(外) 口縁部2条の沈線状で区画し境界内に波状文を2段周回させる。 下位カキ目。成形時の圧痕。 (内) ナデ。工具圧痕。	①1~2㎜の砂粒を多く含む 3㎜の砂粒有 ②良 ③(外)灰色 淡灰色 暗灰色 (内)灰色	(口) 1/9	自然釉	192

B区Pit （第25図）

1 P-B13 SA-B01	須恵器 高台付杯	① 〈12.9〉 ② (8.6) ④ 4.3	口縁部は外傾して伸び端部は丸い。 高台部は内端面で接地する。 底部と体部の境界は屈曲する。	(内外) ヨコナデ。 (外) 高台部貼付後ヨコナデ。 (内) 底部ナデ。	①1㎜以下の砂粒を含む ②良 ③灰色	(口) 1/7 (底) 1/4		110
2 P-B55	青磁 皿	① (12.7)	口縁部は内湾気味に外傾し端部で屈曲、上外方へ丸く納める。	(外) ヨコナデ後陰刻後施釉。体部花弁状の陰刻。 (内) ヨコナデ後施釉。	①緻密 ②硬質 ③(釉)オリーブ灰色 (素)淡灰色	(口) 1/5	貫入無	126
3 P-B68	須恵器 把手			(外) 把手部上位に2条の沈線。 把手部手捏ね成形、貼付後ナデ。 (内) ヨコナデ。	①1㎜前後の砂粒を多く含む 4.5㎜の砂礫有 ②良 ③灰色	(把手) 1	自然釉	134
4 P-B82 SA-B02	弥生土器 甕	① 〈24.6〉	口縁部は短く外傾し端部で上下に短く肥厚する。	風化剥落著しい。 (外) 口縁部平行沈線。 頸部ヨコナデ、成形時の指頭圧痕。 (内) 剥落不明瞭。	①1~2㎜の砂粒を多く含む 3~4㎜の砂礫有 ②やや不良 ③(外)暗褐色 (内)灰褐色	(口) 1/8	黒斑有 炭化物付着	141
5 P-B85	須恵器 (口縁部)	① 〈36.0〉	口縁部は外反して開き端部で丸く納める。	(内外) ヨコナデ。 (外) 口縁残存部に3条の沈線で区画し各区間に波状文が3段以上。	①0.5㎜以下の砂粒を含む ②良好 ③(外)暗灰色 (内)灰色	(口) 1/9		143
6 P-B121	土師器 皿	① (8.6) ④ 2.1	口縁部は底部から緩やかに外傾して開き端部は丸い。	(内外) 体部ナデ。 成形時の指頭圧痕。	①1㎜以下の砂粒を多く含む ②良 ③淡褐色	(口) 1/4 (底) 1/3		153

SX-A01 （第27図）

1	土師器 皿	① (8.6) ② 4.4 ④ 1.8	口縁部は外傾して開き端部で2は丸く、1、3は若干先細る。	(内外) ヨコナデ。 (外) 底部回転糸切り。後1は未調整。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む 3㎜の砂粒有 ②良 ③淡褐色	(口) 1/3 (底) 1		52
2	土師器 皿	① (8.5) ② 4.4 ④ 2.1			①1㎜前後の砂粒を含む ②良 ③褐灰色	(口) 1/2 (底) 1		4
3	土師器 皿	① 9.0 ② 4.2 ④ 1.9			①1㎜以下の砂粒を多く含む ②良 ③褐色	(口) 1/2 (底) 1	煤付着	8
4	土師器 杯	① 14.5 ②最大 6.6 最小 6.1 ④ 4.0	口縁部歪。 口縁部は底部から直線的に大きく開き、端部で丸く納める。	(内外) ヨコナデ。 (外) 体部ナデ。底部回転糸切り、未調整。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む 3㎜の砂粒有 ②良 ③淡褐色	(口) 4/7 (底) 1		45
5	土師器 杯	①最大14.5 最小13.8 ② 6.8 ④ 4.1		(内外) 丁寧なヨコナデ。 (外) 底部回転糸切り。	①1㎜前後の砂粒を含む ②やや不良 ③(外)橙色 にぶい黄橙色 (内)灰黄褐色	(口) 7/8 (底) 3/4	煤付着	2 51
6	土師器 杯	① (13.7) ② 6.0 ④ 3.2	口縁部は底部から内湾しながら大きく開き口縁部へ続く。	(内外) ヨコナデ。 (外) 底部回転糸切り後周縁部ナデ。	①1㎜前後の砂粒を多く含む 2㎜の砂粒有 ②やや不良 ③(外)橙色 にぶい黄橙色 (内)浅黄色	(口) 1/5 (底) 1	赤彩 黒斑有 煤付着	4
7	土師器 鍋	① 18.5 ③ 19.1	口縁部は短く外傾し端部で丸く納める。	(外) 体部指ナデ成形。 (内) 体部ヘラ削り後丁寧なナデ。後に口頸部原体不明のナデ？工具痕。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む ②良 ③(外)暗褐色 (内)褐色 暗橙褐色 灰褐色	(口) 1/2 (体) 3/8	煤多く付着 炭化物付着	46 48
8	土師器 (柱状高台)	② 8.5		(内外) ヨコナデ。 (外) 柱状部接合後ヨコナデ。底部回転糸切り。 (内) 底部ナデ。	①1㎜以下の砂粒を多く含む 2㎜の砂粒有 ②不良 ③(外)橙色 にぶい橙色 (内)黒褐色	(高台) 1	黒斑有	44

挿図番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器高	形態・手法の特徴		①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物登録番号
9	土師器 (柱状高台)	② 5.8		(外) 柱状部雑なヨコナデ。底部回転糸切り。 (内) 底部ナデ。	①1㎜前後の砂粒を多く含む 2.5㎜の砂粒有 ②良 ③橙色 にぶい橙色	(高台) 1		47
10	土師器 (脚台部)			(内外) ヨコナデ。 (内) ナデ。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む 1㎜の砂粒有 ②良 ③淡褐色	(脚台) 1/2		4
11	白磁 (口縁部)	① 〈15.9〉	口縁部は外傾し端部は玉縁状。	(内外) ヨコナデ後施釉。 (内) 口縁部に釉溜り有。	①精緻 ②硬質 ③(断)(釉)(露)白色	(口) 1/9	貫入有	4
12	緑釉陶器 (底部)	② 〈8.0〉	高台部はハの字状に開き端部に面をもつ。	(内外) ヨコナデ後施釉。 (外) 高台部貼付後ヨコナデ。畳付釉拭き取り。 (内) 見込みに1重圏線?	①精緻 ②やや軟質 ③(断)にぶい橙色 (釉)オリーブ色 (露)灰色	(底) 1/10	貫入無	4
13	砥石	L: (7.6) W: 4.6 T: 2.0	基端部。 平面形は基部から徐々に幅広となる。	長軸4面に使用痕。砥石に転用?	③灰色	(基) 1	(112) g	4
14	木製品	L: (58.5) W: 3.5 T: 1.3	一端部僅かに腐朽。 長軸方向に加工痕、側面にかすかに残る。丁寧な加工により単位は不明瞭。 柄孔確認。			ほぼ完存	板目材	50

A区遺構外 (第28図)

1	土師器 甕	① 〈22.4〉	くの字状口縁。 口縁部は外傾して開き端部は丸い。	(外) 口頸部指成形後ナデ。頸肩部ハケ目。 頸部に成形時の圧痕。 (内) 体部剥落不明瞭。	①1㎜前後の砂粒を多く含む ②やや不良 ③(外)暗褐色 (内)にぶい黄褐色	(口) 1/9	煤付着	42
2	瓦質 鍋	① 〈25.0〉	受け口状の口縁部。端部は凹面をなす。	(外) 体部指成形後ナデ。 (内) 体部原体不明の丁寧なナデ。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む 1~3㎜の砂粒有 ②やや不良 ③暗灰色 灰色	(口) 1/36	煤多く付着	66
3	瓦質 羽釜	① 〈22.8〉	口縁部は内傾気味に上方へ納め端部に面をもつ。 鍔は断面三角形状で横位に巡る。	(外) 体部ナデ。口縁部に鍔貼付、後ヨコナデ。 (外) 原体不明のナデ。	①1㎜以下の砂粒を多く含む ②やや不良 ③(外)青灰色 (内)青灰色 淡灰色	(口) 1/24		63
4	土師器 皿	① (8.0) ② 4.8 ④ 2.1	口縁部は外傾して開き端部で丸く納める。	(内外) ヨコナデ。 (外) 底部回転糸切り。 (内) 底部剥落不明瞭。	①1㎜以下の砂粒を多く含む 2㎜の砂粒有 ②良 ③橙色	(口) 2/5 (底) 2/3		65
5	土師器 (柱状高台)	② 6.2		風化剥落不明瞭。 (外) 柱状部ヨコナデ。底部回転糸切り。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む 1㎜の砂粒有 ②やや不良 ③橙色	(高台) 1		58
6	須恵器 鉢?	① (28.6)	口縁部は内湾気味に立ち上がり端部は丸い。	(内外) ヨコナデ。 (内) 口縁端部工具ナデ。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む 3㎜の砂粒有 ②やや不良 ③灰色	(口) 1/6		84
7	須恵器 (底部)	② 〈18.2〉	平底。	(内外) ヨコナデ。 (外) 底面ナデ。周縁部粗な工具ナデ、ナデ。	①1㎜以下の砂粒を多く含む 2㎜の砂粒有 ②良 ③淡灰色	(底) 1/7		75
8	須恵器 (脚台部)	② (9.9)	脚部はハの字状に開き端部で上下に肥厚して凹面をなす。	脚部 (外) カキ目。 (内) ヨコナデ。 残存部に透かし窓1を観察。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む ②良 ③(外)淡青灰色 青灰色 (内)灰色	(脚柱) 1/4 (脚裾) 1/2		56 77
9	須恵器 (脚台部)	② 〈9.4〉	脚部はラッパ状に開き端部で屈曲、外方に短くつまみだす。	杯部 (内) ナデ。 脚部 (内外) ヨコナデ。 (内) 上半絞り目後下半ナデ。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む 1~2㎜の砂粒有 ②良 ③淡灰色	(脚柱) 1 (脚裾) 1/8		63
10	白磁 碗	① 〈18.9〉	口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は玉縁状。	(内外) ヨコナデ後施釉。 (内)口縁端部ヘラ削り。釉溜り有。	①緻密 ②硬質 ③(断)(釉)灰白色	(口) 1/17	貫入無	75
11	白磁 碗	① 〈15.2〉	口縁部は内湾し端部は玉縁状。	(内外) ヨコナデ後施釉。	①緻密 ②硬質 ③(断)(釉)灰白色	(口) 1/13	貫入無	59

挿図番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器高	形態・手法の特徴		①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物登録番号
12	白磁 (底部)	② (7.1)	削り出し高台。	(外) 体部ヘラ削り後施釉。高台脇～高台内ヘラ削り、無釉。 (内) ヨコナデ後施釉。	①精緻 1㎜以下の砂粒有 ②硬質 ③(断)(釉)(露)灰白色	(底) 1/4 (高台) 3/8	貫入有	85
13	陶器 (底部)	② 4.3	削り出し高台。	(外) 底部ヨコナデ。無釉。高台内中央に兜巾有。 (内) ヨコナデ後粗な施釉。見込みに砂目跡3。	①精緻 ②硬質 ③(断)灰色(釉)オリーブ灰色(露)にぶい黄褐色	(底) 1	貫入有 肥前産 (唐津)	78

B区遺構外 (第29～31図)

1	土師器 杯	① (14.5) ④ 〈3.5〉	口縁部は外反気味に開き端部で丸く納める。 底部と体部の境界は屈曲する。	(内外) ヨコナデ。 (外) 底部ヘラ削り後ナデ。 (内) 口縁部軽いナデ。底部ナデ。	①0.5㎜以下の砂粒を含む 1.5㎜の砂粒有 ②良 ③淡橙褐色 橙色	(口) 1/3 (底) 1/4	赤彩	191
2	土師器 杯	① (18.4) ④ 〈4.8〉	口縁部は外傾して伸び端部で丸く納める。 底部と体部の境界は屈曲する。	(内外) ヨコナデ。 (外) 底部ヘラ削り後ナデ。工具痕。	①1㎜以下の砂粒を多く含む ②良 ③橙色	(口) 1/3 (底) 1/2	赤彩	202
3	土師器 杯	① 〈16.7〉	口縁部は底部から緩やかに外傾し端部は丸い。	(内外) ヨコナデ。ヘラ磨き痕。 (外) 底部ヘラ削り後ナデ。 (内) 底部ナデ。成形時の圧痕。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む ②やや不良 ③淡橙褐色 褐色	(口) 1/7 (体) 1/6	赤彩	207
4	土師器 杯	① (16.5) ④ (5.0)		(内外) ヨコナデ。 (外) 底部丁寧な工具ナデ後軽いナデ。成形時の圧痕。 (内) 底部ナデ。	①0.5㎜以下の砂粒を含む 2～3㎜の砂粒有 ②やや不良 ③乳灰色 淡褐色	(口) 1/3 (底) 2/3	赤彩 黒斑有	185
5	土師器 甕	① (29.3)	口縁部は外反して大きく開き端部は丸い。 7は体部中上位に最大径をもつ。	(内外) ヨコナデ。 (外) 口頸部ナデ。頸部ハケ目痕、成形時の圧痕。 (内) 体部ヘラ削り。	①1～2㎜の砂粒を多く含む 4㎜の砂礫有 ②良 ③(外)褐色 (内)にぶい橙褐色	(口) 1/3	煤付着	206
6	土師器 甕	① (19.2)		(外) 口頸部縦ハケ目が重複する。後口縁部上半軽いヨコナデ。成形時の圧痕。 (内) 口縁部ハケ目。体部ヘラ削り後軽いナデ、頸部ナデ。	①1㎜前後の砂粒を多く含む 3㎜、5㎜の砂礫有 ②やや不良 ③(外)暗褐色 (内)淡橙褐色	(口) 1/6 (頸) 1/8 (肩) 1/15	煤付着	204
7	土師器 甕	① 22.5 ③ 25.1		(外) 口縁部～体部2/3上半縦ハケ目が重複する。後1/3下半不定方向のハケ目。頸部ナデ。成形の指頭圧痕。 (内) 口縁部ハケ目。体部丁寧なヘラ削り。	①1㎜前後の砂粒を多く含む 5㎜の砂礫有 ②不良 ③(外)褐色 灰褐色 橙色 (内)褐色	(口) 3/5 (体) 1/2	煤付着	202 209
8	土師器 皿	① (8.1) ② (5.2) ④ 1.8	口縁部は短く外傾し端部で丸く納める。	(内外) ヨコナデ。 (外) 底部回転糸切り、未調整。	①1㎜前後の砂粒を多く含む ②良 ③淡褐色	(口) 1/3 (底) 1/2		158
9	製塩土器	① (15.4)	体部は内湾して口縁部で上方に納める。端部に向けて内側が肥厚する。	風化剥落著しい。 (内外) 指成形後ナデ、指頭圧痕。 (内) 体部剥落不明瞭。	①1㎜以下の砂粒を僅かに含む ②やや不良 ③(外)浅黄橙色 (内)浅橙褐色	(口) 1/2 (体) 上半 1/5 下半 1/2		202
10	製塩土器	① (14.4)		(内外) 手捏ね成形後ナデ。	①1～2㎜の砂粒を多く含む ②良 ③(外)淡橙褐色 浅黄橙色 (内)淡橙褐色	(口) 1/6		180
11	土師器 (底部)	② 5.6	平底。	(外) ヘラ磨き後軽いナデ。底面丁寧なナデ。 (内) ヘラ削り後丁寧なナデ。	①2㎜前後の砂粒を多く含む 3.5㎜、4㎜の砂礫有 ②やや不良 ③(外)橙褐色 淡橙褐色 (内)灰褐色	(底) 1/2		186
12	須恵器 蓋杯 杯蓋	つまみ 1.8 ① (13.1) ④ 2.6	つまみは宝珠形。 平坦な天井部から下り口縁部で屈曲、下方に短く納める。 天井部と口縁部の境界は屈曲する。	(内外) ヨコナデ。 (外) 天井部糸切り後周縁部ナデ。	①1㎜前後の砂粒を多く含む 3㎜の砂粒有 ②やや不良 ③灰色 暗灰色	(摘) 1 (口) 1/3 (天) 1/2	被灰	182 191 202

挿図番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器高	形態・手法の特徴		①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物登録番号
13	須恵器 蓋杯 杯蓋	つまみ 2.4 ① 〈14.5〉 ④ 3.7	つまみは宝珠形。 天井部は緩やかに口縁部へと下り端部で13は外下方へ短く納め、14、15は屈曲して14は内傾、15は直下へ短く納める。	(内外) ヨコナデ。 (外) 天井部丁寧なヘラ削り後周縁部ナデ。 つまみ貼付部ヨコナデ。	①1㎜以下の砂粒を多く含む 2㎜の砂粒有 ②やや不良 ③灰色 暗灰色	(摘) 1 (口) 1/8 (天) 1/2	被灰	202
14	須恵器 蓋杯 杯蓋	つまみ 2.7 ① 〈19.1〉 ④ 3.2			①1㎜前後の砂粒を多く含む 4㎜の砂礫有 ②やや不良 ③(外)灰色 (内)灰白色	(摘) 1 (口) 1/7 (天) 1/3	黒斑有	202 207
15	須恵器 蓋杯 杯蓋	つまみ 2.6 ① 19.9 ④ 3.6		(内外) ヨコナデ。 (外) 天井部丁寧なヘラ削り。つまみ貼付部ヨコナデ。 (内) 天井部ナデ。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む ②やや不良 ③(外)灰色 (内)灰白色	(摘) 1 (口) 1/2 (天) 1/2	天井部歪	187
16	須恵器 蓋杯 杯蓋	つまみ (2.7) ① (14.8) ④ (2.0)	平坦な天井部から口縁部へと下り端部で屈曲、外下方へつまみだす。	(内外) ヨコナデ。 (外) 天井部ヘラ削り後ナデ。つまみ貼付部ヨコナデ。 (内) 天井部ナデ。	①1㎜前後の砂粒を多く含む ②良好 ③灰色	(摘) 1/4 (口) 1/3 (天) 1/3		210
17	須恵器 蓋杯 杯蓋	① (12.2)	つまみ剥離痕。 平坦な天井部から口縁部へと下り端部で屈曲、下方へ短く納める。	(内外) ヨコナデ。 (外) 天井部丁寧なヘラ削り。後中央部をナデ。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む 2㎜の砂粒有 ②不良 ③(外)灰色 (内)灰白色	(口) 1/3 (天) 1/3		207
18	須恵器 杯	① 〈11.5〉 ② (8.2) ④ (4.3)	口縁部は内湾し端部で肥厚して丸く納める。	(内外) ヨコナデ。 (外) 底部糸切り後周縁部ナデ。 (内) 底部ナデ。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む 2㎜の砂粒有 ②良 ③灰色	(口) 1/7 (底) 1/4		193
19	須恵器 杯	① (11.8) ② (7.7) ④ 4.2	口縁部は内湾気味に立ち上がり端部で直立、外方へつまみ出す。	(内外) ヨコナデ。 (外) 底部糸切り後周縁部ナデ。 (内) 底部ナデ。	①1㎜前後の砂粒を多く含む 3㎜の砂粒有 ②良 ③淡青灰色	(口) 1/3 (底) 1/2		187
20	須恵器 杯	① (13.6) ② (10.0) ④ 3.8	口縁部は内湾気味に立ち上がり端部で上方へ丸く納める。	(内外) ヨコナデ。 (外) 底部糸切り後周縁部ナデ。成形時の圧痕。 (内) 底部ナデ。	①1㎜前後の砂粒を多く含む 3㎜の砂粒有 ②良 ③淡灰色	1/4		191
21	須恵器 杯	① (12.8) ② (9.0) ④ 3.8	口縁部は外傾し端部で丸く納める。	(内外) ヨコナデ。 (外) 底部糸切り後周縁部ナデ。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む 2㎜の砂粒有 ②やや不良 ③灰色 暗灰色	1/4		182 202
22	須恵器 杯	① (12.4) ② (7.2) ④ (4.7)	口縁部は外傾して直線的に伸び端部は先細る。 底部と体部の境界は屈曲する。	(内外) ヨコナデ。 (外) 底部糸切り後周縁一部を軽いナデ。工具痕。	①1㎜以下の砂粒を多く含む ②良 ③(外)灰色 (内)淡灰色	(口) 1/4 (底) 3/8		185
23	須恵器 高台付杯	① (11.9) ② 7.0 ④ 4.1	口縁部は外反気味に立ち上がり端部で丸く納める。 高台部は内端面で接地する。	(内外) ヨコナデ。 (外) 底部糸切り後中心部ナデ。高台貼付部ヨコナデ。 (内) 底部ナデ。	①1㎜以下の砂粒を多く含む 3㎜の砂粒有 ②良 ③淡灰色	(口) 1/3 (底) 1/2		187
24	須恵器 高台付杯	① (11.7) ② (8.0) ④ 4.3	口縁部は外傾して直線的に伸び端部は丸い。 高台部は内端面で接地する。	(内外) ヨコナデ。 (外) 底部糸切り。高台貼付部ヨコナデ。 (内) 体部～底部ナデ。	①1㎜前後の砂粒を多く含む ②良 ③灰色 灰白色	(口) 1/6 (底) 1/4		210
25	須恵器 高台付杯	① (12.7) ② 6.6 ④ 5.5		(内外) ヨコナデ。 (外) 底部糸切り。高台貼付部ヨコナデ。底面に工具痕。 (内) 底部ナデ。	①0.5㎜前後の砂粒を多く含む 2㎜の砂粒有 ②良 ③(外)灰色 淡灰色 (内)灰色	(口) 3/8 (体) 上半 1/2 下半 3/4 (底) ほぼ1		158 159
26	須恵器 壺	① (22.3)	口縁部は外反して立ち上がり端部で上下に肥厚して凹面をなす。	(内外) ヨコナデ。 (内) 成形時の指頭圧痕。	①1㎜前後の砂粒を多く含む ②良 ③淡青灰色	(口) 1/4		186 190
27	須恵器 壺	① 〈18.1〉	口縁部は外反して立ち上がり端部に面をもつ。	(外) 頸部ハケ目後カキ目。成形時の指頭圧痕。 (内) 口縁部ナデ?肩部剥落部分多いが当て工具痕が残る。	①1㎜以下の砂粒を多く含む ②やや不良 ③淡灰色 暗灰色	(口) 1/8 (肩) 一部	自然釉	191
28	須恵器 壺	① 〈21.7〉	口縁部は短く外傾し端部で丸く納める。	(内外) ヨコナデ。 (外) 頸部に工具痕が周回すると思われる。体部ナデ。	①1㎜以下の砂粒を多く含む 2㎜の砂粒有 ②良 ③(内外)灰色 灰褐色 (断)灰褐色	(口) 1/7		186

挿図番号	器種	法量（cm） ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器高	形態・手法の特徴		①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物登録番号
29	須恵器 壺	①（10.0）	口縁部は短く外傾し端部で外方へ肥厚する。	(内外) ヨコナデ。 (外) 肩部平行叩き目後カキ目。後頸部ナデ。 (内) 肩部同心円文当て工具痕。頸部ナデ。 成形時の圧痕。	①0.5㎜前後の砂粒を多く含む ②良 ③灰色	(口) 1/5 (肩) 1/8		177
30	須恵器 壺	② 8.9 ③ 15.5	体部上位に最大径をもつ。高台部はハの字状に開き端部は凹面をなす。	(内外) ヨコナデ。 (外) 体部丁寧なヘラ削り。後口縁部貼付、周縁部をヨコナデ。底部ナデ。後高台部貼付、ヨコナデ。 (内)底部ナデ？成形時の指頭圧痕。	①1㎜以下の砂粒を多く含む 4㎜の砂礫有 ②やや不良 ③灰白色 灰色	(口) 3/4 (底) ほぼ1	胎土中の成分が析出	160 185 192 202
31	白磁 碗	①〈14.8〉	口縁部は外傾し端部は玉縁状。	(内外) ヨコナデ後施釉。 (外)口縁端部ヘラ削り。釉溜り有。	①緻密 ②硬質 ③(断)(釉)灰白色	(口) 1/12	貫入無	186
32	青磁 碗	①〈12.2〉	口縁部は内湾気味に立ち上がる。端部は丸いが釉により器厚となる。	(外) ヨコナデ後陰刻後施釉。崩れた雷文の陰刻。 (内) ヨコナデ後施釉。	①緻密 ②硬質 ③(断)灰白色 (釉)オリーブ灰色	(口) 1/17 (体) 1/8	貫入有	186
33	青磁 碗	①〈15.8〉			①精緻 2～3㎜の砂粒有 ②硬質 ③(断)灰白色 (釉)明オリーブ灰色	(口) 1/19 (体) 1/10	貫入有	192
34	青磁 (底部)	② (5.1)	削り出し高台。	(内外) ヨコナデ後陰刻後施釉。意匠不明の陰刻。 (外) 高台内、畳付無釉。	①精緻 ②硬質 ③(断)灰白色 (釉)灰オリーブ色 (露)橙褐色	(底) 1/4	貫入無	186
35	磁器 染付 (底部)	② (4.6)	高台部は直下に下り端部は丸い。	(内外) ヨコナデ。染付後施釉。 (外) 畳付釉拭き取り。高台脇、高台際、高台、高台内にそれぞれ一重の圏線を巡らす。高台内「大明年製」？の銘。 (内) 見込みに二重圏線、中央に意匠不明の染付。	①緻密 ②硬質 ③(断)灰白色 (釉)無色透明 (露)浅黄橙色	(底) 1/4	肥前産	161
36	磁器 染付 (底部)	② (6.6)	高台部は下方に短く納める。 器薄。	(内外) ヨコナデ。染付後施釉。 (外) 畳付釉拭き取り。砂付着。高台際に一重圏線を巡らす。高台内に放射状の工具痕。 (内) 見込みに二重圏線、中央に意匠不明の染付。	①緻密 ②硬質 ③(断)(露)白色 (釉)無色透明	(底) 1/4		185
37	青緑釉陶器 皿	② (4.2)	削り出し高台。	(内外) ヨコナデ後外面透明釉、内面銅緑釉をかけ分ける。 (外) 高台脇～高台内無釉。高台中央に兜巾有。 (内) 見込み蛇ノ目釉剥ぎ。	①精緻 ②軟質 ③(断)(露)淡褐色 (釉)(外)無色透明 (内)灰オリーブ色 緑灰色	(底) 1/3	貫入無 肥前産 (内野山窯)	173
38	陶器 擂鉢	①〈27.5〉	口縁部は外傾して開き端部で上下に肥厚して面をもつ。 片口をもつ。	(内外) ヨコナデ。 (外) 口縁部ナデ。 (内) 体残存部に3条以上の擂り目を観察。	①1～2㎜の砂粒を多く含む 4㎜の砂礫有 ②やや硬質 ③灰褐色	(口) 1/12	備前産	203
39	陶器 鉢？	①〈33.0〉	口縁部は外傾し端部で直立、外方へつまみだす。 片口をもつ。	(内外) ヨコナデ。 (外) 成形時の指頭圧痕。 (内) 指成形痕。	①精緻 1㎜の砂粒有 ②やや硬質 ③(断)にぶい赤褐色 (外)暗赤灰色 にぶい赤褐色 (内)灰赤色 赤灰色	(口) 1/18	自然釉	176

図　　版

図版１

Ａ区　調査前
（北東から）

Ａ区　全景
（北東から）

図版 2

B区　調査前
（南から）

B区　全景
（南から）

A区　南東壁断面
（南西から）

A区　中央ベルト断面①
（東から）

A区　中央ベルト断面②
（北から）

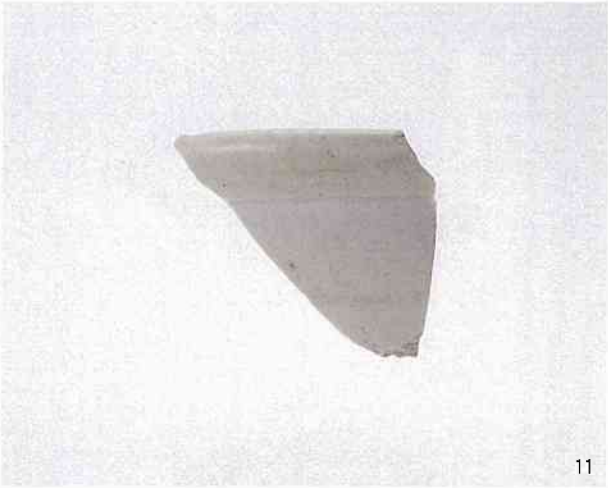
図版 4

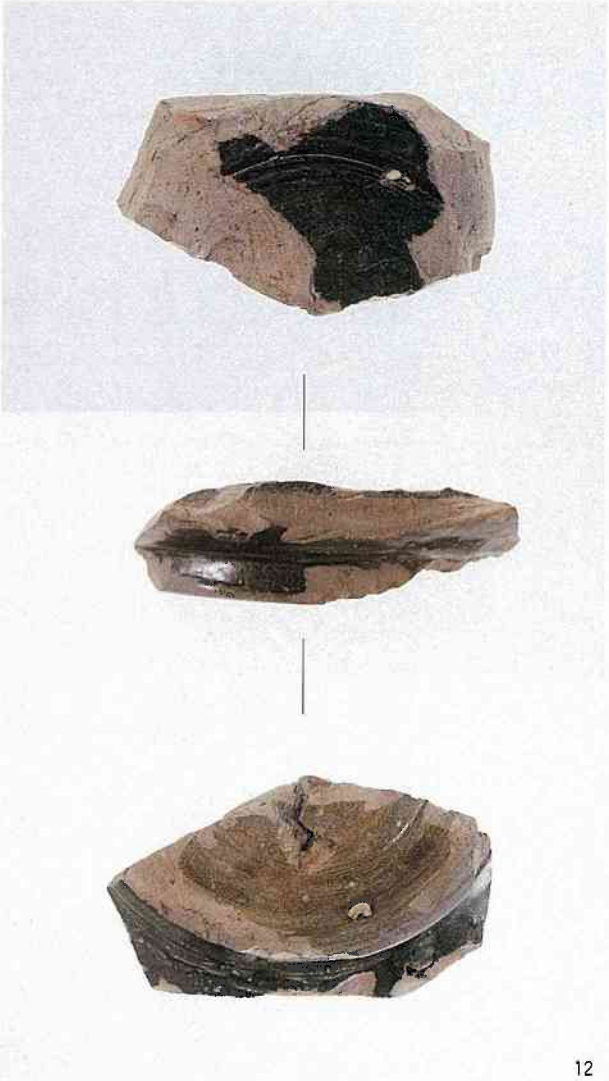
B区　南西壁断面
（東から）

B区　横断面 1（Sec. 1）
（北東から）

B区　横断面 3（Sec. 3）
（南から）

P-B55　出土遺物

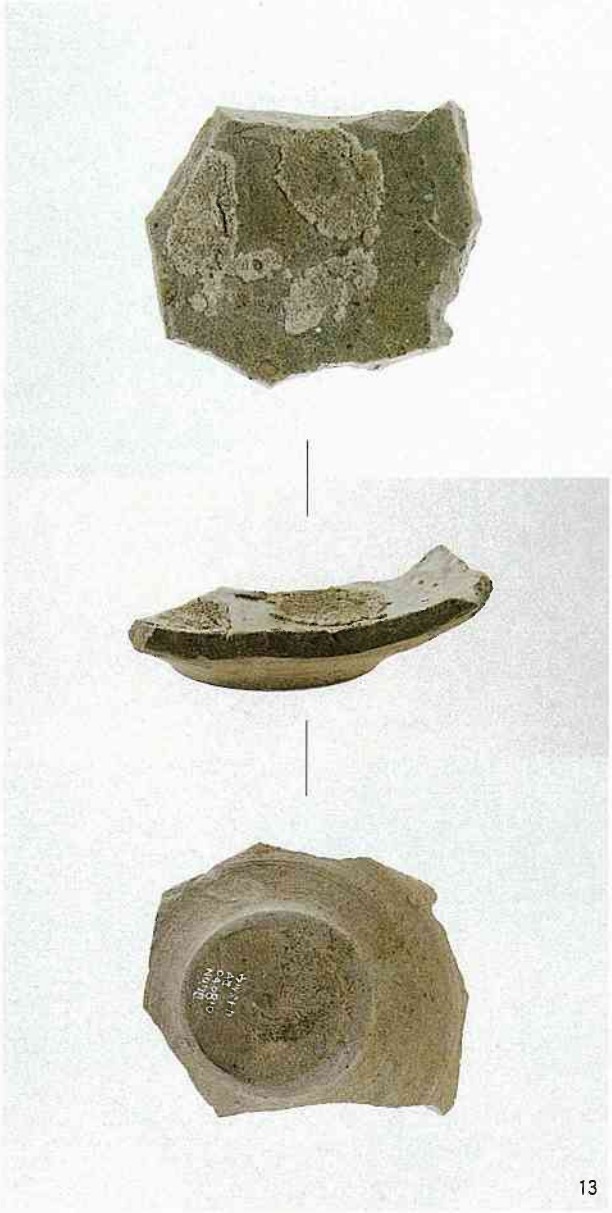




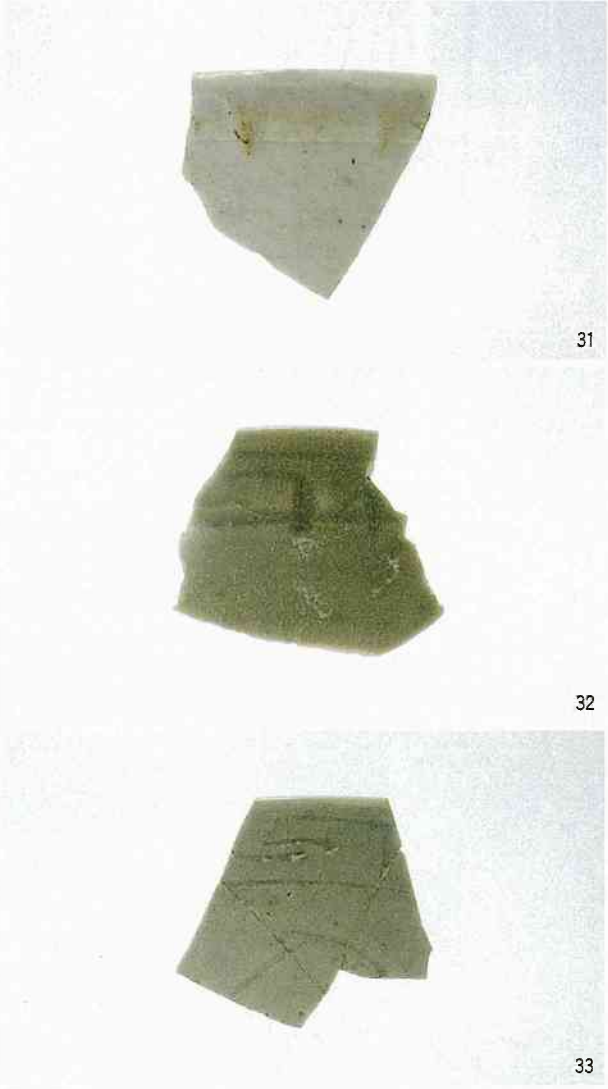
SX-A01　出土遺物(1)

A区　遺構外出土遺物(1)

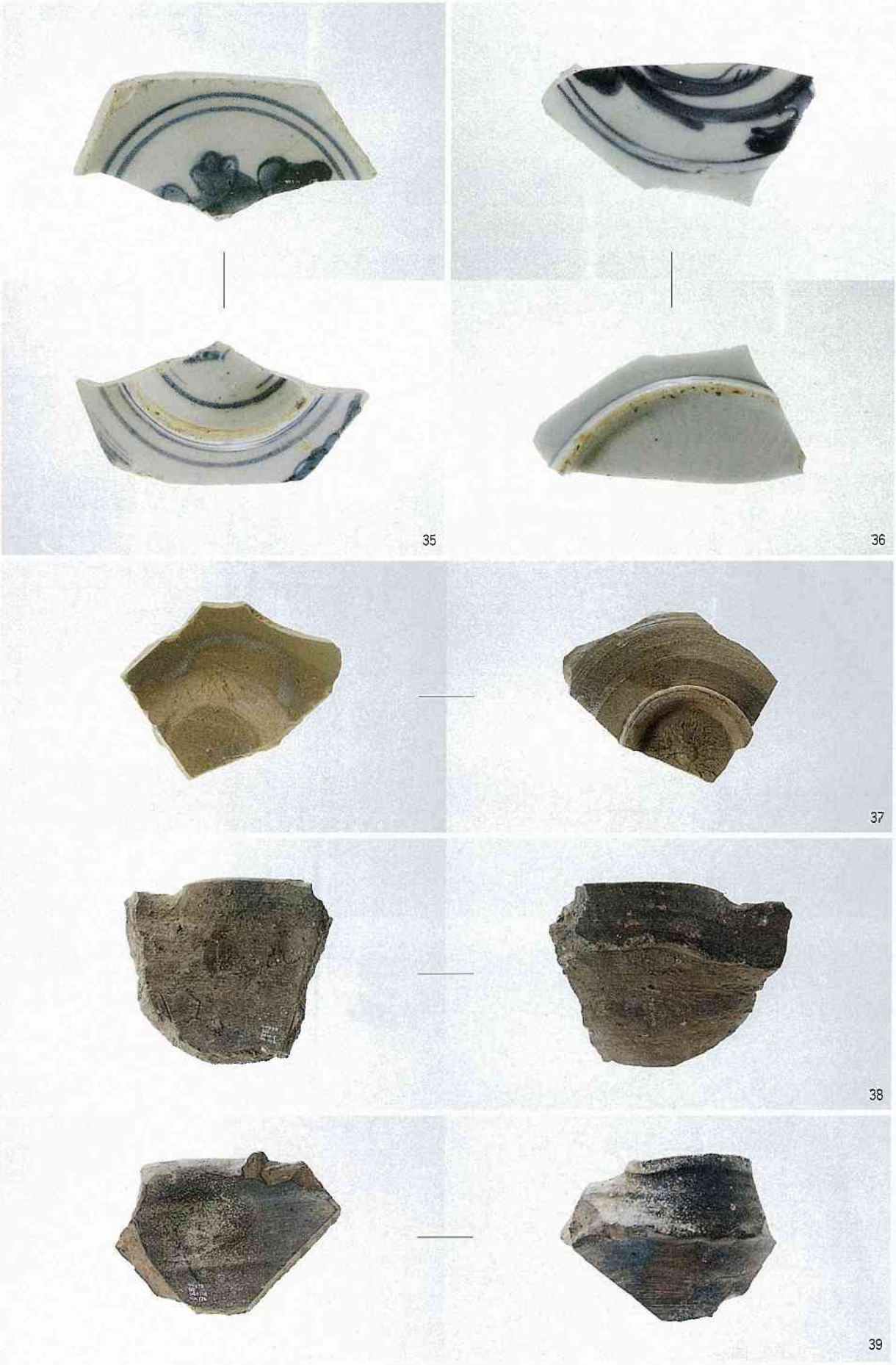
図版 6



A区　遺構外出土遺物(2)



B区　遺構外出土遺物(1)



B区　遺構外出土遺物(2)

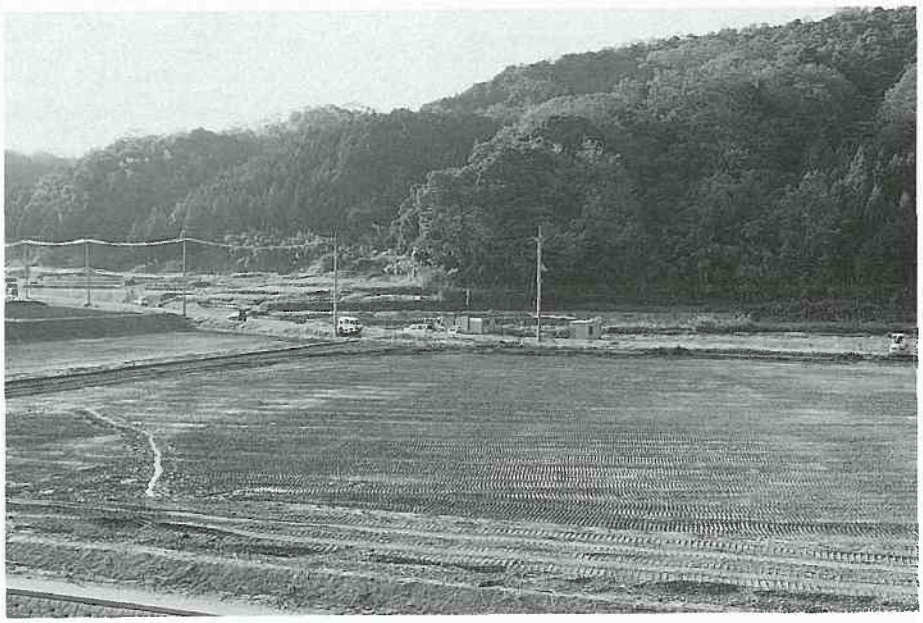
図版 8

内海中所在城跡（仮称）
遠景（西から）

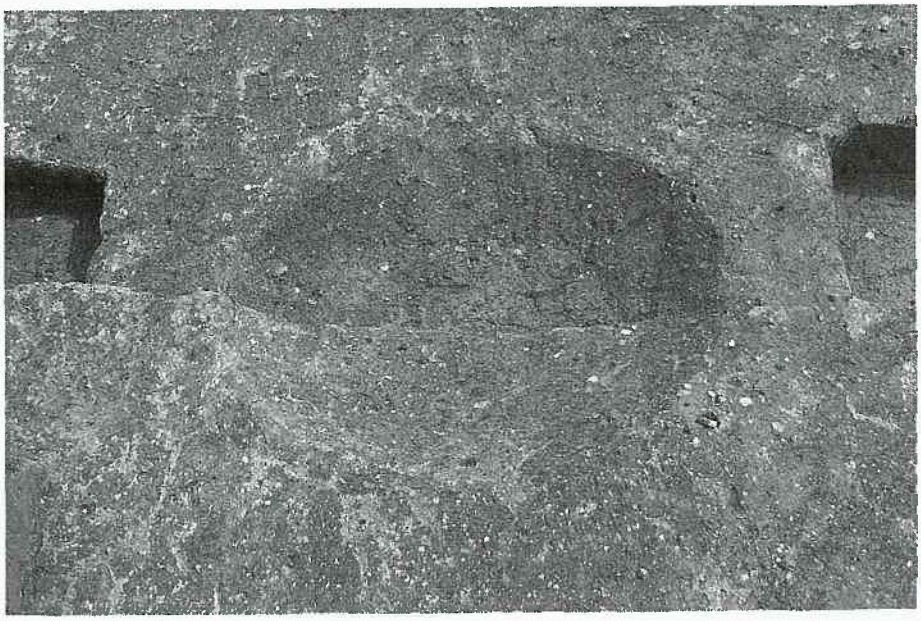
内海中所在城跡（仮称）
竪堀１（上方から）

内海中所在城跡（仮称）
竪堀２（下方から）

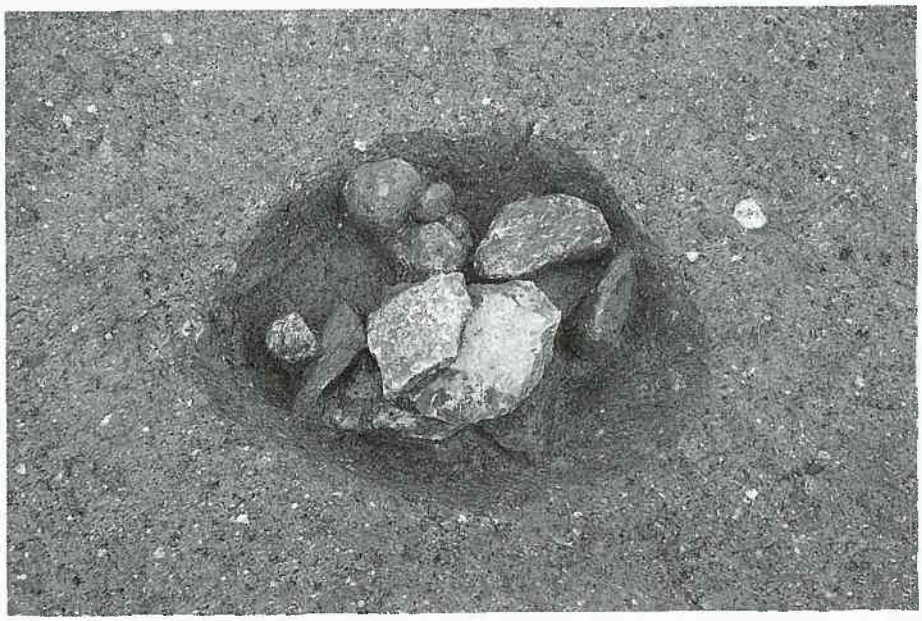
調査地遠景
（東から）



SK-A02　検出状況
（南西から）

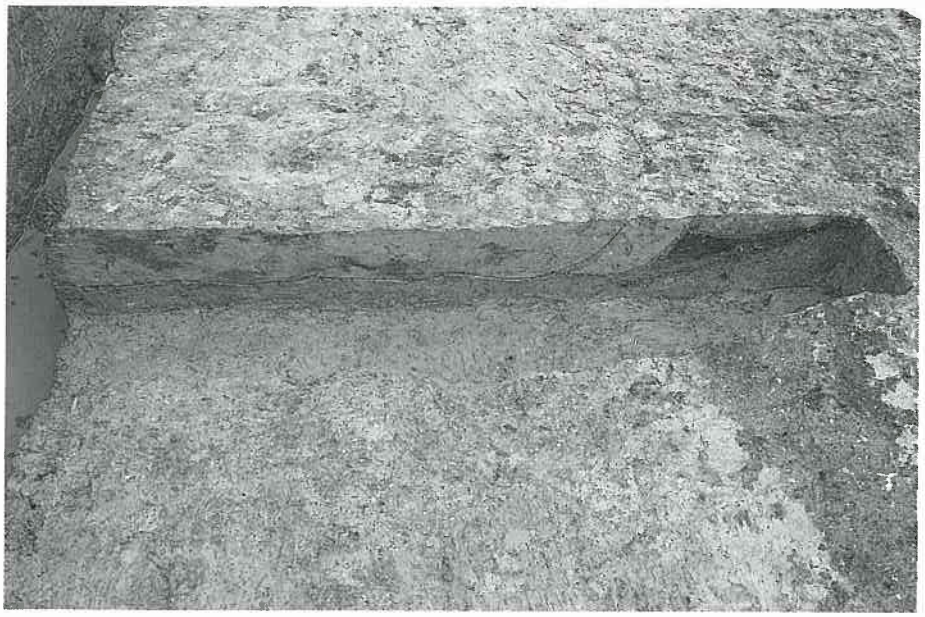


SK-A03　検出状況
（北西から）



図版10

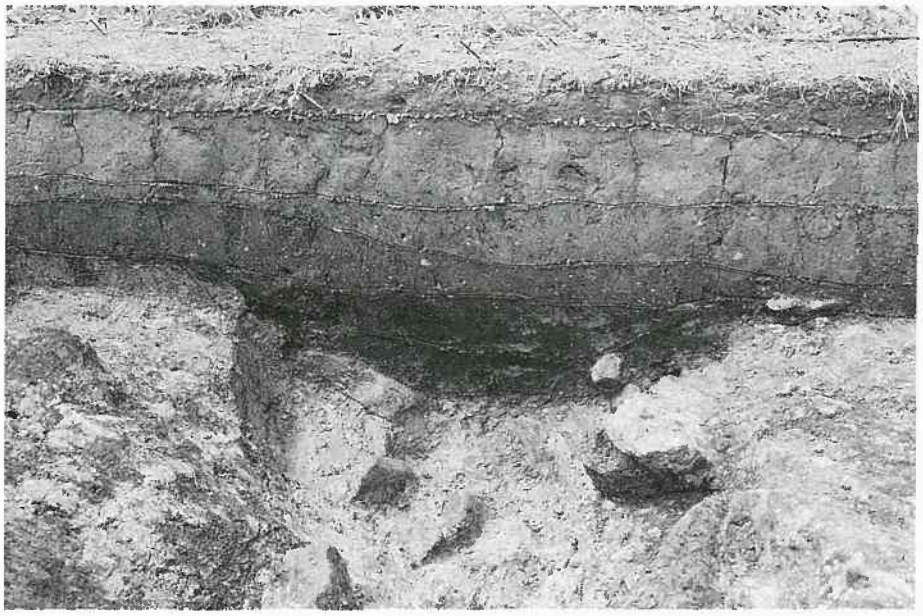
SD-A01　検出状況
（南西から）



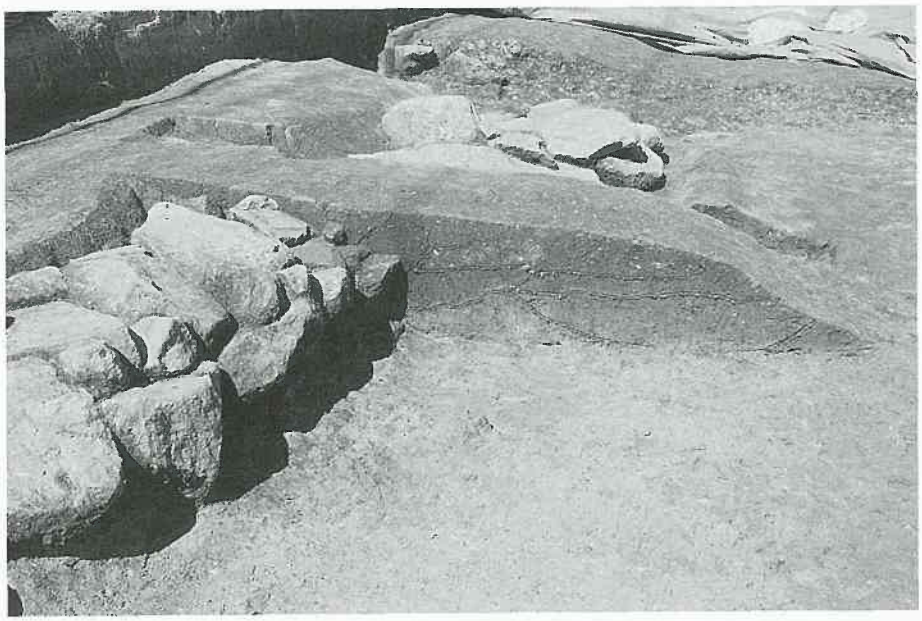
SD-A01　断面
（北東から）

SD-A02　検出状況
（南東から）

SD-A02　断面
（南東から）

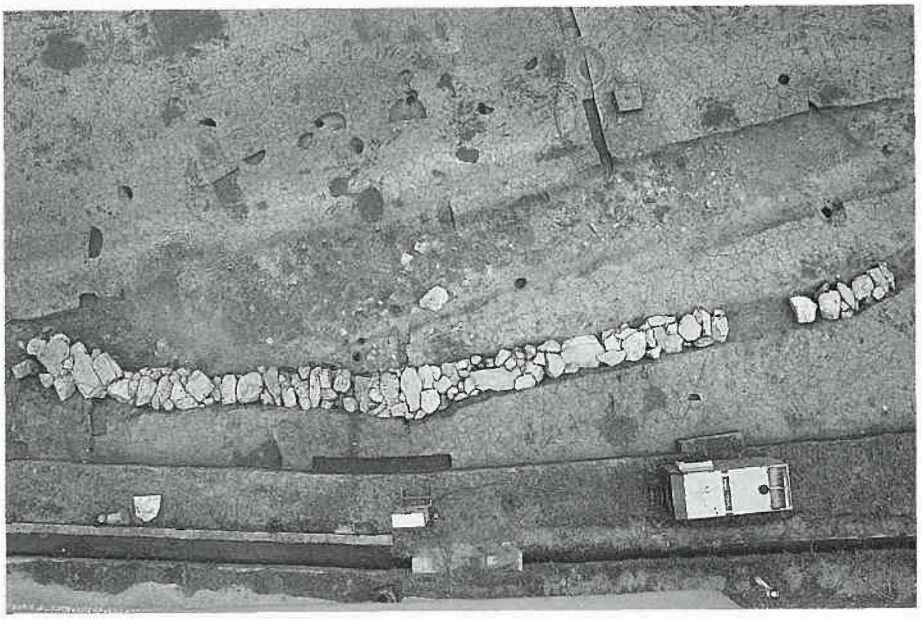


図版12



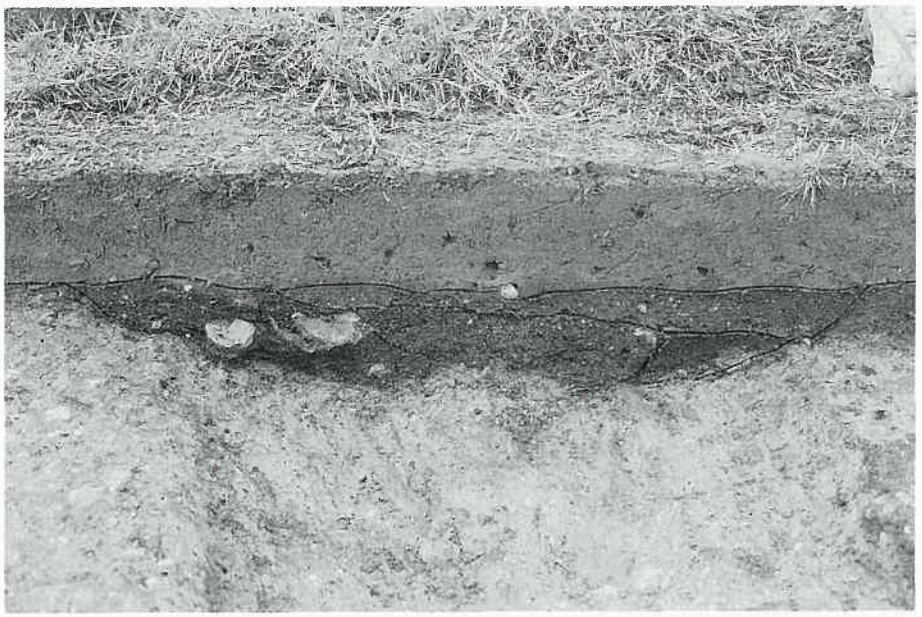
SD-A03・A04
断面（Sec.1）
（南西から）

SD-A03・A04
検出状況①
（南西から）



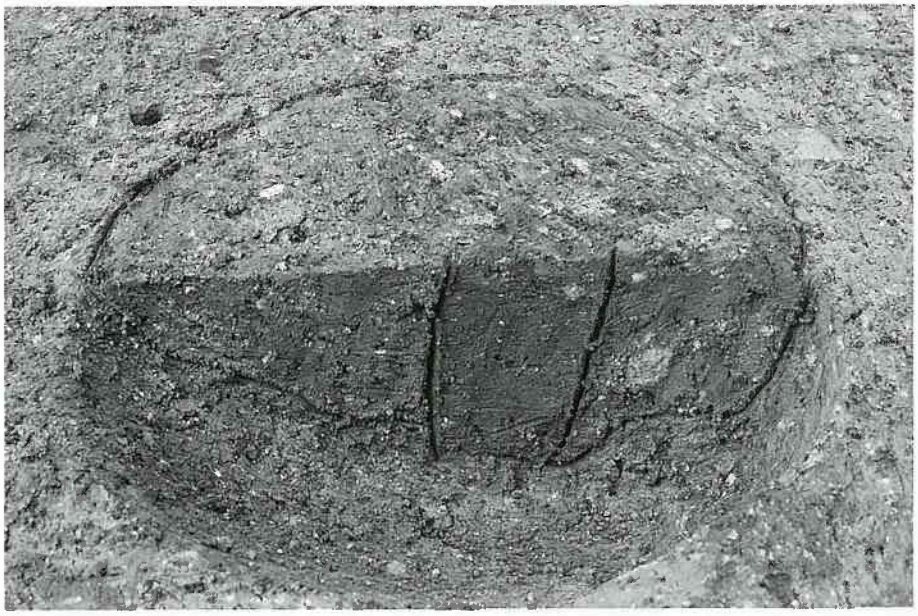
SD-A03・A04
検出状況②
（北西から）

SD-A05　断面
（南東から）

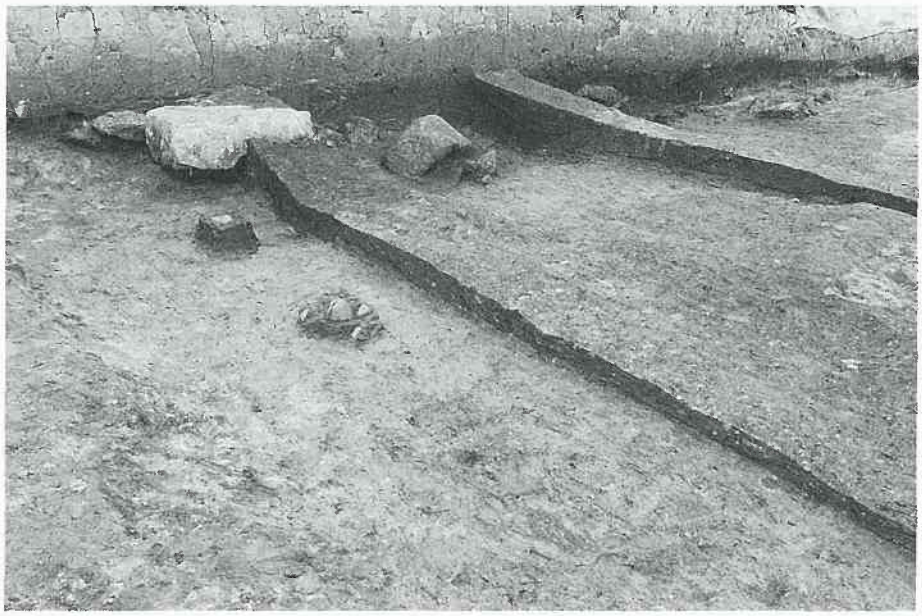


SD-A05　検出状況
（南東から）

P-A24　断面
（東から）

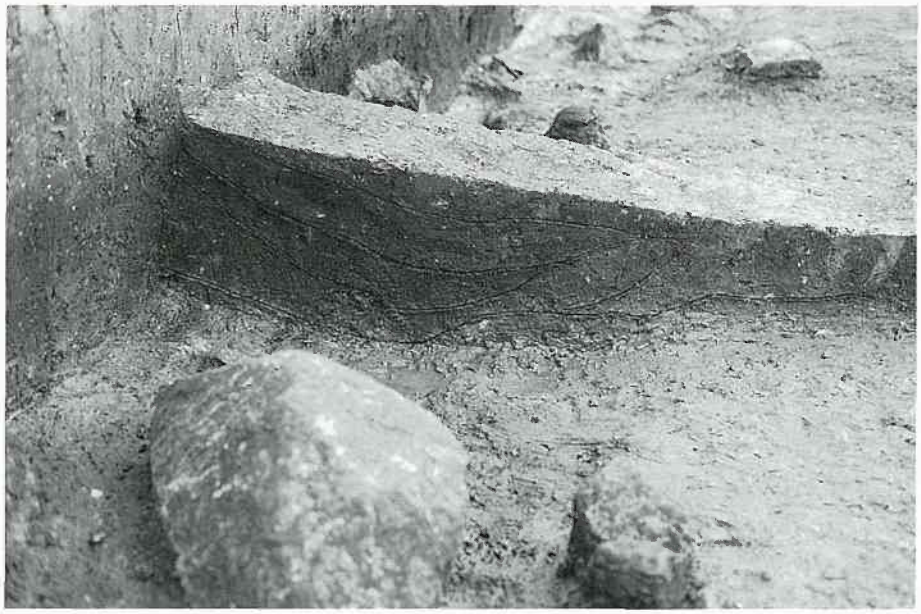


図版14



SX-A01　断面
（南から）

SX-A01　断面１（Sec.１）
（南西から）

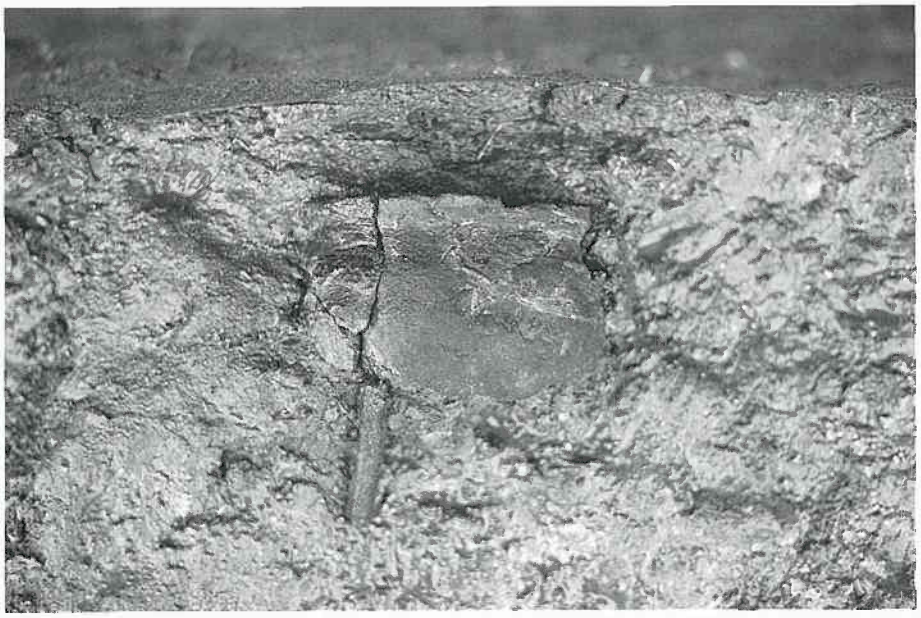


SX-A01　断面２（Sec.２）
（南西から）

SX-A01
遺物出土状況①

SX-A01
遺物出土状況②

SX-A01
遺物出土状況③



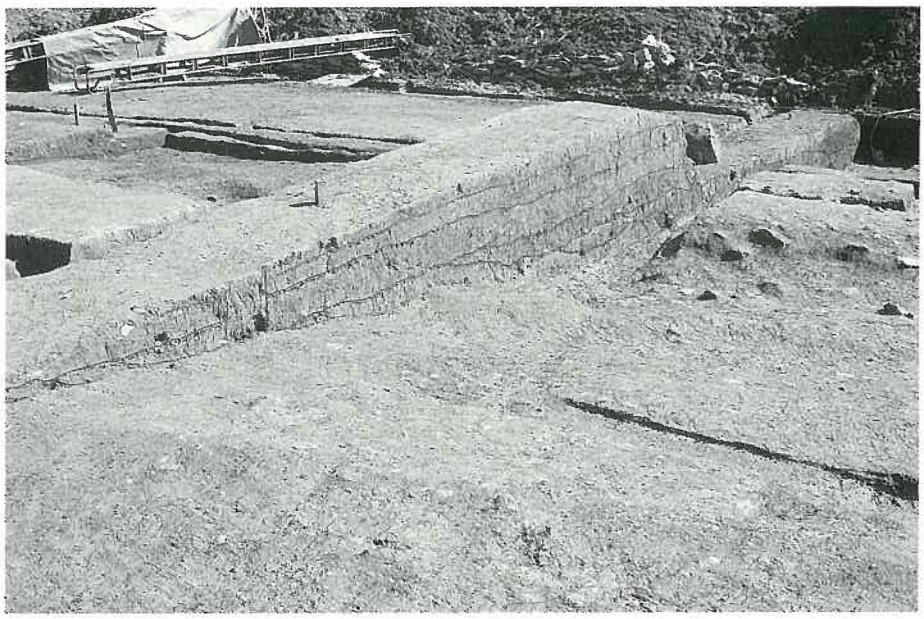
図版16

SX-A01　検出状況
（南東から）

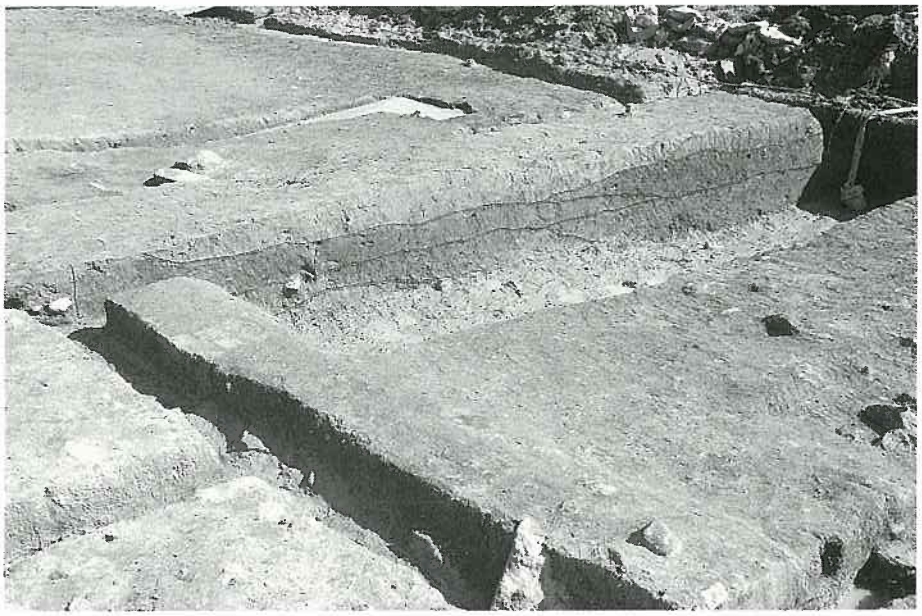
SX-A01・SD-A01
検出状況
（南西から）

A区　北東半全景
（南西から）

B区　横断面２
（Sec. 2）①
（西から）

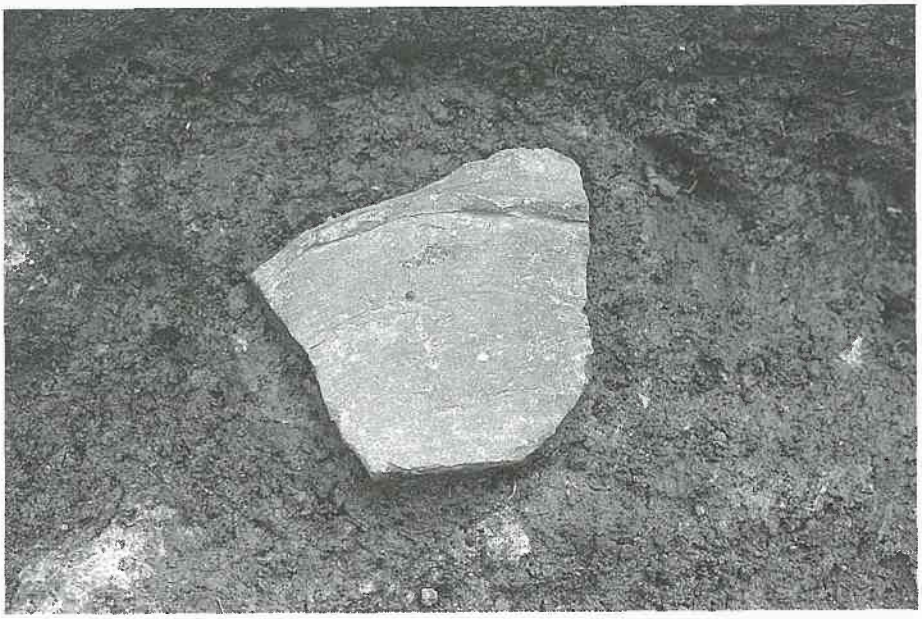


B区　横断面２
（Sec. 2）②
（西から）

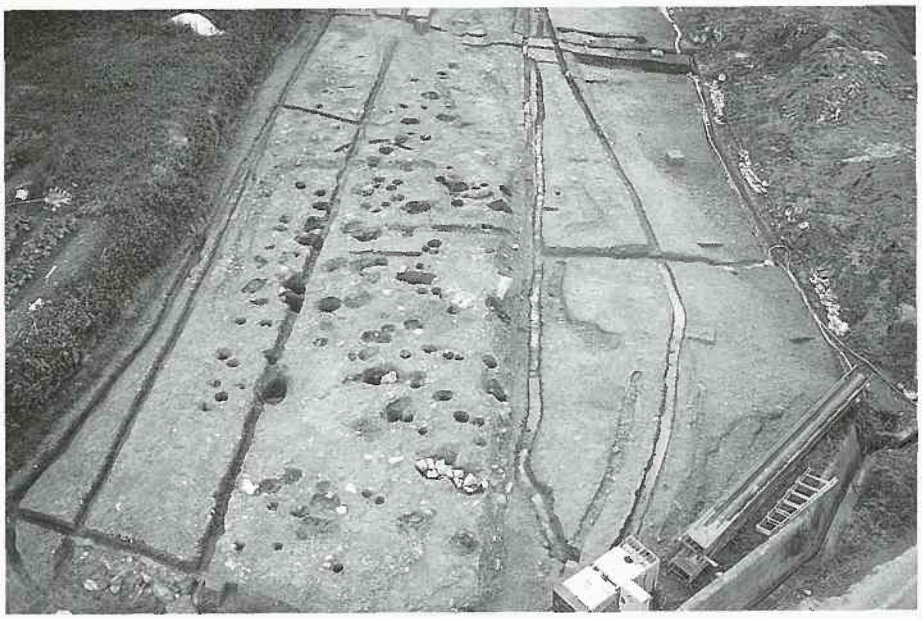


B区　横断面３（Sec. 3）
（西から）

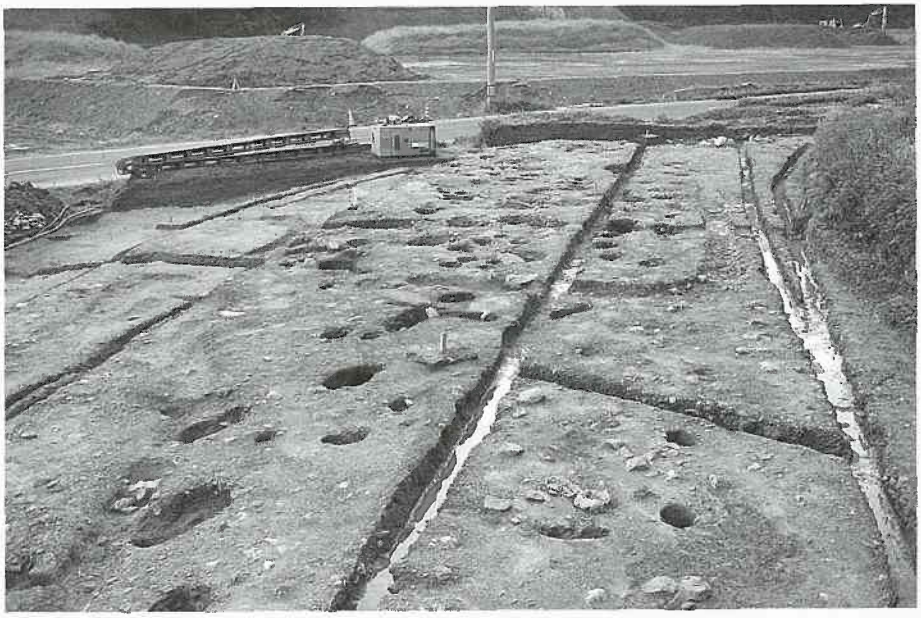
図版18



B区　遺構外
遺物出土状況



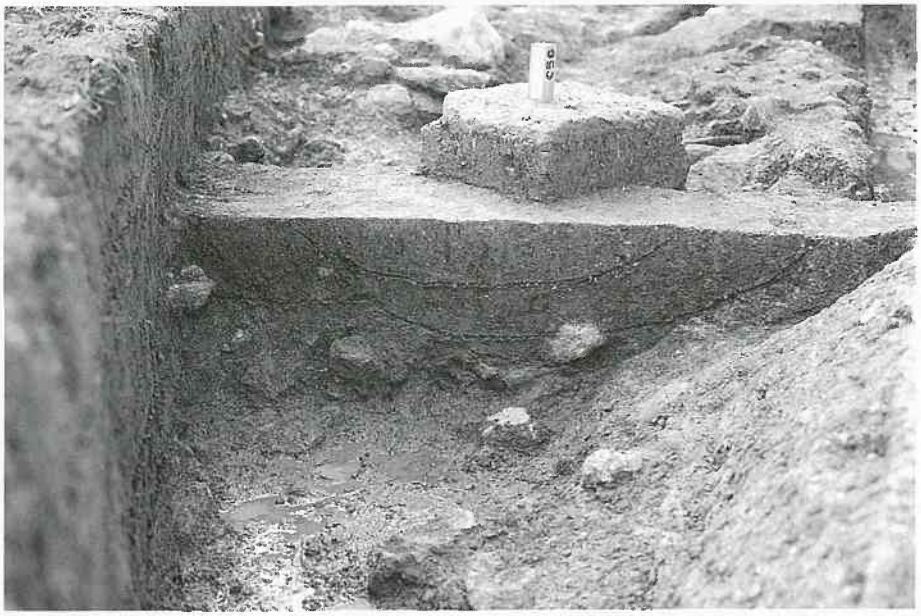
SB-B01　周辺①
（南から）



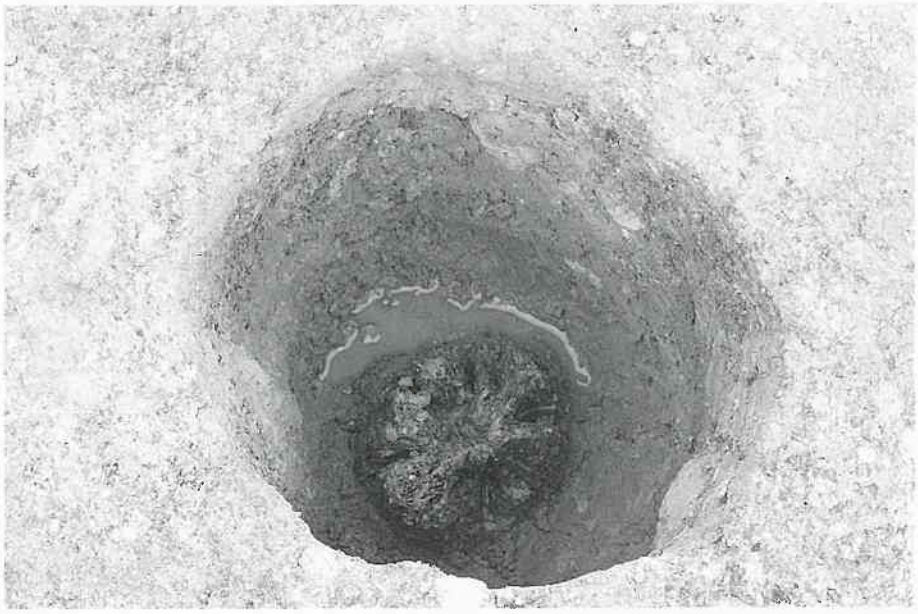
SB-B01　周辺②
（北から）

SK-B01・B02
検出状況
（南東から）

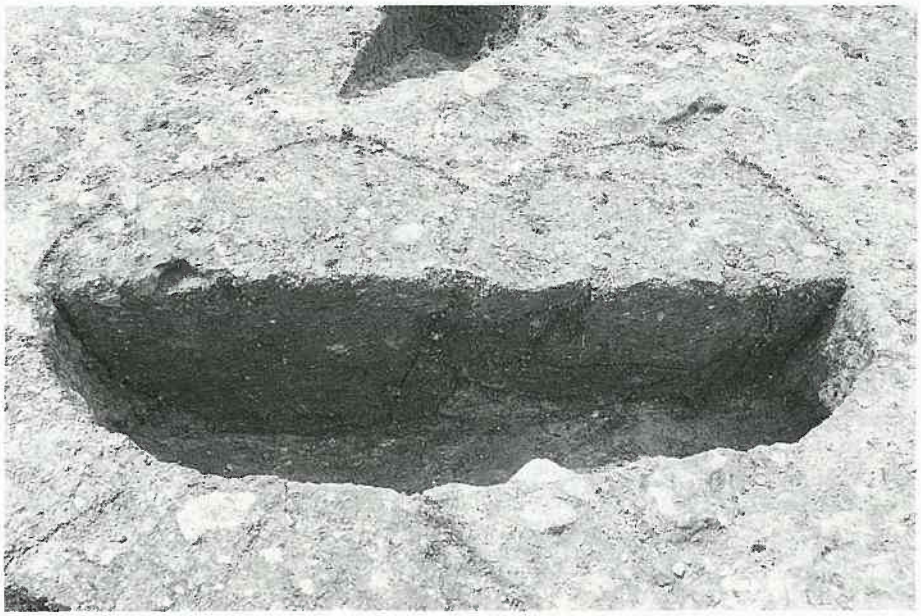
SD-B02　断面
（南東から）



P-B61　検出状況
（南から）

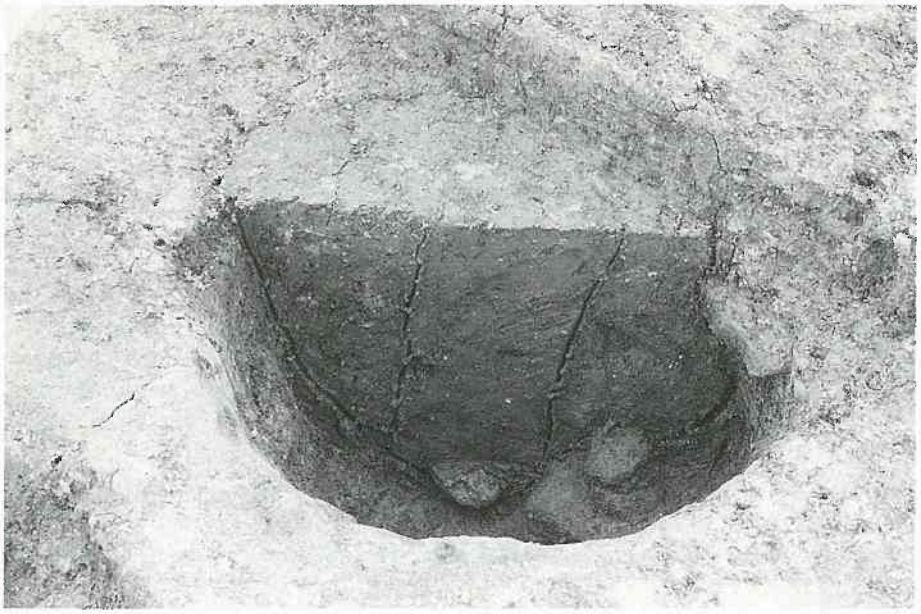


図版20

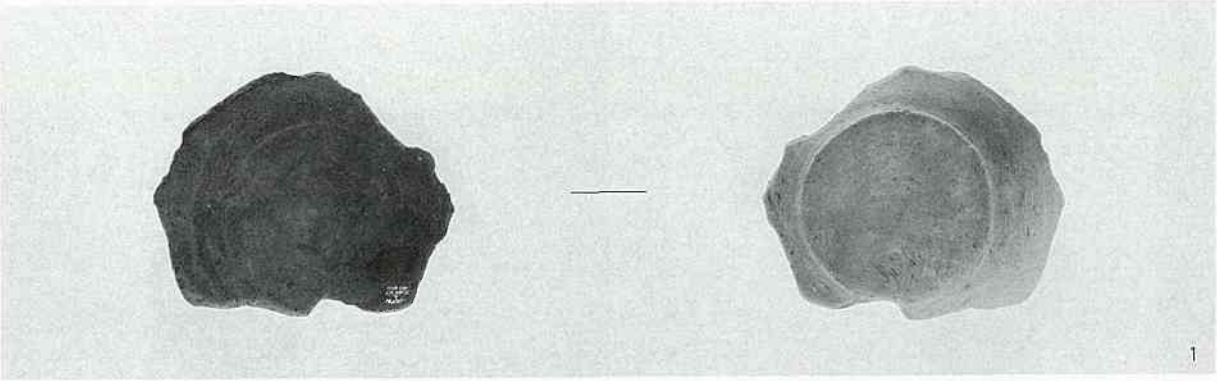


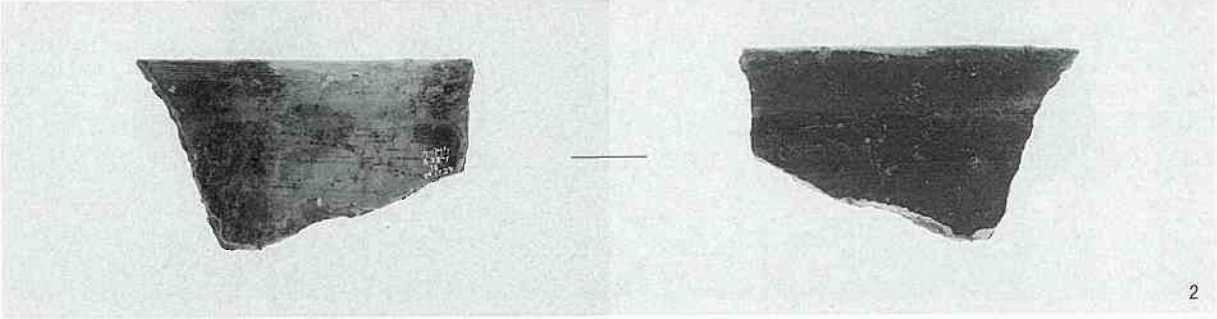
P-B28　断面
（南東から）

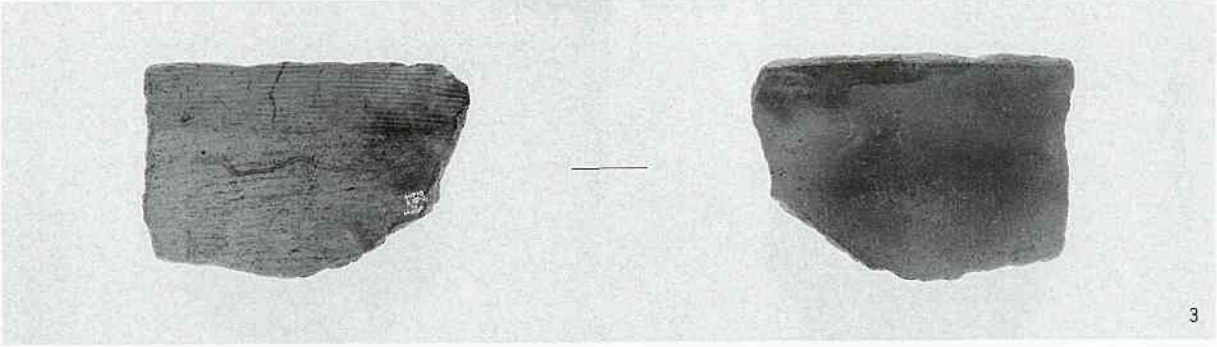
P-B107　断面
（南東から）



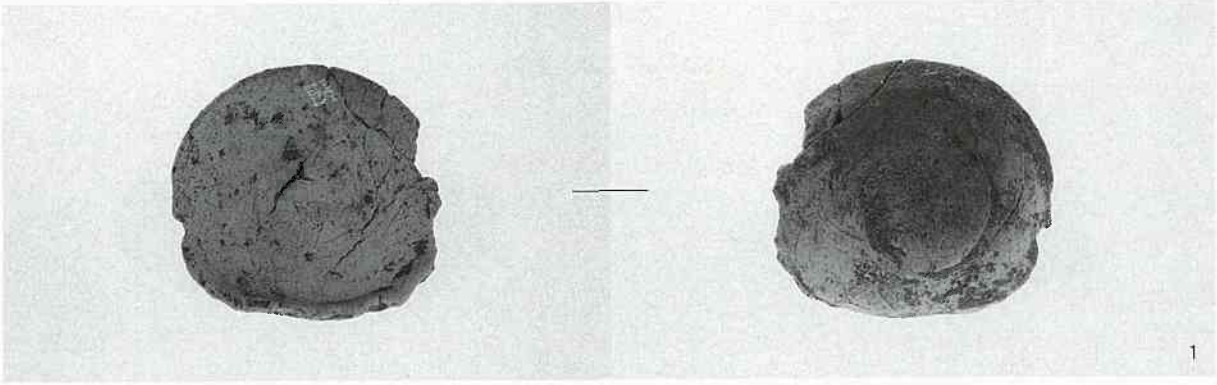
P-B120　断面
（北から）



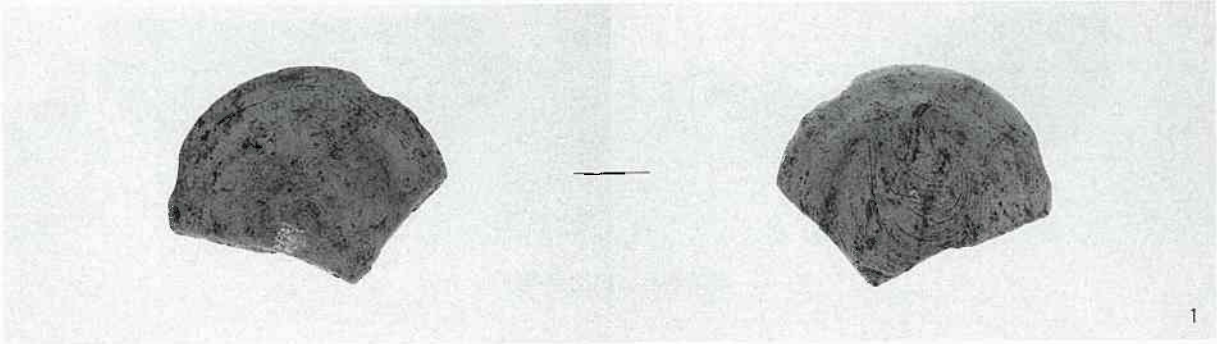




SD-A02　出土遺物

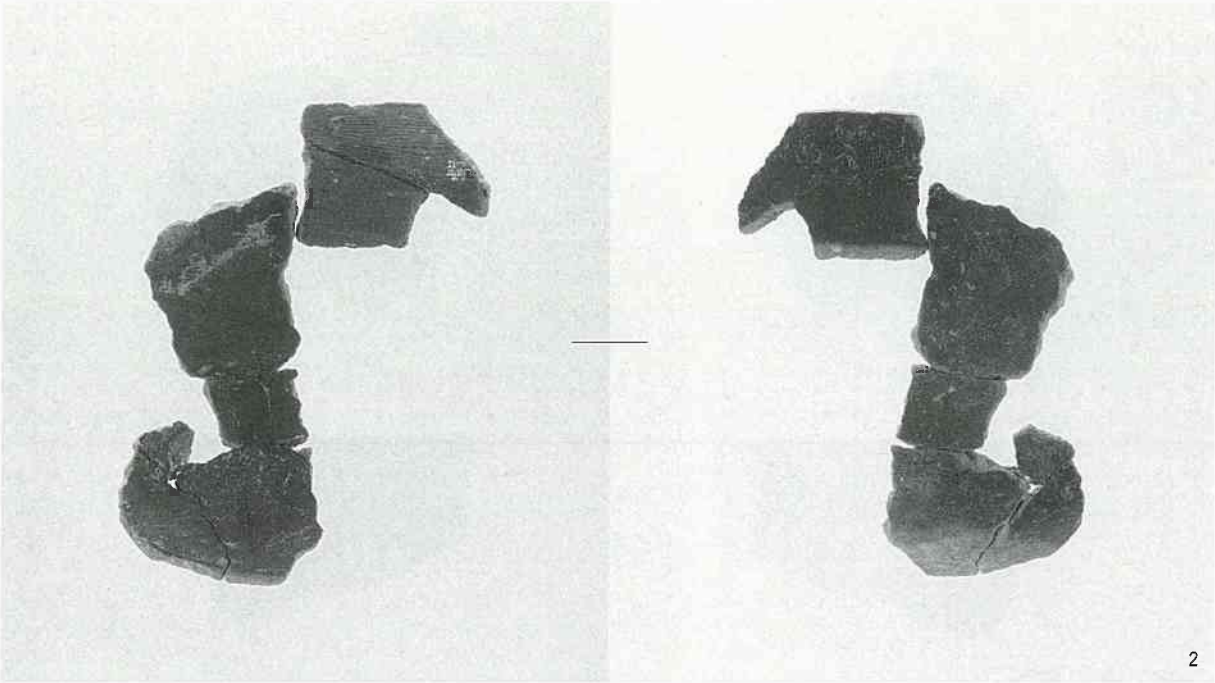


SD-A03　出土遺物

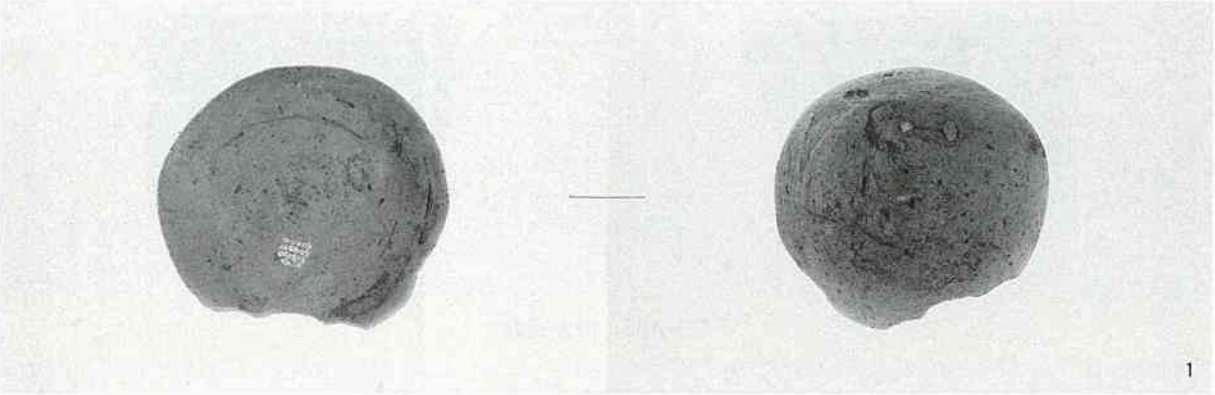


SD-A04　出土遺物(1)

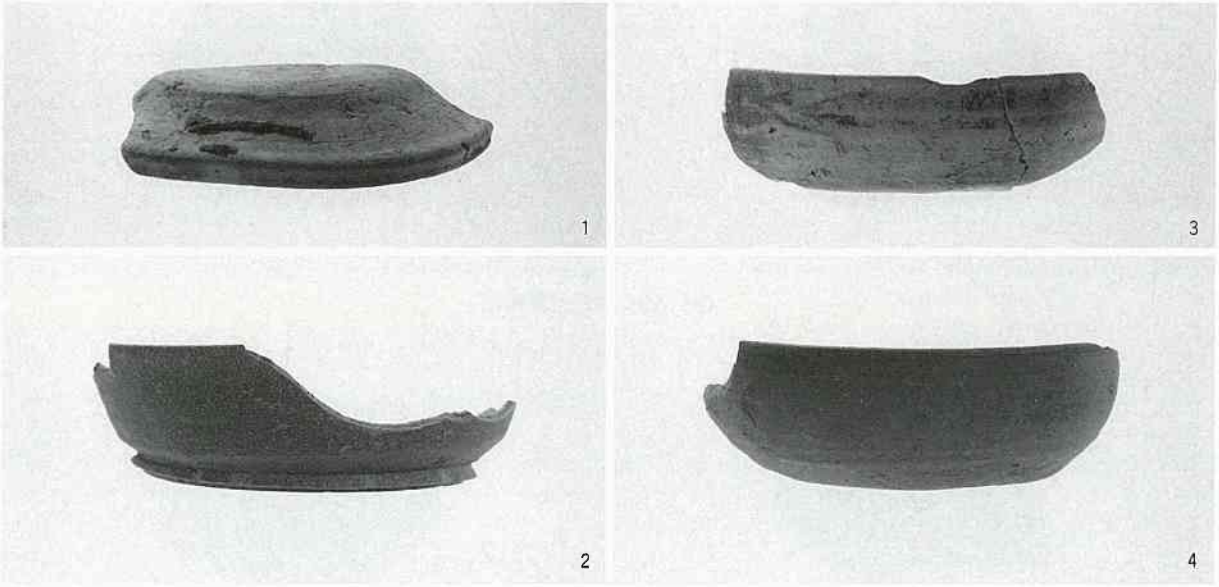
図版22



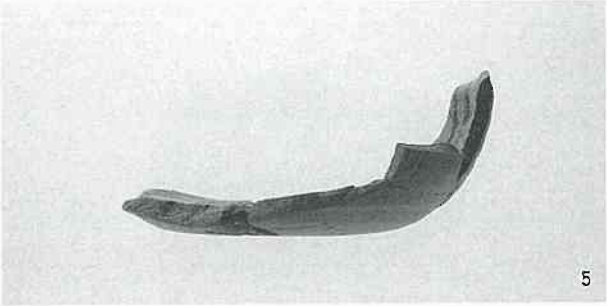
SD-A04　出土遺物(2)

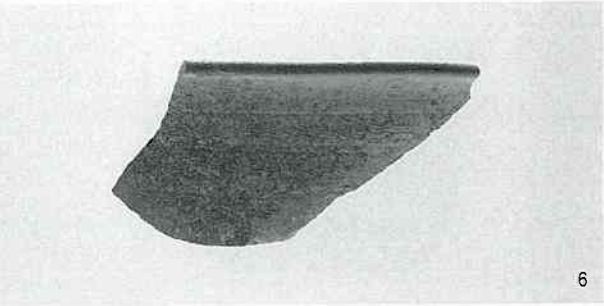


SD-A05　出土遺物

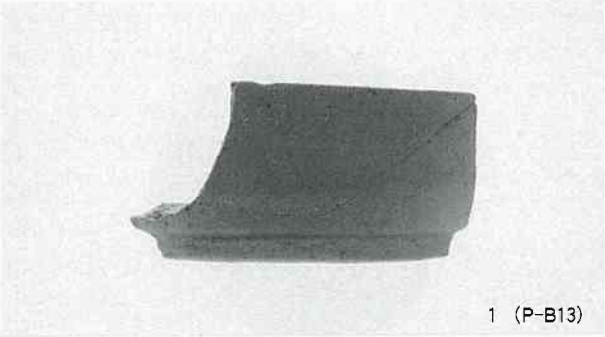


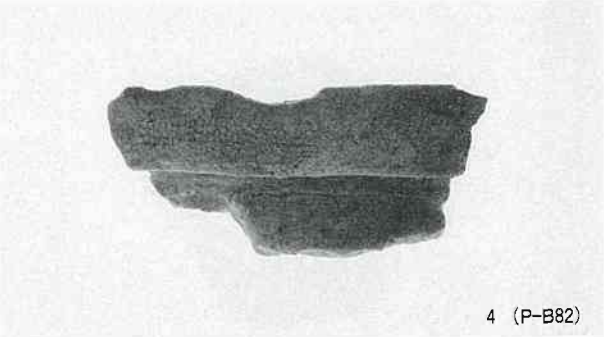
SD-B03　出土遺物(1)

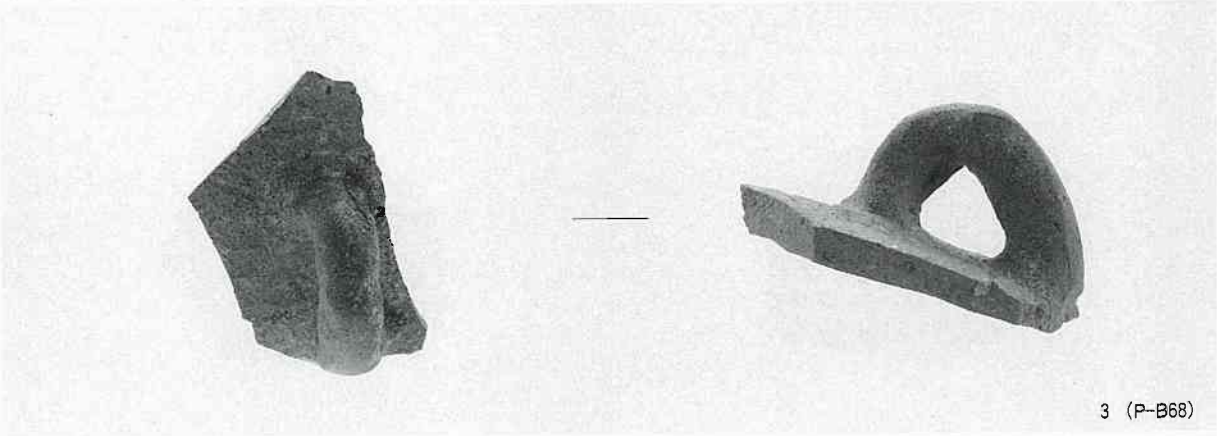


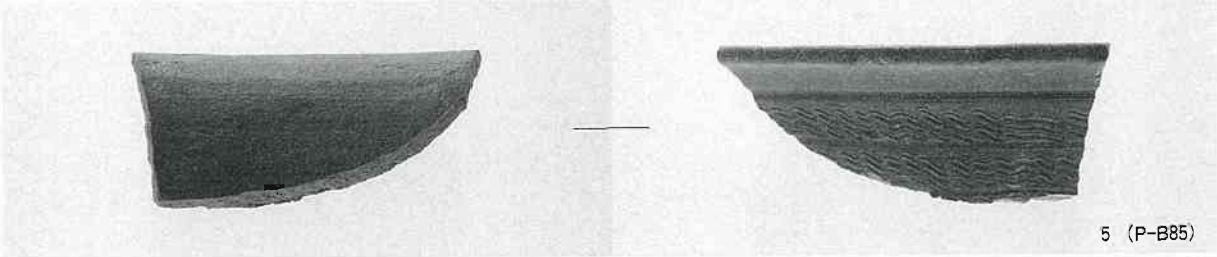


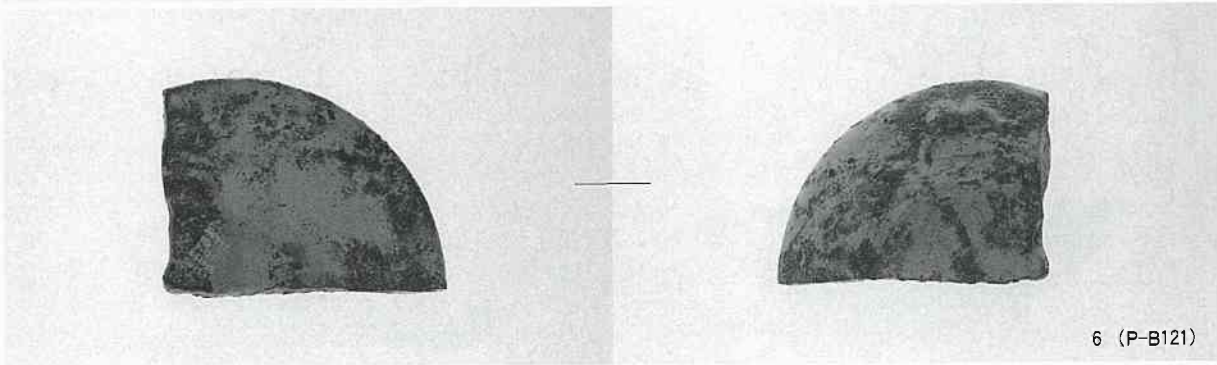
SD-B03　出土遺物(2)



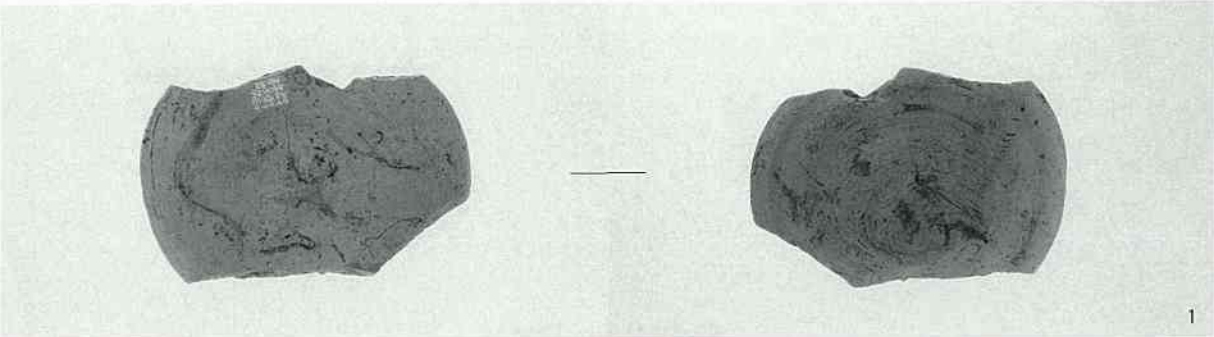


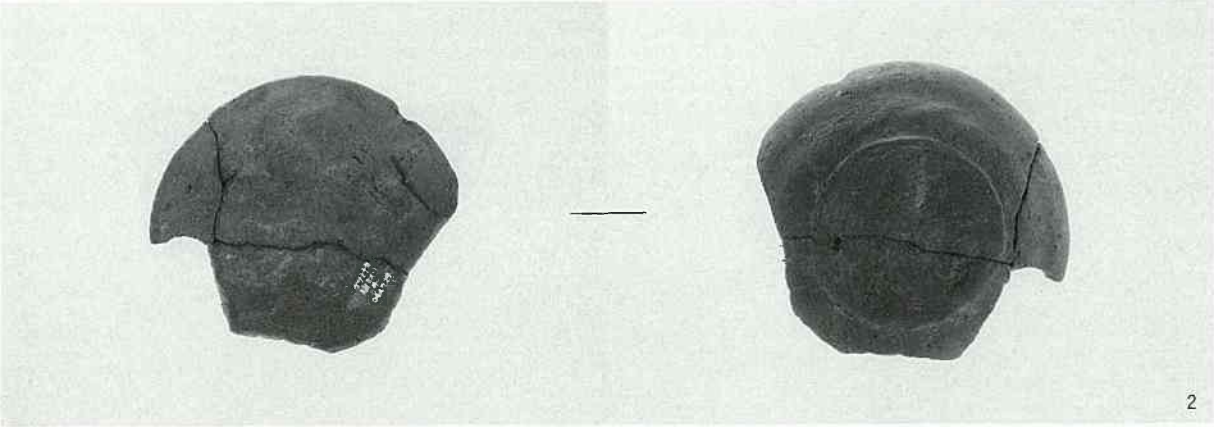


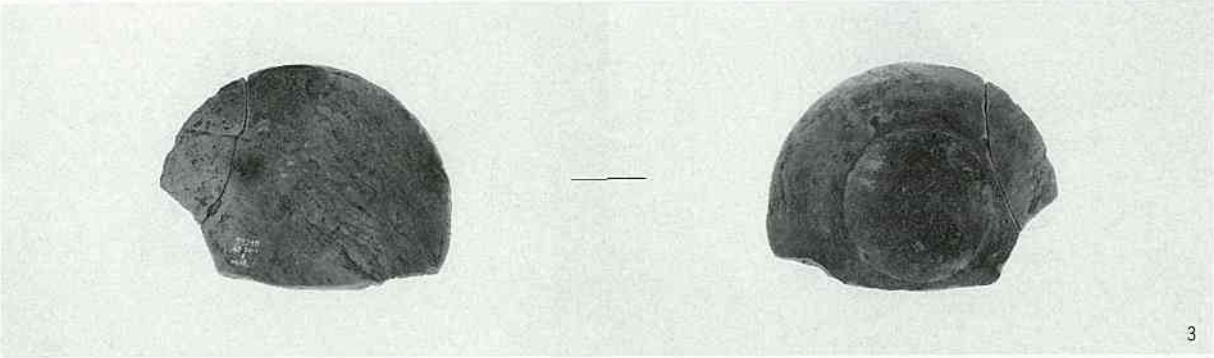


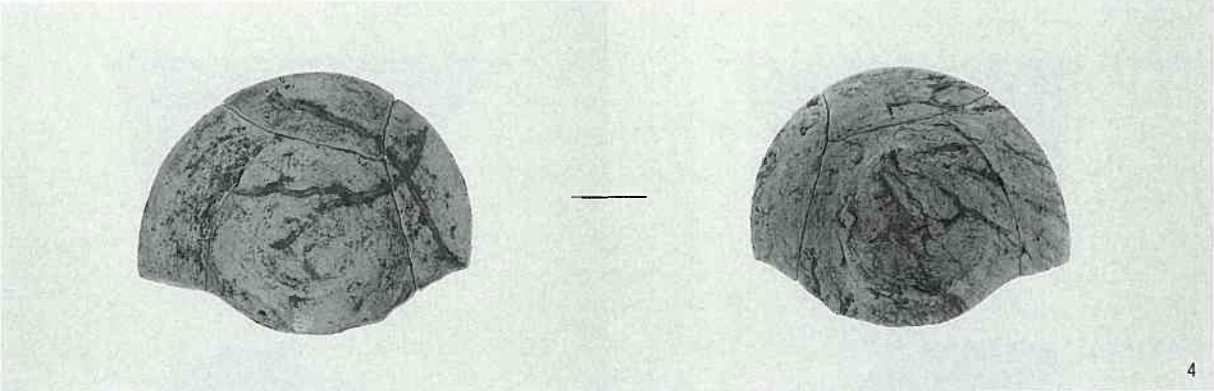


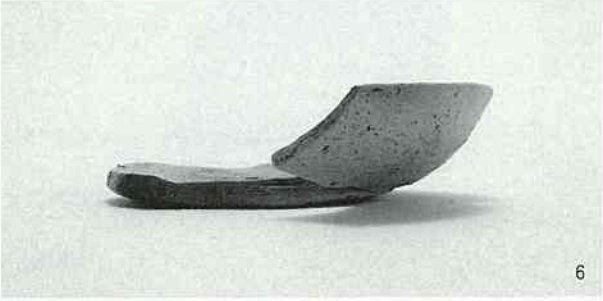
Pit内　出土遺物



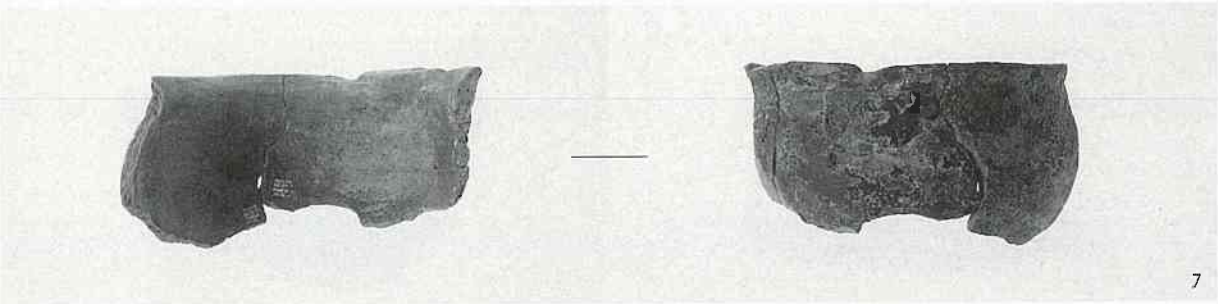


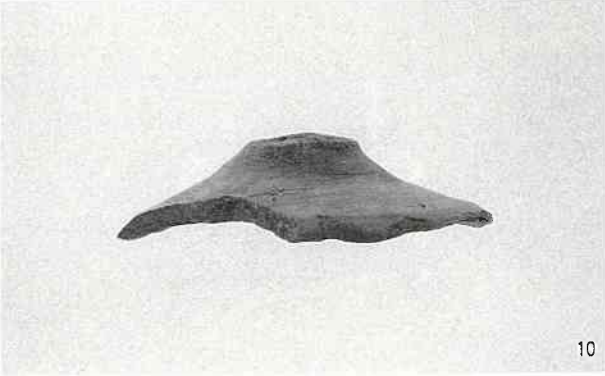


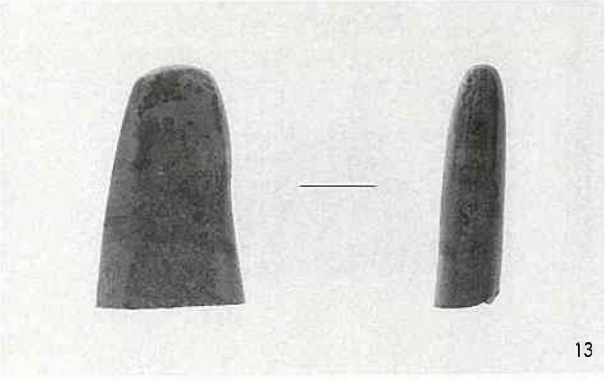




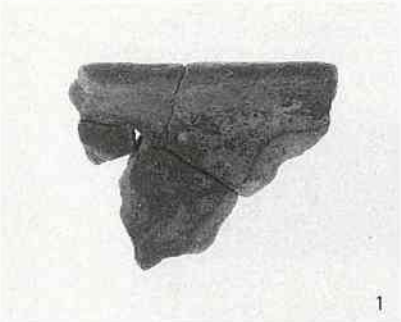
SX-A01　出土遺物(2)

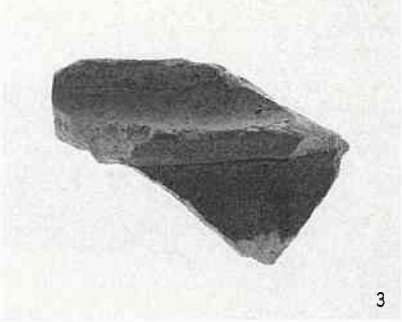


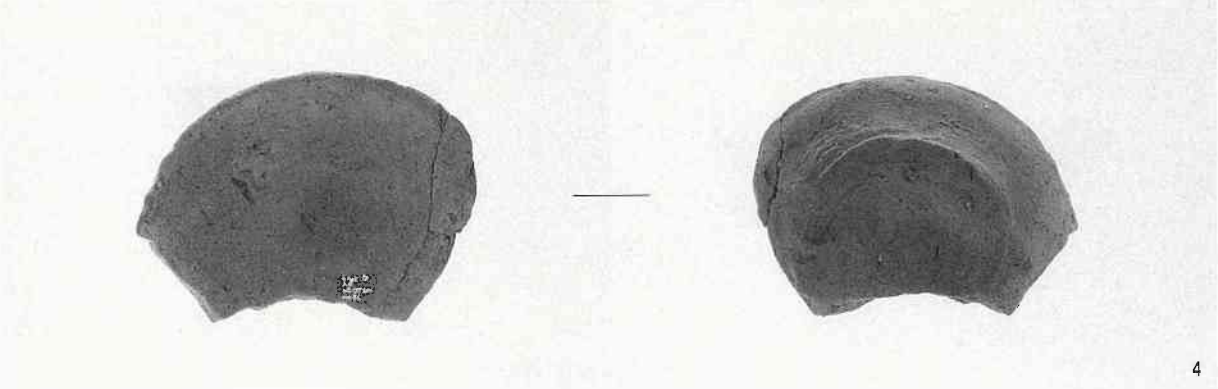




SX-A01　出土遺物(3)

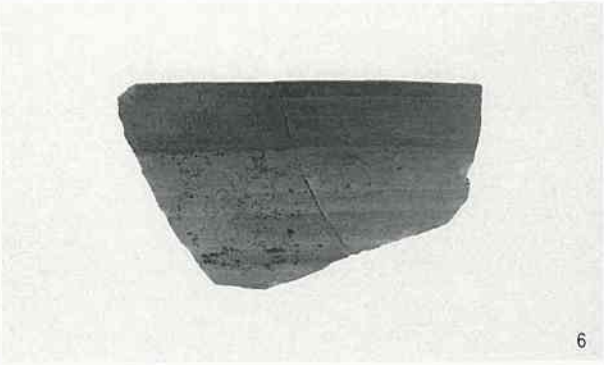


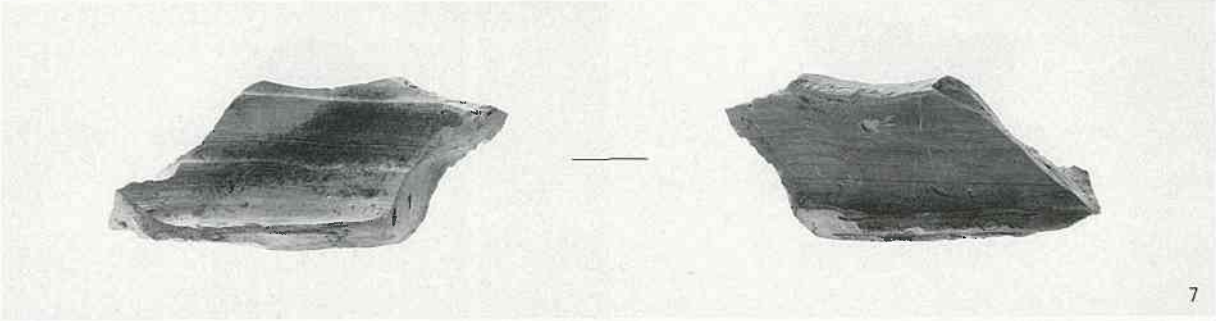


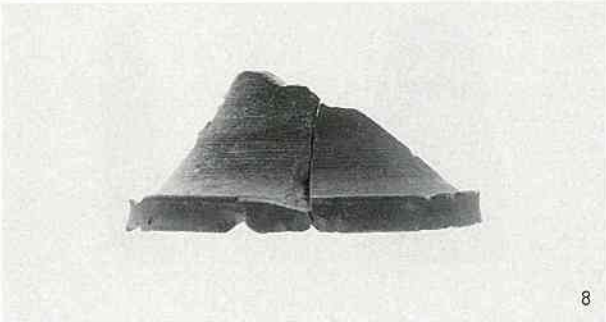


A区　遺構外出土遺物(3)

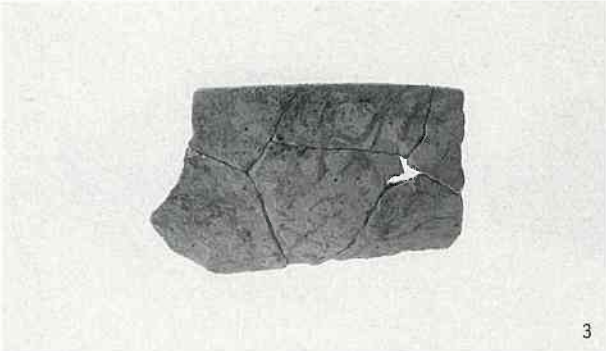
図版26

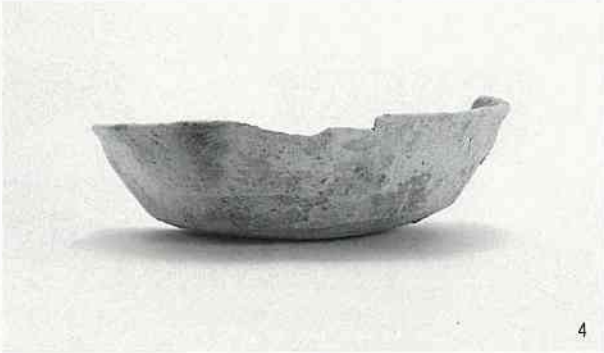


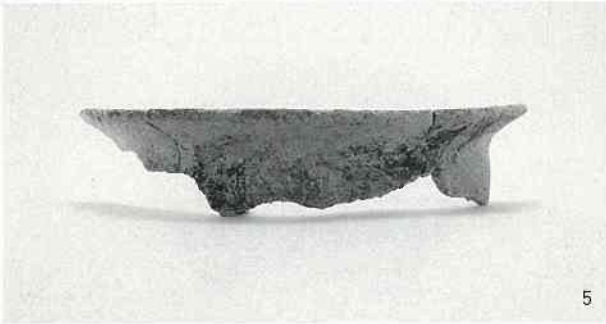




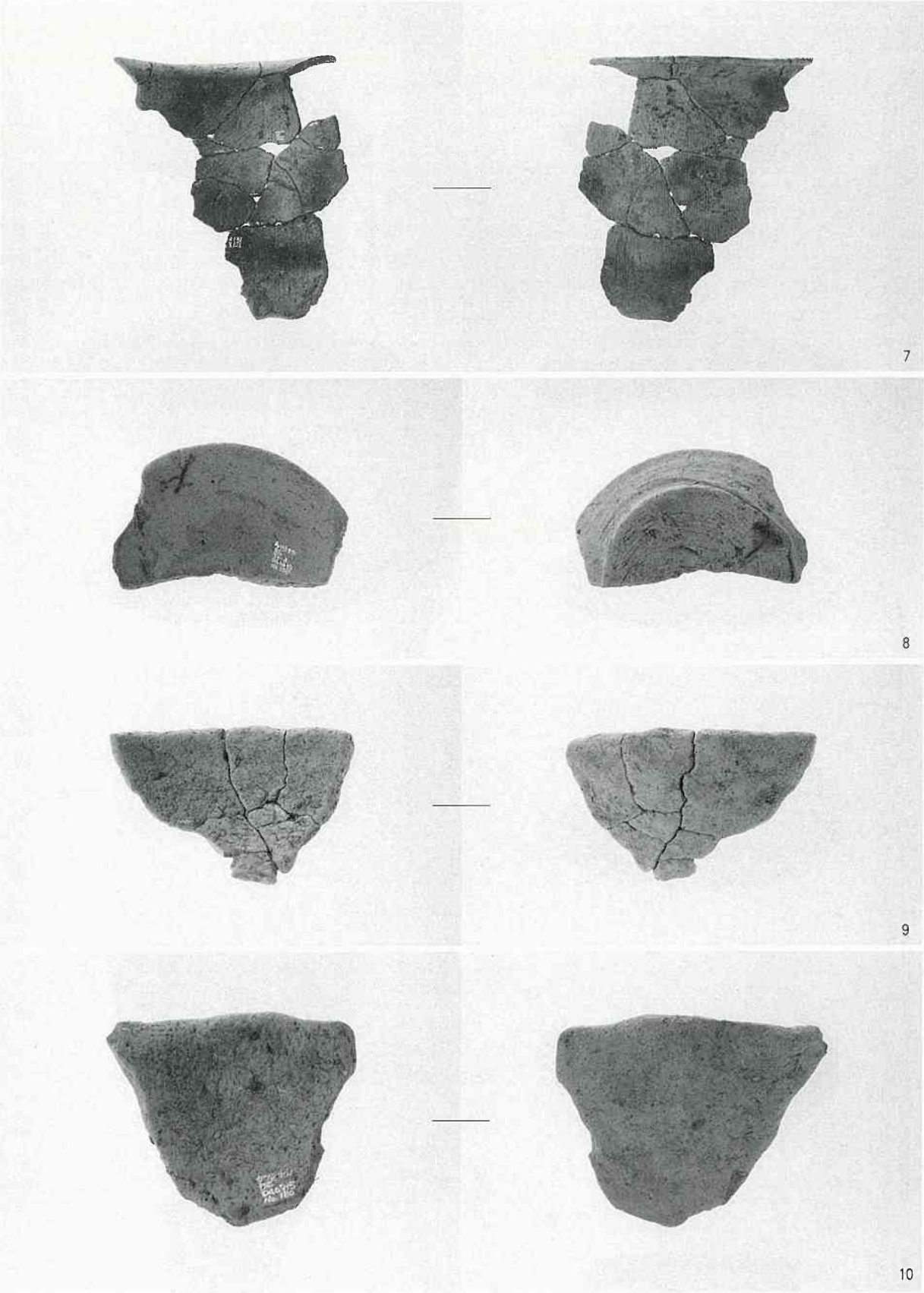
A区　遺構外出土遺物(4)





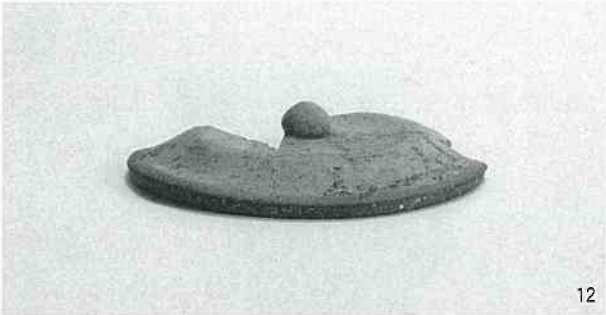


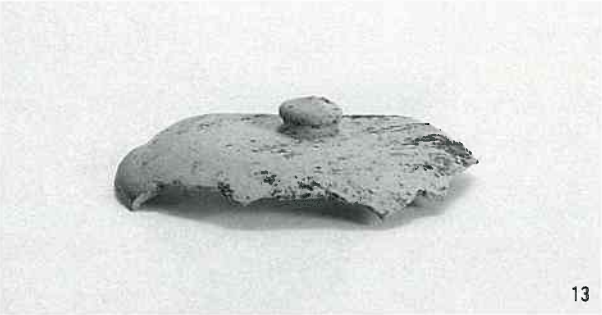
B区　遺構外出土遺物(3)



B区　遺構外出土遺物(4)

図版28


12

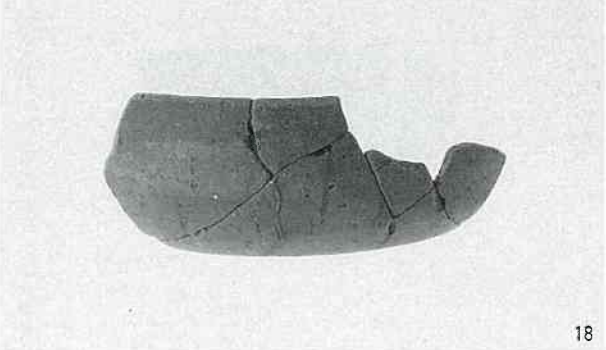

13

14

15

16

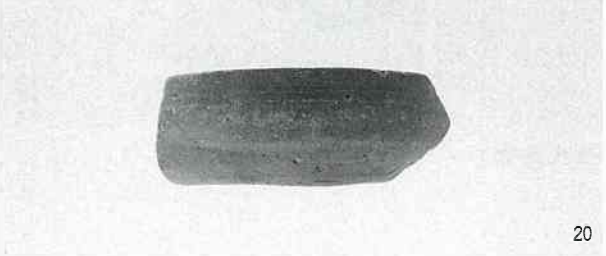
17


18

21

19

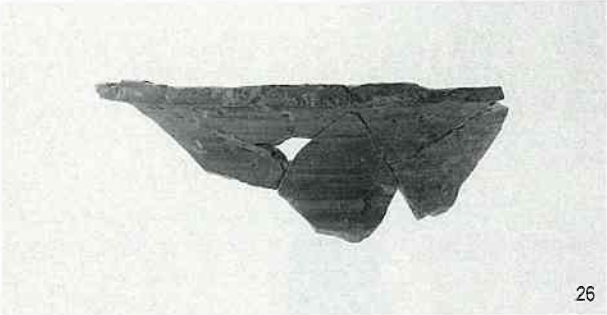
22


20

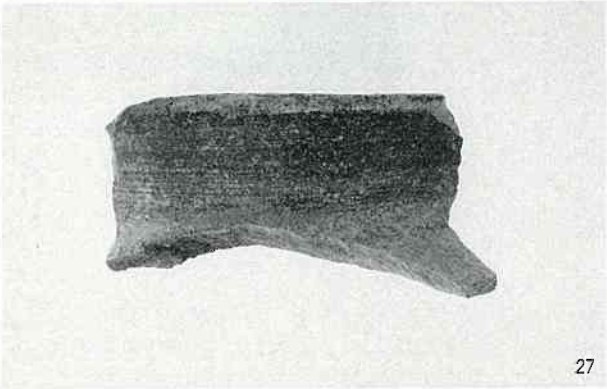
29

B区　遺構外出土遺物(5)

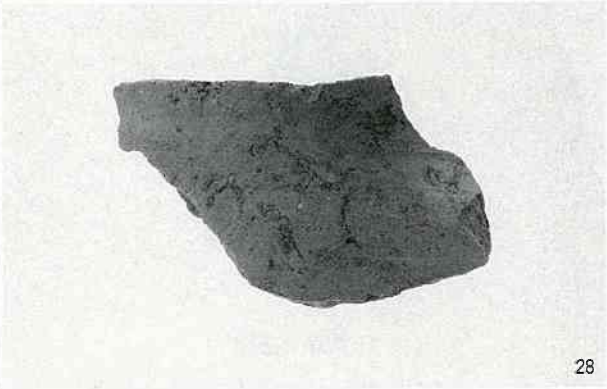
23

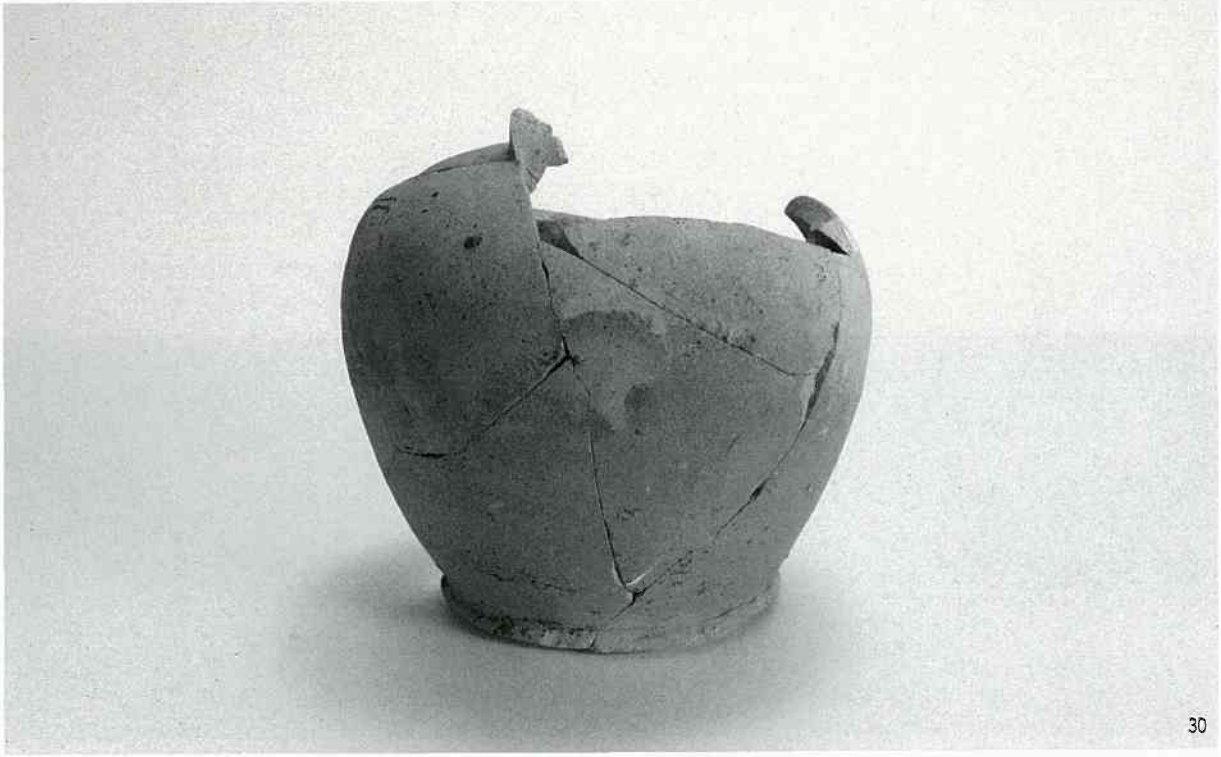

26

24


27

25


28


30

B区　遺構外出土遺物(6)

図版30

P-A02　柱根

P-B61　柱根

内海中１号墳（仮称）（北西から）

報告書抄録

ふりがな	うつみなかてらのたにいせき
書名	内海中寺ノ谷遺跡
副書名	県営内海中地区ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（第1冊）
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	藤本隆之
編集機関	財団法人　鳥取市文化財団
所在地	〒680-0015　鳥取県鳥取市上町88　　TEL　(0857) 23-2410
発行年月日	西暦2005年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
内海中寺ノ谷遺跡 （うつみなかてらのたにいせき）	鳥取市 内海中 （とっとりし うつみなか）	31 201		35° 30′ 30″	134° 6′ 25″	20040701 ～ 20041029	1,451m²	ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
内海中寺ノ谷遺跡	集落	奈良時代後半 ～ 平安時代初頭 平安時代後半 鎌倉・室町時代	掘立柱建物　1棟 柵列　6列 土坑　5基 溝状遺構　16条 柱穴、ピット　148基	弥生土器 土師器 須恵器 瓦質土器 製塩土器 陶磁器 （白磁、青磁、天目、染付等） 木製品 （柱根、部材） 石製品 （砥石）	掘立柱建物、柵列 内海中所在城跡（仮称） 内海中1号墳（仮称）

内海中寺ノ谷遺跡

—県営内海中地区ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書—
（第１冊）

平成17年３月31日　印刷・発行

編集・発行　財団法人　鳥取市文化財団
印刷所　勝美印刷株式会社